

この素晴らしい機竜使いに祝福を！

ナカタカナ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ストーカー女に撲殺された少年は蒼い髪の女神によつて異世界へと転生する。

その際に渡された転生特典は最弱無敗の神装機竜の機竜だった。色々あり、パンツ脱がせ魔の少年や宴会芸の女神、頭のおかしい爆裂娘やドMクルセイダーたちと異世界で冒險することになる…

## 目 次

この素晴らしい機竜使いに祝福を！

この素晴らしい機竜使いに祝福を！

始まりの街アクセル

悪いがお前には死んでもらう・・・なんちゃって

お説教の時間ですよ

回想編 魔王軍幹部

デュラハン襲来

支配者の神域

仲間から見たバサラ

湖の浄化

魔剣の勇者

魔剣使いと機竜使い

ベルディアさん再来

アガレス・・・まさか・・・

特別報酬・・・

この素晴らしいパーティに祝福を！

冬将軍到来

ダクネス

パーティ交換？

パーティ交換？2

機竜とは

ぼつち少女と王都で買い物

ぼつち少女のパーティ入り

ぼつち少女の初陣

サキュバスのサービス

食後の語らいと戦争

緊急クエスト発生

決意

デストロイヤー散るツ！

一騎当千 神装機竜無双!!

機竜使いの王城入り

ぶつ飛べ有象無象！バーストツッ!!!

神装機竜無双からの・・・○○○○無双

浸食せよ

失意の中で、そして・・・

この素晴らしい機竜使いに祝福を！  
この素晴らしい機竜使いに祝福を！

「霧姫 羽沙羅さん、ようこそ死後の世界へ」

目の前には蒼い髪をした美少女が立っていた。

死後の世界・・・何故、俺が死後の世界に来ないといけなくなつたのかを思い出す。

そう、あれは確か学校の帰りだつた。

俺は中学三年生で野球部だつた。といつても、部活は引退し、受験シートンということもあり、勉強に熱をいれていたのだ。

いつも通り、学校が終わり、友達と家へ帰ろうとしていたときに事件は起きた。

「あ、危ないッ」

少し離れたところから先生の声が聞こえた。

頭上を見上げると少し小さめの鉢植えが落ちてきた。

「キャツチャーフライだぜ」

俺はなんの危なげもなく鉢植えをキャツチすることに成功した。ボスッと俺の顔面に降りかかった土を除けば完璧だつた。

「だ、大丈夫か？」

ペッペッと口に入つた土を吐き出していると先生が駆けつけてきた。

「ナイスキャツチ」

隣では友人が笑つてゐる。笑い事じやねえぞ。俺じやなつたら下手すると死んでた。

「なんで鉢植えなんか落ちてきたんだろう？」

「さあな、誰かの悪戯じやねえか？この鉢植えつて絶対落ちるところにあるわけないし」

「それもそうだな」

「明日は全校集会か・・・」

「めんどくせえー」

ちよつと危なめの悪戯の犯人を捜すために先生は職員室へと戻り、俺と友人は家に帰る。

「あれ、なんで俺死んだんだ？」

俺は再び前を見る。やはり、蒼い髪をした美少女が立っている。

「あの鉢植え事件のあと、友人と家に帰ったあなたでしたが、運が悪い事にあなたは女性に撲殺されました」

「えつ？」

「覚えていないのも仕方がありません。あなたは家の近くにある公園で受験勉強の息抜きに素振りをしているところに、一人の女性が訪れました。その女性はあなたのストーカーで彼女とイチャイチャしているあなたにムカつき、あなたを眠らせてから素振りに使っていたバットで撲殺……」

「Oh……ストーカーって……」

「なになに……その女性はあなたの隣の席の女の子でぼっちだったところを、あなたに話しかけてもらつたことからドンドン好きになりました……」

蒼い髪の美少女はなにか紙を見つめながらひたすらに俺の死因を読み上げていく。

「その後、告白しようとしたところ、先に隣のクラスの少女に告白されてオッケーをだしたあなたは彼女とイチャイチャして過ごした。それであなたを殺したと……」

「もういいっす。それであなたは誰ですか？」

「私は水の女神アクアよ。あなたにはこれから三つの選択肢を与えるわ。一つ目、天国へ行く。

二つ目、記憶を消去して転生する。三つ目、記憶を持ったまま転生特典というなのチートを貰つて異世界に転生するよ。私個人的には三つ目がオススメよ」

早口で説明する蒼い髪の美少女改め、アクアは急に近づく。

「じゃあ、三つ目で」

「ほんとつ。じゃあ、あなたの転生する世界の説明をするわね」

その後、五分くらいかけて異世界について説明してくれた。

簡単に纏めると・・・

魔王の脅威から異世界を救う。しかし、平和な日本に住んでいた日本人は戦いなんて縁もゆかりもない。

そこで、転生特典というなのチート装備や能力を授けて転生させる。

「ええと、じゃあ転生特典を選んでね」

そういうて、アクアは転生特典が書かれたパンフレットを見せてきた。

伝説の聖剣やら無限の魔力、その他にも色々とチートな装備や能力があつた。

「あの、転生特典つてラノベの能力とかいけますか?」

「できるわよ、なにがいいの? やっぱり アクセラレータ一方通行?」

このアクアという女神、日本担当ということもあり、日本のことは詳しいようだ。

まさか、サブカルチャーまで詳しいとは・・・

「いや、最弱無敗の神装機竜の機竜がいいです」

「ああ、あれね。良いわよ」

「機竜は何種類までいけますか?」

「そうね、最初に汎用機竜と神装機竜を一機ずつ上げるわ。そのほかの機竜は向こうの世界で見つけて契約すれば使えるようにするわ」「なるほど・・・じゃあ、ワイバーンとバハムートをください」

やはり、最初の機竜といえばこの二機だろう。

主人公が使う機竜ということもあるが、超カッコいい。

ラノベが好きな友人に勧められて読んだが、ドハマリした。九巻までしか読めていないのが心残りだな。

「ああ、竜に関してなんだけど、討伐依頼とか出されてしまうから遺跡の最深部に眠らせておくことにするわ」

「ありがとうございます。はあ、敬語使うの慣れないわ」

「それでは、霧姫 羽沙羅さん・・・ブフツ羽沙羅つて」  
「おーい、聞こえてるぞおー俺の名前に文句あるなら俺の両親にい  
え」

「気を取り直して、それではいい人生を」  
アクアが笑いをこらえながらそういうと、俺の視点は一気に変わつ  
た。

## 始まりの街アクセル

俺が異世界に転生して一年が経つた。

俺が最初に転移していたのは遺跡だった。あの女神、機攻殻剣だけ持たしてあとはポイツなんだぜ。ビックリだろ。食料もねえし、水もねえ。

その後、なんとか水と食料を確保し、遺跡に挑んだところボロ負けした。

俺が挑んだ遺跡はティアマトが封印されており、幸い気性が穏やかだつたため、戦闘ではなく俺を鍛えるという方向へ出てくれた。

一ヶ月ほどでなんとかティアマトの試練を乗り越えて認めてもらひ。契約してもらった。

こうして、俺の異世界生活が始まつたのだが、それからは色々あつた。

遺跡を巡り旅をして数々の出会いがあつた。

俺が契約してきた竜はティアマト、テュポーン、ファフニール、リンドヴルム、ドレイク・・・

とまあ、こんな感じで契約してきたのだが、たまたま立ち寄つた王都で魔王軍の襲撃があつた。

本来なら素通りしたかったのだが、なんでも魔王軍が拠点としているところが遺跡だつたらしく、俺は王都で戦いに参加した。

バハムートを纏つて魔王軍を蹴散らしているといつの間にか『黒き英雄』と呼ばれていた。

そこからは王都の騎士団に入れたの、貴族の近衛騎士になれたのなんだかんだった。

まあ、すぐに旅に出たのだが。各地を回りちよつとした大会に出て無敗になつたり、大会でたとくに仲良くなつた人物がいつそのこと冒險者になればといったので俺は始まりの街アクセルへと向かつた。

「ここが、始まりの街アクセルか・・・」

俺が回ってきた街と比べると平和そうな街だつた。魔王軍との戦

ソードデバイス

いから一番離れていることがあるのだろう。本当に穏やかな街だ。

街を歩いていると冒険者ギルドと書いてある看板を見つけた。中に入ると酒場になつており、さつそく受付カウンターに向かつた。

「ようこそ、始まりの街アケセルへ。冒険者登録ですか?」

「ああ、そうだ、じゃなくてです」

では登録費用の1000エリスをいたたきます】

俺は金髪の受付嬢ルナさんというのだか その人にお金を払う  
では、ここに名前を記入してください。それでは、こちらの水晶に

「触れてください」

この世界の文字でキリヒメ持つてきた水晶に手を振れる。バサラと記入したあと、ルナさんが

「ツなんですかこの数値は筋力、敏捷、生命力・・・全部けた違いのステータスです。しかもスキルも発言しています。『竜との絆』なんてスキル初めて見ました。これならどの職業でもつけますよ。つて、既に職業がありますね。機龍使いですか」

「えっと、これで登録つて終了ですか？」

「はい、冒険者ギルド一同はあなたの活躍を期待しています」

ギルドで登録を終えた俺は簡単なクエストを発注した。ジャイアントドードと呼ばれる巨大なカエルの討伐だ。

まあ、この程度のモンスターなら機竜を使わなくても機攻殻剣だけ  
で戦えるだろう。

と思つて街の外に出たのだが

「かじゆまさあああああん たすけてえええええ

「あのーそろそろ助けてもらつていいですか？呑み込まれちゃい

九

いかにもヤバそうなパーティーを見つけた。

「助けた方がいいよな？」といふか、あの蒼い髪はアクラアじやねえか」

俺はすぐにワイバーンの機攻殻剣を手に取り、魔法使いっぽい格好をした少女を呑み込もうとしているカエルを切り裂く。狭いところでは機竜が使えないの一応剣術も使えるようにはしている。

「だ、だれかしならねえけど助かつた」

カエルを三匹ほど倒すとカズマと呼ばれていた少年が俺の方へと来た。

「いや、気にするな。あんた転生者だろ？」

「お、おうそうだが、あんたもそうなのかな？」

「ああ、そこの女神に転生させてもらつた。なんで女神なのにカエルに負けるんだよ」

俺はカズマたちと街に戻つたのだが、その道中で色々と話を聞かせてもらつた。

なんでもカズマは転生特典にアクアを選んだそ�なのが、その非常に頭が弱いらしく、しかも戦闘もアンデッド戦以外では使えないし、他のパーティメンバーも初心者らしく、クルセイダーなのに体力が低かつたり、アークウェザードなのに魔力が少ないとといった問題ありなメンバーらしい。

まあ、初心者だから仕方がないと思つてはいる。

「そこでなんだが、このとーりです。あなた様にパーティメンバーに加わつてもらいたいのです」

「まあ、俺も冒険者には今日なつたところだし、なにもわからねえからいいけど」

「本当ですかッ。ありがとうございます」

カズマが必死に頭を下げてきたので了承したのだが、このときの俺は知らなかつた。

誰が体力の低いクルセイダーだ？ 誰が魔力の少ないアークウェザードだ？ 誰がアンデッド戦以外では使えないアークプリーストだ？

誰が予想できる耐久力だけは馬鹿みたいに高いドMクルセイダーに、爆裂魔法とかいう一発使つたら倒れてしまうような頭のおかしい爆裂娘に、水の女神どころか宴会芸の女神・・・いや、借金の女神で

どいつもこいつもヤバい奴しかいないだなんて・・・誰が予想できる  
?

そして、俺をだましたカズマよ。お前も同罪だからなツ

悪いがお前には死んでもらう・・・なんちやつて

俺がカズマたちのパーティに入つた翌日、俺達は再びクエストを受けていた。

受けたクエストはジャイアントドードの討伐クエストで昨日と一緒にだが、今日は昨日受けた奴よりも多く討伐しなければならない。

「ええと、改めて新メンバーのキリヒメ バサラだ。バサラって呼んでくれ」

「俺はカズマ。職業は冒険者だ。よろしくな」

「しつていると思うけど、私は水の女神アクアよツ」

「はいはい、それでそちらの二人は?」

俺は視線を金髪の美女と赤い目が特徴的な少女に移した。

「私はダクネスだ。クルセイダーだ」

「我が名はめぐみんツ紅魔族随一の魔法の使い手にしてばくれ  
「おーいめぐみんちゃん。ちゃんとした挨拶をしようねえ、ほらバサ  
ラ君が困ってるじゃないか」むぐむぐ」

カズマはめぐみんの口を手で押さえて声が出ないようにしている。  
そして、そのまま少し離れた所へいった。

「なあ、めぐみん。お前のことは魔力の少ない優秀なアーラウイ  
ザードつていつてるんだ。だから、話を合わせろ。アーラウイは昨日アク  
アが話した通り、竜の力を纏い戦う騎士なんだ。しかも、その力は強  
力過ぎるあまり普通の敵には使わない。王都ではちよつとした有名  
人らしい。だから、今ここで抜けられては困るんだよ」

「わ、わかりました。紅魔族流の名乗りをできないのは嫌ですが。  
私はその竜の力を見てみたいですツ」

「そうだ。軽く調べたところによると、アーラウイは正体を隠して戦つ  
ていたそうだ。なんでも、王族や貴族に目を付けられてしまふからら  
しいが、それでも正体を隠しながら魔王軍を殲滅する英雄だ」

「カツコいいですツ」

「そりだらうそりだらう。ということで戻ろうぜ」

二人でコソコソと話をしたあと、戻ってきたのだがなにやらめぐみ

んの表情がおかしい。

なにか尊敬する師匠を見るような目だ。

「さあ、バサラさん早くクエストに行きましょう」

俺は不自然なまでに腰の低いアクアに手を引っ張られジャイアントドードの出現場所まで移動した。

「ジャイアントドードを発見したのはいいのだが・・・なんか数が多くね？」

それが、ジャイアントドードを発見したカズマの第一声だつた。見たところ軽く三十は超えるジャイアントドードがいる。その全てが俺達を発見し、向かつてくる。

「ね、ねえ？ 大丈夫なの？」

アクアが不安そうな声を出す。

「ま、任せて下さい。ここは私の魔法で」

「あれほどまでに性欲に飢えた力エルたちがこちらへ向かつくる。ここは私が引き付ける。早く行け」

数の多さにビビったのか若干声が震えるめぐみんに、何故か嬉しそうな声で力エルたちに突撃していくダクネス。

俺は機攻殻剣を引き抜きティアマトの試練によつて偶然手に入れた縮地を使い力エルを切り裂く。

一匹、二匹、三匹と力エルたちは肉を断たれ横たわる。

「す、すげえ」

カズマは驚くと同時に、もしも、自分がアクアではなく、普通の転生特典を選んでいたら彼のように戦えたのだろうか？と考えていた。

「なんなんですかアレッ超カッコいいです」

「さ、流石ね。私が見込んだだけあるわ」

「そ、そんな、せつかく今日こそは力エルたちのヌルヌル粘液プレイができると思つたのに・・・」

後方で四人の声が聞こえたのだが一人だけおかしいのが混ざつてなかつたか？

まあ、気のせいだろうと思い、俺は再びカエルを切り裂いていく。

「ふうく、よし、これで片付いたなつて悪い、全部やつちまつた」

「い、いや、それはいいんだが・・・」

カズマが辺りを見渡す。

そこにはカエルの血があちこちに飛び散り、血だまりとなっている個所も数十か所あった。

「・・・グロいな」

「だな」

「フツフツ、これが鮮血の黒剣の実力ですか」

めぐみんはグロ耐性でもあるのだろうか？嬉々としカエルたちの血を眺めている。ヤダ、何この子怖い。

「さあて、討伐も終わつたことだし、帰りましょ」

アクアがそう呟いた時だつた。

「グオオオオオオ」と南の空からドデカイ咆哮が聞こえたのは・・・

南の空を見ると赤く大きな物体がこちらへ飛んでくる。

「なあ、あれつて」

「サンダーフエニックスよ。まだ小さいけど成長すればそこそこ厄介なモンスターよ」

「いや、明らかに小さくても厄介なモンスターだろツ」

「あのモンスターの雷撃を受けたとき、私はどのようになつているのだろう・・・うへへへ」

「今度こそ私の見せ場ですね」

サンダーフエニックスか、俺も一度だけ戦つたのが雷を使つた攻撃以外は基本してこないし、してきたとしてもそれは突撃だつたりする単調な攻撃しか出来ない名前負けしているモンスターだ。

個人的にはそこまで脅威に感じる事は無いのだが、初心者である四人にとってはそれなりの脅威なのだろう。

「せつかくだし、俺の力を見せとくか。あんまり使いたくないんだが、一応パーティメンバーだしな」

俺は四人の前に出ると今まで使つていた黒の機攻殻剣を鞘に戻し、

白い機攻殻剣を取り出す。

「お、おい」

「ま、まさか例の・・・」

「バサラの背中から恐ろしい力を感じる」

「や、やつちやいなさい。あんたならあの程度すぐ終わるでしょ」  
機攻殻剣を構えてトリガーを引きながら詠唱符を唱える。

「来たれ力の象徴たる紋章の翼竜、我が剣に従い飛翔せよッ 《ワイ  
バーン》」

俺の体は光に包まれる。

光が晴れると俺は白と青の装甲を纏う。鋼鉄の機竜に乗っていた。  
「これが俺の力の一部だ。さて、サンダーフェニックスさんや。  
ちよつくり落ちてもらうぜ」

ブレスガンを取り出しサンダーフェニックス以下鳥野郎に向けて放つ。

数発のうち三発が着弾し、鳥野郎は完全に俺を標的を定めた。  
「クウルウウアアアアア」と怒りの咆哮をあげながら突っ込んでくる。

「おせえよ」

鳥野郎を躊躇すと同時に持つていた機竜牙劍を使い切り裂いた。

しかし、思いのほか皮膚が固く刃が通らず弾かれる。

すかさず追撃をいれると鳥野郎は雷を周囲一帯に放電する。

なんとか障壁を張ることに間に合つた俺は少し本気を出す。

「神速制御《クイックドロウ》」

この技は最弱無敗の神装機竜に登場するアーカディア帝国の三大  
奥義の一つだ。まあ、全部主人公であるルクスが生み出したのだが  
な。

機竜と精神と肉体を完全にシンクロさせることで超スピードを得  
た俺は鳥野郎の二枚の翼を切り落とす。

翼を失った鳥野郎は地に落ちるのだが地に落ちるより前に俺が鳥  
野郎を切り刻む。

数千もの斬撃を受けた鳥野郎はなんとかギリギリ四肢が繋がつて

いるという瀕死状態。

そして地面に落ちた。土煙が舞い、完全に土煙が晴れるとそこには息絶えた鳥野郎がいた。

「とりあえず、これが俺の力だ。よろしく」

四人は口を開けたままその場に立ち尽くす。

## お説教の時間ですよ

「それで、カズマ君よ。さつきのは一体どういうことかな？」

「ぐつ・・・す、すんません」

アクセルの街へ戻った俺達は冒険者ギルドの酒場で飯を食つていたんだが、俺の目の前には土下座をしそうな勢いのカズマがいた。なぜこんな事になつたのか話そう。

俺がサンダーフェニックスを討伐したあと、再びジャイアントドードが一匹現れたのだが、一匹だけならカズマたちでも大丈夫だろうと思つた俺は四人に完全に任せていた。

その結果・・・めぐみんは爆裂魔法なんていう一発芸ともいわれるほどの魔法を使う。カエルはオーバーキルされ、周りにいたカエルが二匹やつて來た。魔力切れとなつためぐみんとアクアはカエルに捕食され、ダクネスは一度も攻撃を当てずにやたら変な声であえいでいた。エロいなと思つてしまつた俺は悪くないはずだ。

そして、カズマなのだが、悲鳴をあげながらひたすら剣で戦つていた。

まあ、なんとか討伐は出来たのだが、上級職である三人が問題児どころじやないんだが？

まず、アクアよ！お前はアークプリーストだから攻撃ができないのはまあ、目を瞑るしよう。しかし、回復役であるお前が一番最初に捕食された駄目でしょッ

次にめぐみんよ、お前は魔力が少ないアークウイザードだと聞いているぞ。爆裂魔法なんか使えるほどの魔力量だつたら普通の上級魔法を連発出来るだろッ。

そして、ダクネス。お前ふざけてるだろ。なんで攻撃を当てるんだよツクルセイダーは守備の要でありながらこのパーティの前衛では攻撃の要もあるんだぞッ。

最後にカズマよ、頭が良く回り、工夫して戦つている所は評価しよ

う。冒険者という最弱職でありながら他の三人に比べると一番活躍しているだろう。

「マジすんませんでした」

カズマはひたすら土下座をしている。

「俺は魔力量の少ないアークワイザード、体力のないクルセイダーと聞いたんだが？」

ギクッとカズマの後ろで椅子に座っているめぐみんとダクネスが肩をあげる。

「そ、それはですねえ・・・」

そして、カズマから聞いた話を聞いた俺は絶句したとまではいわないうが頭を抱えた。

水の女神アクアはもうそれはもう、知能が低い残念な借金女神であると。

爆裂魔法を使えるほどの魔力量を持つているめぐみんは爆裂魔法しか使わず、しかもつ撃ったあとは倒れる一撃必殺の浪漫砲台であると。

クルセイダーのダクネスはドMだった。剣が当たらないのはワザとではないらしく、というかドMと聞いたことよりどんだけ不器用なんだよッて思った。

カズマはそんな残念なパーティメンバーにうんざりしているそうだ。

そして、何故、俺に本当のことを話さなかつたのかというとせっかくパーティに誘つたのに逃げられると思つたからだそうだ。

「なるほど、一応ちゃんとしたというか理由はあつたんと」「はい、そうです」

「もう、いつまで暗い話してんのよ、せつかくのシュワシュワが不味くなるわ、ゴクッゴクッゴク・・・プハア」

アクアはシュワシュワという飲み物を先ほどから飲んでいるが全然反省していないように思える。

「あの〜、パーティ抜けるとか「いわねえよ」ほんとつすか」  
ほんと変わり身が早いなツビツクリだよ。

「一つ文句を言わせろッ、命預けて戦うパーテイメンバーに嘘の情報流すなッ。こちとら命がけつてことは嫌つて程理解してんだ。お前らだつて分かるだろ」

「「「・・・」」

四人は先ほどまでの表情とは違ひ本気で落ち込んだ。

「バカがなんだ？別にいいじゃねえか。一発屋がなんだ？使いどころ見極めればいいじゃねえか。

性癖がなんだ？攻撃が当たらなくとも耐久力だけは馬鹿高いじゃん。冒険者がなんだ？工夫して戦えばいいじゃねえか

「な、なんか超カツコいいこといつてるんですけど」

「こ、これが伝説の竜を従えし者の言葉ですか」

「さり気なく罵倒された氣もするが・・・そこがいいツ」

「やべえ、超かつけえ。アカン惚れてしまう」

「茶化すな。まあ、なんだ。確かにそれぞれ何か問題を抱えてるかもしんねえが、その分、俺が何とかするなんていうカツコいいことはいえねえけど、だからこそ、協力しないといけねえんだろ」  
俺の言葉を聞いた四人は深く考えだした。

「とまあ、これで俺からの話は終わりだ。ちなみに、俺がこのパーティ抜けるときは死んだときか、もしくはお前らが出て行けつていつたときだけだから安心しろ。だから、もうつまんねえ嘘つくなよ」

「「「はい（わかりました）（ああ）」」

「よし、飯食うか」

こうして、俺達は楽しく飯を食つた。

このときのやり取りを見ていた他の冒険者たちはアクセルの問題児たちを正す教師の様な存在に見えていたようだ。いや、教師つて、俺これでも十五なんだけど、いや、この世界来て一年だし十六歳か？なお、この時の説教を聞いていた他の冒険者たちも自分たちはどうなんだ？と考えた。

女性冒険者の何人かはバサラのファンとなつた。男性冒険者は密かに兄貴と慕う。

「そういや、バサラはなんで死んだんだ？」と、カズマが聞いてきた。

「突然だな」

「いや、いいたくなかったら言わなくてもいいけど」

「よく覚えてねえけど、家の近くの公園で素振りしてたらストー

カー女に眠らされて俺が使つてたバットで撲殺されたんだって」

「へ、へえ（）、こいつこの世界でも女性に殺されましたとかなん  
ねえよな……」

「カズマはどうなんだ？」

「ゲーム買いにいった帰りにトラックに轢かれそうな女の子をか  
ばつた」

「かつけえじや「でも、トラックだと思つてたのはトラクターで」耕  
されたのか？」

「トラックに轢かれたと勘違いしてショック死した」

「oh・・・な、なんかすまん」

「もういい、気にすんな」

できるだけカズマの顔を見ないようにしていたが俺の視界の端に  
カズマの頬に水滴が垂れているのが映つた。  
こいつも、苦労してるんだな。

## 回想編 魔王軍幹部

「おお～良く似合つてゐるじゃねえか。流石クルセイダー」

「そうだろう。キヤベツの報酬で新調したのだが、こんなにもピッカピカになつたのだ」

「どうか？ただの成金貴族にしか見えねえ」

「わ、私だつて普通の褒めてもらいたいときもあるのだがカズマはこういうときも容赦ないな」

俺の説教事件から数日（ギルドの冒険者一同からはバサラ先生の特別指導）が経つた。

その間のクエストは俺が一人だけでこなしていた。理由は俺がこの町に来るより前にあつたキヤベツのクエストでの報酬で装備の新調をしていたからだ。

それによつてダクネスの鎧はピカピカになり性癖はともかく、容姿だけをみれば美しい騎士となつていて。

「それより、あそこにお前を超える変態がいるんだが」

カズマが指さす方を見てみる。

「はあ、はあマナタイト製のこの色艶ツ」

自身の杖を股に挟みスリスリしているめぐみんがいた。

その後、アクアの報酬が思つたよりも少なかつたせいでアクアが文句をいつたり、カズマの恥ずかしい話を聞けた。いや、男だから仕方ないと思うけど・・・

俺はどうなかつて？ 知る必要ないよね（ニツコリ）

クエストを受けようと思い掲示版を見たのだが高難易度のクエストしか張られていない。

ルナさんに聞いたところによると近くに魔王軍の幹部が住み着いたせいで魔物が隠れちゃつたらしい。

ということもあり、それぞれの好きなように過ごすことになつた。

アクアはバイト、ダクネスは筋トレ、めぐみんは爆裂魔法の特訓、力

ズマはその同行。

さて、俺は何をしようかなと悩んでいたところ機竜の整備をしようかと思い人里離れたところへ向かつた。

機竜の整備といつても転生特典のおかげでダメージなどは自然と修理されてしまうのだが気分的にも整備をこなして機竜のことを学べばその分、動かすときにもよりうまく動かせるようになると思つて

いる。

道中、初心者殺しと呼ばれる黒い魔物と遭遇したが機攻殻剣で素早く討伐できた。

「よし、この辺りで良いかな」

アクセルから大分離れた所にある森のなかで俺は機竜を呼び出す。ワイバーン、バハムート、ティアマト、テュポーン、ファフニール、リンドヴルム、ドレイクの七機だ。

どれも各地の遺跡の最深部に眠っていた竜と契約したことにより手に入れた機竜である。

いわば、竜そのものである。原作では古代の兵器という認識だったのだが、この世界ではちよつとした意志を持つていて、会話はできないがなんとなく意志が伝わることがある。

「いつもありがとな」

声を掛けながら機竜の装甲を撫でる。

『どういたしまして』という返事が聞こえたような気がした。

「ほんと、お前らは最高の相棒だ」

『当たり前。私達と契約出来たことを誇りに思え』

「そうだな。俺は幸せ者だ」

はたから見れば完全に独りで会話しているヤバい奴なのだが気にしたら負けだ。

機竜の整備を終えた俺は街に戻ろうとしたのだが道中でカズマと

背負われためぐみんと合流した。

「あれ、バサラじゃねえか」

「よう、めぐみんの特訓の帰りか？」

「ああ、お前はクエストか？」

「いや、ちょっと散歩してた。爆裂魔法はどうだった？」

「サイコーでした」

俺がめぐみんにそう問い合わせるとめぐみんは幸せそうな表情を浮かべて親指を立てる。

「それよりバサラ、あの機竜という奴を見せて欲しいのですツ」

「見せてやりたいけど、あんま人がいるようなところじゃあな」

「王都じや有名人なんだろ？」

「まあ、そういういな。いやあ、ちょっと調子乗つてたわ」

思い返すのは魔王軍と対峙したときの俺、ティアマトの試練を乗り越えた俺は正直、調子に乗つてた。

今の俺なら魔王とか余裕じゃね？とか甘い考えを持っていた。

ティアマトを使い魔王軍を蹴散らそうと思ったが、使い慣れているバハムートを使い何万もの魔王軍を一騎当千の戦士の如く戦場を駆けまわり切り裂いた。

普通の魔物が機竜にかなうはずもなく、ほとんどが一蹴されてしまつた。

数も半分以上減つたあと、俺は親玉を叩きに向かつた。

そこにいたのはフードを被り淡い紫の髪をした女。魔王軍の幹部だつた。

その女の名はアガレス。強力な魔法を使う上に指揮官としての能力も高く、厄介な敵だつた。

といつても、一対一になつたあとからがアイツの本領発揮だつた。アイツの使う魔法の中には相手に幻覚を見せる魔法があり、それに引っ掛けた俺はかなり苦戦した。

機竜の弱点というか幻覚に対して耐性がないのが駄目だった。  
まあ、俺が耐性を持つていれば良かつたのだが。

「オーホツホ、いいわ、いいわ。あなたすぐいいわ」

頭の中に聞こえるアイツの声はどこかの高慢高飛車なお嬢様を連想させた。

「ねえ、あなた私の騎士にならない？あなたの顔つきも私好みでなかなかいいわ。それに私の部下たちを蹴散らすその鎧とそれを使いこなすあなた」

幻覚のなかにもアイツが現れて俺に近づき耳元に息を吹きかける。距離を取ろうとしても動けない。気が付くと機竜もなく、機攻殻剣もない。成す術無しだ。

「あなたの力があれば私達は最強になれるわ。魔王様のお力になるわ」

アイツの囁きは俺の思考をジワジワと支配していった。

「私の目を見て」

彼女の目を見るならピースラズリの様に美しい青い目をしていた。

「あら、嬉しいとこをいつてくれるわね」

この幻覚のなかでは俺の思考もアイツに筒抜けだ。

『しつかりしろ！私達が付いてるのに負けるなんて許さない』といふ声が聞こえた。

思えばこれが初めて機竜の声を聞いたんだつた。

その声が初めはなにか分からなかつたがすぐに機竜の声だと気づいた。

「お、れは負けねえよツリロード・オン・ファイア暴食」

俺が纏っていた神装機竜 バハムートの神装を発動し、なんとか幻覚から逃れることができた。

十秒間の中でのアイツをアガレスを倒そうとしたが、転移魔法を使わせていできなかなか倒すことができない。

「ふふふ、面白いわあなた。私の幻覚から逃げ出すその精神。ここで、気絶させて連れ帰りたいところだけど、残念だわ。時間切れ。また会いましょ私はアガレス。あなたの名前は？」

「逃げるなッ」

あいつの質問に答えることなく、俺は切りかかる。

「ふふ、暴力的ね。女性には優しくしないといけないわよ」

いつの間にか俺の目の前に転移したアガレス。切り裂こうとするも俺の唇に柔らかいものが触れた。

「これで、あなたは私のもの。私の初めて」

そういって、アガレスは消えた。

「お、俺のファーストキスがツ彼女とさえキスしたことなかつたつていうのに」

俺の初めてを奪っていたアガレス、あの魔女に俺は頭を抱えた。

普通なら嫌な筈なのに、嫌ではなかった。

悲しいことに、思春期の俺にとっては美人からのキスが嬉しかったようだ。

つて、まさか毒とかないよな・・・

そう思つた瞬間、俺は全身から嫌な汗が噴き出したのだが、なにもなかつた。

その後、騎士団と合流し、此度の活躍を報告するとかなんやらあつて、王城へ呼ばれて王族と話をしたり、騎士団に勧誘されたり、色々あつた。

「見せてくださいよお〜」

あまりにもめぐみんがしつこかつたので見せてやることにした。

「来たれ力の象徴たる紋章の翼竜 我が剣に従い飛翔せよツ 『ワイバーン』」

サンダーフェニックス戦のときに見せたワイバーンを見てめぐみんは更に目を輝かせる。

「カッコいいですぅ。なんなんですかコレ。このフォルム。サイコーです」

ただ見ているだけにも関わらず嬉しそうな声を出すめぐみんを見て可愛いなと思ったのは内緒だ。

「はあ、なんで俺はあのときアクアを選んじまつたんだろう  
な・・・」

深夜テンション並みにテンションの高いのめぐみんの横には映画  
見る前にネタバレされた並みのテンションのカズマがいた。

## デュラハン襲来

アクセルの街が暗雲に包まれ轟雷の降り注ぐこの日。アクセルの街にはとある来客?があつた。

「俺はつい先日、この近くの城に越してきた魔王軍の幹部のモノだが」

首のない騎士。デュラハンはストレスの溜まつた〇Ｌの様に叫んだ。

「毎日毎日毎日、かかさず爆裂魔法を撃ちこんでくる頭のおかしい奴は誰だツ」

このアクセルの街に爆裂魔法を使える魔法使いとなればあいつしかいない。

俺は右隣に立っているめぐみんを見る。

ピイツとなんとめぐみんは自分の隣にいた赤毛の少女を見た。

「わ、私、爆裂魔法なんか使えないわよツ」

信じられるか?こいつ、人になすりつけやがった。

そのまま人の所為にするのかと思ひきや、深呼吸をし、覚悟を決めためぐみんは一人デュラハンの元へと歩いた。そして、デュラハンの前に立ち止まる。

「お前かツ、毎日毎日人の城に爆裂魔法を撃ちこんでくる頭のおかしい馬鹿はツ」

デュラハンのお怒りはごもつともである。俺だつてこんなことされたら怒る。

「我が名はめぐみんツ紅魔族随一の魔法の使い手にして爆裂魔法を操る者ツ」

「めぐみんつてなんだ?馬鹿にしてんのかツ」

ブフツ、デュラハンの返しに思わず吹き出してしまう。

「ちがうわい、我是紅魔族の者にして、この街随一の魔法使い。我が爆裂魔法を使い続けていたのはあなたをこの街に呼び出すための作戦。こうして、まんまとやつて来たのが運の尽き」

周りの冒険者がおおと声をあげる。

「まあいい、俺は雑魚を相手にはしない。いいから、これからは爆裂魔法を放つのを止めろッ」

「無理です。紅魔族の者は日に一度、爆裂魔法を放たないと死ぬのです」

「聞いたことがないぞツ」

そして、めぐみんはアーヴプリーストであるアクアを呼び出す。

「こんな街にいるアークプリーストにはやれらない。ここはひとつ・・・汝に死の宣告を」

そういつたデュラハンは指先をめぐみんへと向け黒い塊を放つた。めぐみんにデュラハンの死の宣告が当たる直前に金髪を靡かせた女騎士が間にに入る。ダクネスだ。

誰もがダクネスに当たるかと思われた直後・・・  
「悪いな、こういうのはクルセイダーとはいえ、女に当てさせるわけにはいかないんでね」

俺が更にダクネスの前に立ち死の宣告を浴びた。

「バ、バサラツ」

「おいツ、大丈夫か」

めぐみんとカズマそして、何故か残念そうなダクネスが寄つてくる。まあ、なんで残念なのかはなんとなく分かる。大方、何故私をかばつた。あのまま私はデュラハンにやられるはずだったのにとかだろう。めぐみんはハツとなる。

「なんともねえな」

「仲間同士の結束が固い貴様ら冒険者はこっちの方が堪えるだろう。貴様は一週間後に死ぬ。そう、魔法使い、貴様の所為でだ。その男を助けたければ一週間以内に俺の城に来い」

めぐみんはハツとなる。

「自らの行いを悔いるがいい」

そう言い残し、デュラハンは去ろうとする。

「まあ、待てよ。首無し騎士さんや。別にわざわざ一週間なんて待たなくともいいだろう」

俺は機攻殻剣を抜き、デュラハンの前に立つ。

「誰が死の恐怖に怯えるだつて？誰のせいで俺が死ぬだつて？勝手に人様を殺してんじやねえよ」

「バ、バサラ、やめろつて。ここはしつかりと準備を整えて・・・カズマが俺を止めようとする。

「大丈夫だつて・・・とはいえねえが、アクアだつているんだ。何とかなるだろ。頼りにしてんぜ」

「ええ、任せなさいツ」

遙か後方に見える青い髪を持つ女神、アクアが元気よく返事をする。

「ということで、ここは一対一の戦いを要求する」

「いいだろう、貴様のその眼、気に入つた」

デュラハンは嬉しそうな声を出すと大剣を構える。

「・・・」

お互いに隙を伺う。

にしても、相当強いな。流石魔王軍幹部。魔法を主体としてくるアガレスとは違い、ビリビリとやべえオーラが漂つてくる。

「はあツ」

先に動いたのは俺だ。ワイバーンの機攻殻剣を振りぬきデュラハンの持つ大剣に叩きつける。

「動きはなかなかいいな。だがしかし、筋力が足りぬな。この程度、虫刺されにしか感じないぞ」

「はんツ、虫だつて、てめえの腐った肉体なんか刺したくないって思つてるだろうぜ」

「減らす口を叩けるその根性。面白い」

それからはデュラハンの攻撃が来る。大振りの癖に恐ろしく早い斬撃の数々が俺を襲う。

俺はなんとか受け流すだけで精いっぱいだ。

「守つてばかりでは勝負にならないな」

「・・・」

「受け流すだけで精いっぱいか・・・フツ」

なんとか攻撃を受け流していた俺だが、デュラハンは突然攻撃を止

め、アイツの全力の斬撃が俺の剣に叩きつけられる。

「グハツ」

機攻殻剣は吹き飛ばされ、腕も痺れている。

「だ、大丈夫か？にしてもあるのデユラハンなかなかのやり手だな。ジワジワと相手を痛めつける鬼畜の所業だ」

「ほんと、お前は生糀のドMだな」

「今日はこの変にしておいてやる。再戦を待つているぞ」

「だから待てって。まだ俺は本気を出していない」

「ほう、だが貴様は満身創痍ではないか？」

俺は立ち上がり、空間魔法？アイテムボックス？なのか良くな分から

ない空間から細い細剣のような機攻殻剣を取り出す。

鞘から引き抜きトリガーを引きながら詠唱符<sup>バスコード</sup>を唱える。

「降臨せよ、為政者の血を継し王族の竜。百雷を纏いて天を舞え《リンドヴルム》

俺は光に包まれる。

周囲は一体何が起きているんだ？というざわめきと、カズマ達、パーティメンバーの不安氣な声が漏れる。

光が晴れた俺の姿を見てデユラハンは驚く。

「どうだデユラハン？これが俺の本気だ」

白と黄色が目立つ聖騎士のような神装機竜。

「さあ、第一ラウンドの始まりだ」

## 支配者の神域

「それが貴様の本気か・・・面白いツ面白いぞツ」  
デュラハンはリンクドヴルムの姿を見て怖氣ずくどころか興奮している。

そして、俺の背後では・・・

「な、なんだアレツ」

「あんな大きな鎧見たことないわツ」

「つつうか、どこからだしたんだ?」

冒険者たちは始めて見る神装機竜の姿に興奮している。そして、神装機竜を見て興奮する奴と言えばもう一人。

「ま、前のとは違う奴ですツ。黄色い稻妻の様な機竜ツカツコいいです。なんなんですか、なんでこうもバサラは私たち紅魔族の血に反応させるようなことをしてくれるんですか」

うん、わかつてた。滅茶苦茶興奮してた。というか目が紅く光つている。怖い。

「いくぜツ」

俺は雷を帯びた大槍の特殊武装 ライトニングランス 雷光穿槍を振るいデュラハンの

剣に打ち付ける。

「ぐつ、パワーも先ほどのアレとは大違ひだ。これは俺も本気を出さねばまずいな」

「はつ」

槍で大剣を打ち付けたあと、大剣の面の部分に鋭い突き決める。

「グハツ」

なんとか防いだデュラハンだったが後ろに吹き飛ばされる。

「ほ、本当にここは初心者の集まる街なのか?俺はこれでも魔王軍内で強い部類なのだが」

「ごちやごちやいってねえで行くぜツ」

俺が再びデュラハンに突っ込もうとしたとき、アイツの雰囲気が変わった。

「フハハハハ、この技を使うのは久しいが、この技を見せた相手は誰

も生きて帰らなかつた

「なんだ？」

デュラハンの体から禍々しいオーラがあふれ出る。

「なに、ただの強化魔法だ。今度はこちらから行くぞッ」  
するとデュラハンの姿が消えた。

「どこを見ているツフンツ」

瞬間、消えたと思つたデュラハンの姿が目の前に現れる。それと同時に、大剣が俺を襲う。

「グツ」

なんとか防いだが、そこからさらにデュラハンの攻撃は早くなる。  
まるで、一振り一振りが音速振り下ろされる大槌のようだ。

「ハアアアアアツ」

デュラハンは終わりだといわんばかりに大剣を大きく振り上げて  
振り落とす。

まずい、いくら神装機竜でもあれほどの一撃を喰らえばただでは済まない。

周囲の冒険者、カズマ達パーティメンバーの誰しもがやられると  
思つた刹那、バサラの姿が消える。

「なんだと、どこにいった？」

「こっちだよ」

俺の姿を見失つたデュラハンの頭上から槍を突きさす。

「なツ」

間一髪のところで回避したデュラハンは一瞬で俺から距離を取る。  
「消えたと思つたら俺の頭上に現れた・・・空間転移かツ」

「ご名答。これぞ我が神装機竜リンクドヴルムの神装

ディバイン・ゲート  
支配者の神域

の力だ」

そして今度は、持つていたダガーをデュラハンに投擲する。  
デュラハンはこの程度造作もないといいたげにダガーを叩き落とす。

「グハツ」とうめき声を出したのはデュラハンだ。

ダガーを落としたデュラハンの前後から俺の持つ雷光穿槍の鋭い

突きがさく裂する。

「重撃、ダガーを投げたと同時に俺は支配者の神域を使いお前の前後から攻撃を行う。リンドヴルムだからこそできる最速の攻撃」

「はあ、はあ、なかなかやるな」

「これでとどめだッ」

膝をついたデュラハンにとどめを刺そうとした直後、俺の体が動かなくなる。

「な、んだ、これ」

動けない。金縛りにあつたかのように俺の体はピクリとも動いたりしない。

以前もこのような感覚に襲われたこともあった。まさかツ

「ふふふ、久しぶりねバサラ」

聞き覚えのある声がデュラハンの背後から聞こえる。

「な、貴様はツ」

「久しぶりねベルディア。一対一の決闘の最中に悪いけど、魔王様がお呼びよ」

「…仕方ない。おい貴様ツ、今回は俺の負けを認めよう。だがしかし、次まみえるときはこうはいかないと思っておけ」

ベルディアはそういつてアガレスの転移魔法により消えた。

「ふふふ、更に強くなつたようねバサラ。本当に素敵だわ」

未だ動かない俺の体。いまここでこいつを仕留めておきたい。

転移魔法で俺の正面へと転移したアガレスは俺の頬に手を添えてじっくりと俺の眼を見る。

王都であつた魔王軍の侵攻の際にみたアガレスのラピスラズリのような瞳は以前と変わらず美しく、しかし、どこか怪しげな光を放っている。

「ふふふ、必ずあなたを私のモノにしてみせるわ」

「ツ」

前回と同じくキスをされた。しかし、前回とは違い今回は舌を絡めてきた。

「ううう、うう、ううツ」

抵抗しようにも体に力が入らない。しかも、こいつ舌が長い。

逃げようにも長すぎるアガレスの舌に捕まえられる。

「はあ～、いいわあ。もつとこうしていたいけど、私も魔王様に呼ばれているの。じゃあねバサラ」

そういうて、今度こそアガレスは消えた。

「やつたのか？」

冒険者の誰かが呟く。

「「「「うおおおおおおおお！」」「」」

直後、天にも届く冒険者たちの歓喜の声が上がる。

アガレスが消えたあとは俺の体も動くようになつたが、神装を使つたせいかすさまじい疲労感が俺を襲う。

「バ、バサラツ」

リンドヴルムを解除した俺は地面に倒れ込む。そんな俺を見てカズマが駆け寄ってきた。

「はあ、逃がしちまつた」

「そんなことはいいから、怪我はないか？」

「ああ、怪我はないけど、あんのクソ女ツ」

「嘘つくなよ、ボロボロじやねえか」

「バサラツ、さつきの女は一体？」

カズマに続き、めぐみん、アクア、ダクネスも寄つてくる。

「魔王軍の幹部の一人だ」

「そ、そのだな、まさかお前も私と同じ『違うからな』はうつなにを勘違いしたのかダクネスが非常に失礼なことをいおうとしたのでチヨップをいれてやつた。

「にしても、疲れたあ～」

空を見るように仰向けになる。先ほどまで雷が降り注いでいたが今は晴れ晴れとした青空だ。

「ほんとうにカツコよかつたです」

「ああ、お前は最高の英雄だよ」

「ま、まあ、私ほどの活躍ではないけど、あと、あんたの呪いも浄化しておいたから」

「サンキュー」

めぐみん、カズマ、アクアがそういう。

「わ、私も幼い頃に読んだ英雄譚を思い出した」

珍しくドMなダクネスではなくクルセイダーとしてのダクネスが俺を褒める。

「照れるだろ。それより、ちょっと落ちるわ……すぴいすぴい」

## 仲間から見たバサラ

カズマ side

俺は今、仲間の一人であるバサラの戦いを見て心の底から熱くなつた。

相手は魔王軍幹部であるデュラハンだ。こうなんというか、見ていて熱くなるというのは幼い頃にテレビで見た仮面ライダーが敵の怪人を倒すときみたいな感じの熱くなるということだ。

バサラは生身でも強い。剣術スキルはとつていなが、正直、この街にいる他の剣士の誰よりも強いだろう。

そんなバサラなのだが機竜というアイツの転生特典はめちゃくちゃカッコいい。

本人から聞いた話では竜と契約し、その竜を鎧にし力を使うらしいのだが、リングドルムを纏つたバサラの姿は聖騎士そのものだ。騎士の気高いオーラを纏いながら圧倒的強者であると感じさせる王者の風格をも感じさせる。

機竜を纏つたあのバサラはベルディアを圧倒している。生身の状態ではパワーが足りなかつたようだが、機竜のおかげでパワーの問題も解決している。

そして、何よりの大槍だ。雷を帯びたソレはベルディアの大剣をへし折る勢いで雷光の如き鋭い攻撃を続ける。

「が、頑張れバサラッ」

俺は自然とバサラを応援する声が出る。

「そ、そうですよ。頑張つてくださいバサラッ」

「そんなクソアンデッドなんかやつちまいなさいツ」

「はあ、はあ、はあ、あの激しい戦闘の中、私があそこへ入つたら一体どのようなことになるのだろうか」

俺に続きめぐみん、アクアが応援をする。ダクネス？あいつは只のDMだ。

しかし、バサラの猛攻も続かず、デュラハンが変なスキルを使うとデュラハンは姿が見えないほど早く移動した。そして、その速さは攻

撃にも反映されている。音速並みの斬撃をなんとか防御しているバサラを見るとやはり、あいつはすごいと実感する。

そして、俺達でさえ、やられてしまうと思つたが、今度はアイツの

姿が消えた。

支配者<sup>ディバイン・ゲート</sup>の神域<sup>ディバイン</sup>というそうだ。

空間転移のスキルらしい。デュラハンのスピードをものともしなくなつたバサラは再び猛攻を始めた。

そして、デュラハンに勝つんじやないか？？と思つたとき、アイツの動きが止まつた。

なにごとかと思いきやフードを被つた女が現れ、バサラにキス（しかも深い方）をしてデュラハンを逃がした。

おのれ、バサラ。この色男がツ

不思議な女が消えたあと、機竜を解除し地面に倒れ込んだバサラを見て俺は駆けつけた。

そこには汗びっしょりになつてているバサラがいた。

「バ、バサラッ」

「はあ、逃がしちまつた」

デュラハンを逃がしたことに負い目を感じてゐるようで眼が怖い。

「そんなことはいいから怪我はないか？」

「ああ、怪我はないけど、あんのクソ女ッ」

どうやらあの女とは何かあつたらしい。

そして、俺に続くようにめぐみんとアクアとダクネスがきた。

アクアはバサラにかけられていた呪いを解呪する。

呪いを無事解呪されたバサラは「にしても、疲れたあ」といつて仰向けになる。

俺達がカツコよかつたぜと褒めると照れたバサラはそのまま寝つてしまつた。

寝てゐるところを見ると先ほどまで魔王軍幹部と渡り合つていたなんて思えないほど可愛げのある寝顔だつた。

アクア side

ハロー皆さん。私は水の女神アクア、分け合つてこの世界に転生した女神よッ。

そんな私なんだけど、今日はなんと魔王軍の幹部が来たの。あんのクソアンデッド。

生意気なことに私の浄化魔法を喰らつても平気そうな顔をしていた。

その後は死の宣告とかいう呪いを私のパーティメンバーの一人のバサラに掛けたんだけど、バサラはそのままクソアンデッドと戦つたの。

転生特典を渡したのは私だけど、すごく驚いたわ。

なんてつたつて、バサラの特典は本来機竜を纏うことで効果を発揮するの。でも、バサラは素の状態でクソアンデッドとほぼ互角に戦っていたわ。しかも、剣術スキルをとつてないつていつてたわ。

ほんと、この世界にきてどれだけ修業をしたのかしら、少しほカズマも見習つてほしいわ。

でも、そんなバサラでもベルデイアの筋力には叶わなかつたみたい。

「なにやつてるのよつ、そんなクソアンデッドなんかに負けちや駄目でしょッ」

私は後ろからバサラに声を掛ける。

私の応援が聞いたのか、バサラは機竜を使つたわ。

リンクドヴルム、確か空間転移の能力を持つ神装機竜だつたはずよ。機竜を纏つてからバサラはクソアンデッドを圧倒していたわ。

「いいわよつ、そこよッ」

クソアンデッドをボコボコにしているのを見ていると私も機嫌が良くなつてきたわ。

しかし、その快進撃も続かなかつた、あのクソアンデッドは変な魔法を使つて自身を強化したの。

そこからは、普通の人には目に見えないほどの速さでバサラに攻撃していたわ。

えつ？私には見えたのかつて？当たり前じやない。私は女神よ。私も見ていてハラハラしたわ、このままではバサラがやられちゃうつて。

でも、バサラは神装を使った。そのおかげもあつて、クソアンデッドにどごめを刺すところまで行つたわ。

なのに、あの女のせいで逃げられちゃつたの。ムカつくッ、でも、なんでか分からぬけどあの女からは少しだけ神の力を感じたの。

一体、あの女はなんなんでしょう・・・

それより、今はバサラにかかった死の宣告を解呪していげないと。お疲れ様、水の女神アクアはあなたの頑張りをしつかり見ていましたよ。

### めぐみん side

我が名はめぐみんツ、紅魔族随一の魔法の使い手にして、爆裂魔法を操る者ツ。

そんな私は一日に一度、爆裂魔法を放たなければ死んでしまうという呪いがかかっています。

だから私は毎日、カズマに頼んで爆裂魔法の訓練をしていました。その練習に使っていた城がまさか魔王軍幹部の者がいる城だとは思いもよませんでした。

ベルディアというデュラハンは私に死の宣告を放つてきました。回避しようにも体が動かず、そのまま死んでしまうのかと思いまし  
たが、私の目の前にダクネスが現れ、ダクネスに当たるかとおもいき  
や、バサラが現れ、直撃しました。

バサラはなんともないようで安心しましたが、その安心もつかの間、ベルディアは一週間後にバサラが死ぬといいました。私の所為で・・・

私は一気に視界が真っ暗になりました。

私のせいでバサラが死ぬ、そんな、私はなんてことを。

このままではベルディアが逃げてしまいます。

ベルディアは一週間以内に俺の城に来いといいました。

私はすぐに向かおうとかと思いましたが、バサラが立ち上がり、ベルディアと一体一の決闘を始めました。

バサラの強さは知っています。剣術スキルをとつていなにも関わらずソードマンより遙かに鋭く、強い剣術を操ります。

バサラはベルディアと互角に渡り合っていましたが、ベルディアの筋力には負けてしました。

持っていた剣も吹き飛ばされてしまい、このまま終わってしまうと思いました。

すると、空間の歪みらしきところから細剣を取り出して紅魔族的にビビビーンと来る詠唱を唱えると前回見たときはまた違う機竜を纏っていました。

「すごいです、バサラの機竜は全部めちゃくちゃカッコいいです」機竜を纏つたおかげで筋力もベルディアより高くなり、圧倒していました。

しかし、ベルディアが強化魔法を使うと紫電の如き速さで動き、バサラを追い詰めました。

私も、バサラがやられると思つていましたがバサラは必殺技らしきものを使いました。

ディバイン・ゲート支配者の神域なんてカッコいい響きなんでしょう。

しかもその能力は空間転移、それにより再びベルディアを圧倒したバサラは完全にベルディアを追い詰めました。

すると、そこへ他の魔王軍の幹部が現れました。

その女はベルディアを逃し、見えない力でバサラを拘束するとな、なんと、き、キスをしたのです。

女が去つたあとバサラは地面に倒れ込み汗だくのドロドロになりました。

死の宣告もアクアに解呪してもらい、疲れ切ったのかそのまま眠ってしまいました。

悔しいですがカツコよかつたです。

ダクネス side

やあ、私はクルセイダーのダクネスだ。

今日はなんと魔王軍幹部のベルディアが襲来した。

何故駆け出しの冒険者が集まるこの街に来たのかは察してほしい。

そして、めぐみんがベルディアのう死の宣告を喰らいそうになつたとき、私はすかさず間に入り守ろうとした。

はあ、はあ、おそらくあのデュラハンは死の宣告を解いてほしくば俺の言うことを聞けといつて鬼畜な命令をしてくるのだろうと思つたらバサラが私の前に現れおあずけを喰らつてしまつた。

これは、これでなかなかいいなと思ったが、仲間の危機にそんなことは考えてられない。

バサラは無事のようだが、一週間以内にバサラが死ぬと告げた。

解呪してほしくば俺の城に来いといい、そのまま立ち去ろうとしたがバサラが立ち上がり一対一の決闘を始めた。

バサラの強さは尋常じゃないことは知つている。剣での攻撃が一度も当たらない私とは違い、剣術スキルをとつていなにも関わらず、ソードマン、下手すればルーンナイトよりも研ぎ澄まされた剣術を操る。

案の定、バサラはベルディアと互角の戦いをしていた、あの二人の戦いに挟まれればどれほどの快感を味わえるのだろう。

ゲフン、ゲフン、だが、流石のバサラもベルディアの筋力には叶わなかつた。

力技で一気に吹き飛ばされ、剣を落としたバサラ、このままでまずいと思い、私がベルディアと戦おうとしたが、急に何もないとところから細剣を取り出したと思つたら前に見せてくれた機竜を召喚し再び戦い始めた。

機竜のおかげで筋力が上がつたバサラはベルディアを圧倒した、時折見えるバサラの野性的な眼が私にはドストライクだった。はあ、私

にもあの眼を向けてくれないだろうか。

しかし、バサラの攻撃は止められてしまつた。理由はベルデイアが変な魔法を使つたせいだ。体中から禍々しいオーラをだし、目に見えないほど早くなつていた。

バサラは追い詰められてしまい、このままでは殺されてしまうと思つた。

するとバサラは消え、ベルデイアの頭上に現れた。  
どうやら、あの機竜の能力は空間転移らしい、アクアがそういうつていた。

その黄色い機竜はまさに雷のようだつた。

空間転移により、さらにベルデイアを追い詰めたあと、とどめを刺そうとしたとき、新たに魔王軍の幹部が現れた。そいつは女で魔法か何かでバサラを拘束した。

そして、そいつはバサラと、キ、キスをした。

このままでは私の仲間が奪われてしまう。これがNTRという奴か・・・

女が消えたあと、バサラは地面に倒れ込んだ。

私達はすぐに駆け寄る、汗に塗れ、ドロドロでボロボロのバサラがいた。

こいつは、私の性癖を気にしない変な奴だ。それに、攻撃の当たらぬ私の代わりに俺が攻撃するといつてくれた。

私がそれまでに組んできたパーテイメンバーの全員が攻撃が当たらぬなら邪魔だといつてきた。

それはそれで興奮していいのだが、なんというか、こう、初めて言われたので少し嬉しかつた。

だから、今回もコイツが私の代わりに攻撃してくれたのだろう。

死の宣告もアクアが解呪してくたおかげで、どうもなつていよいだ。

先ほどまでの戦闘、私は幼い頃に読んだ英雄譚を思い出した。

その英雄譚の主人公も強敵を前に、仲間を守り、強敵と凄まじい戦闘を行い、追い詰め、追い詰められ、やられると思うと、今度は逆転

そして、勝利する。

本当に、英雄のような男だ。

バサラは疲れたようでそのまま眠つてしまつた。  
すぴいすぴいと可愛い寝息を立てる仲間を見て笑つてしまつた。

「今度は私が守る」

今回はバサラが私を守つてくれたが次は私がバサラを守つて見せる。仲間を守るのがクルセイダーだ。  
いつまでも守られるだけの私だと思うなよ。

## 湖の浄化

「きやあああ、なんかなつちやいけない音がなつたつ」

「頑張れーアクアー」

汚い水で溢れる湖を檻に入った状態でワニに襲われながらも浄化し続けるアクアと、木陰で休みながら応援するカズマ、何故こんな状況になつたのかというと、時間を少し遡る。

「多少きつてもクエストを受けましようツお金が欲しい」  
デュラハンとの決闘から一週間が経つたとき、アクアがそういつた。

「「えう」と特にお金の困つていらないカズマとめぐみんが不満げな声をあげる。

「私は構わないが、私とアクアだけだと・・・」

「な、ならバサラは・・・って、まだ無理そうかしら?」

いつもなら俺の意見を聞く前に決定されるのだが、今日は珍しく大人しい。

「そうだぞ、バサラは病み上がりなんだから、あまりわがままいうな」

「もう大丈夫だと聞いたが本当に大丈夫なのか?」

カズマとダクネスが心配してくれている。

「大丈夫だつて、みんなの無事な顔を見たら元気でたわ」

「随分臭い台詞を吐くんですね。これがカズマなら鼻で嗤つてしまつたが、バサラだとなんかこう・・・」

「臭いって・・・まあ、いい。俺は大丈夫だからクエスト受けるなら受けようぜ」

「なら三人で受けましようツ」

アクアが目を輝かせる。

「はあ、仕方ない。大丈夫だつていつてるが病み上がりの奴に無理させることもあるだし、俺達もいくか」

「そうですね」

とまあ、こうしてクエストを受けることになつたのだが・・・  
クエスト選びはアクアに任せたのだ。

アクアが選ぶということもあり、ヤバそうなクエストを受けそうだ  
など思つた俺達は掲示板の前に立つアクアを見に行つた。

アクアが持つていた紙をカズマが奪い取る。

「なになに、『マンティコアとグリフオンが縄張り争いをしていて邪  
魔です。二匹まとめて討伐してください。』

報酬は五十万エリス』・・・つて馬鹿かッ』

ぶつちやけ、それだけなら俺一人で討伐出来そうだが、ここはパー  
ティのキズナを深めるためにも一緒にクエストを受けよう。  
すみません、嘘つきました。実はまだ本調子じやないです。

傷などはアークプリーストであるアクアによつて完治した。死の  
宣告もアクアによつて解呪してもらつたのだが、なんかこう力が出な  
い。本調子じやない。

考えられる理由としたらアガレスしかいないだろうな。

アイツのせいでベルディアは逃がすし、ファーストだけならずセカ  
ンドまで奪われるし、舌突つ込まれるし。

にしても、あいつの眼つてほんとに綺麗だなとか思つたり思わな  
かつたりする。

だがそんな心配をカズマたちに掛けたくないし、マジでヤバかつた  
ときは素直に休憩する。

だから、大丈夫だろう。

そう考へてゐるとアクアが違う依頼の書かれた紙を手に取る。  
「これなんかどう?」

「えつと『湖が汚くてブルータルアリゲーターが住み着いて困つ  
います。湖の浄化をお願いします。湖が浄化されるとモンスターは  
どつかに行くので討伐はしなくて結構です。報酬は三十万エリスで  
す』てかお前净化とかできたのか?」

「馬鹿ねあんた、私を誰だと思つてるの?」

「宴会芸の神だろ?」

「違うわよツ水の女神よ。私にかかれど淨化なんてちよちよいの  
ちよいよ」

「ならいいんだが……」

こうした経緯があり、俺達は湖を淨化していたのだが、予想以上にブルータルアリゲーターの数が多く、しかも淨化しているアクアに襲い掛かっている。アクアはモンスター用の檻に入っているので怪我はないようだが、時々みしみしとなつてはいけない音がなつていて、当然、アクアも涙目である。

「ピュリフィケーション、ピュリフィケーション、ピュリフィケーションツ」

必死に淨化魔法を唱えているアクアを見ていてなんか可愛そうになつてきた。

「・・・」

そして、俺の隣では頬が紅潮した金髪の女騎士が羨ましそうな眼でアクアを見ている。

「お前、楽しそうだなとか思つてる?」

「・・・少し」

「行くなよ?変態」

「はうつ、こ、小声で変態だなんて・・・」

駄目だ。コイツ、マジでド変態だ。引きはしないが・・・一応コイツも見張つておかないとな。

「きやああああ、ほんとにヤバいって」

流石にそろそろかわいそうになつてきた俺はアクアを助けに入る。

「なあ、ダクネス」

「なんだ?」

「あのワ二共に追いかけてもらいたくないか?」

「・・・詳しく聞こう」

俺は『ワイバーン』を召喚し、ダクネスをお姫様抱っこしてワニたちの近くに向かう。

なにするつもりですか二人共?」

「なあに、ちよつくらワ二どもの氣をひこうかなつて」

「俺も少し可哀想になつてさうだところが  
棘む」

【はい】それじゃあ夕餐行

「うるさい、早くスキル使えよ」

「はうつ、デ、デコイ」

俺はダクネスにクルセイダーのスキルであるデコイを発動させる。これにより、ワニたちは俺達の方へ釘付けとなり、追いかけてくる。「そんじや、アクアあと頼むぜ」

ガチで怖かつたんだろうな。顔とか涙と鼻水でぐちやぐちやだ。  
本人がいうにはアクアの体液は全て清い聖水?らしいが。  
「それで、どうだダクネス」

「これにいいな。厨が小さい  
うれいさんたちも、寂寂たる『一九七

「ほんと、平常運転だな」

「それより、この体制をやめてもらいたいんだが」

だつたりするのか?

一  
な  
つ  
バ  
サ  
テ

「うつああああ」

ダクネスが暴れる為、バランスを崩してしまった。その結果、ちよつとした絶叫マシンのようになつたのだが・・・

女からは想像ができないほど力強かつた。

それから一、二時間ほど逃げ回つてゐるといつの間にかワニたちは

消えており、湖も綺麗になつていた。

これをやり遂げたアクアはどうかといふと・・・

「外の世界怖い、このまま連れてつて」

重症だつた。ワニに襲われたのがここまで響いていとは、もう少し早く助け船をだしてやれば良かつたか?と後悔した。

「ダクネスだけずるいです。私も今度乗せてください」

機竜に運ばれていたダクネスを羨ましがりめぐみんがそんなことをいつてきた。

「はいはい、いつでも乗せてやるから。それより先にアクアをどうにかしないとな」

アクセルの街に戻つてきたのはいいのだが、いつまでも檻から出ようとしないアクアが周囲の人からすごい目で見られている。

「ドナドナドーナー」

「頼むからその歌を歌うのはやめてくれ」

「あれ女神様じゃないですか・・・つて女神様ツ」

この駄女神はどうやらまた厄介ごとを運んできたようだ。

## 魔剣の勇者

「女神様じゃないですかッ」

突然、アクアのことをそう呼んだのは茶髪の好青年だつた。俗にい  
うイケメンというやつだ。

アクアのことを女神と呼んだからにはこいつも転生者なのだろう。  
見た所、結構高そうな装備で体を守っている。

そして青年は一応ブルータルアリゲーターの攻撃でも壊れたりし  
なかつた檻を自らの腕力で捻じ曲げてアクアを中から出そうとする。

「ええっ」

「マジですか」

カズマとめぐみんの二人はゴリラ以上の腕力を持つであろう青年  
を見て引き攣つている。

青年がアクアと接触しようとした瞬間、いつものド変態なダクネス  
とは違うかっこいいダクネスが現れた。

「おい、私の仲間になれなれしく触れるな」

こういうとこだけは、ほんとカツコいいなと思ってしまう。これで  
言動がしつかりしていれば・・・

「おい、あれってお前の知り合いだろ？女神とかいってたし」

「女神？・・・そうよ、私は女神よ」

この駄女神と言う奴は、自分でもすっかり女神ということを忘れて  
たんじやねえかッ。  
先ほどの廢人のような雰囲気から一転し、いつものアクアに戻つ  
た。

うるさいが、こちらのほうがアクアらしくて安心する。

「それで、女神である私に何の用かしら、つてあなた誰？」

「ミツルギ・キヨウヤです。あなたにこの魔剣グラムをいただき、こ  
の世界に転生したミツルギ・キヨウヤです」

「えつ・・・」

まさか知らないのか？

「そ、そういうえばそんな人もいたわね。ごめんね、結構な人数をこちらに送つたから」

「まあ、それは仕方ないだろう。俺だつて忘れられてたっぽいし。  
「あなたに選ばれし勇者として日々頑張っていますよ。ところで何故檻のなかにいたのでしょうか？」

かくかくしかじかと理由を説明する。

「はアアアツ、アクア様をこの世界に轡きづりこんで、その上アクア様を湖に漬けたツ」

うん、滅茶苦茶怒つてる。

これはアレだな。キヨウヤは激怒した。必ず、かの邪知暴虐の冒険者から女神を救わねばとつて言う奴。

「ちよ、ちよつと、私は結構楽しんでるし」

「あなたは女神ですよ、ちなみにアクア様はどこに寝泊まりをしているのですか？」

「馬小屋だけど」

そして、更にカズマに殴りかかるとするミツルギ。

「おい、礼儀知らずにもほどがあるぞツ」

「ちよつと撃ちたくなつてきました」

ダクネスはともかく、めぐみんよ、貴様はやめい。

二人を見たミツルギはべた褒めする。

確かにこいつらはアークウェザードとクルセイダーだ。

それも、一発屋と攻撃が当たらないというところを抜けば結構すごいだろう。

「君達もこれからはソードマスターである僕と一緒に行動すればいい」

なんかちやつかり勧誘してるし。

俺もそろそろ止めようかなと行動にでるが、三人がミツルギにドン引きしており、俺もドン引きしていた。

ナルシストかコイツ。ティアマトの試練をクリアした後の俺みた いだ。いや、流石にここまでひどくはないな。  
三人とも勧誘を断つた。

「ええと、この通り、満場一致であなたのパーテイにはいきたくないらしいので、ではこれで」

結局最後まで何も言わなかつたが、俺も面倒だとは嫌なのでソロリソロリとついて行く。

「ちよつと待て」

しかし、簡単に行かせてもらえるわけもなく、ミツルギは再び俺達の前に立ちはだかる。

「勝負をしないか？僕が勝つたらアクリア様を譲ってくれ。君が勝つたらなんでも一ついうことを聞こうじゃないか」

「よし、乗つた。行くぞっ」

ミツルギの提案に即決したカズマは突然ミツルギに襲い掛かる。

「ステイール」

でた、カズマの必殺。

今回カズマが奪つたのは魔剣グラム。魔剣グラムを振り下ろす？というか、重さに耐えきれずそのまま振り下ろしたみたいだが、剣の腹がミツルギの脳天に直撃した。

案の定、ミツルギは目を回して倒れる。

「つたく、言いたい放題いいやがつて」

「卑怯者」

「卑怯者卑怯者卑怯者ツ」

ミツルギのパーテイメンバーと思わしき二人の女性が文句をいう。まあ、確かに少し卑怯だと思うがよく考える。魔剣持ちのチーチーが駆け出し冒険者と決闘しようだなんておかしいだろう。

「魔剣グラムを返しなさいッ。その剣はキヨウヤにしか使えないんだから」

「そうなのか・・・まあいや。せつかだし貰つとこう」

「こんな勝ち方認めないわ」

「真の男女平等主義者たる俺は女子相手でもドロップキックを喰らわせることができる男だ。手加減してもらえると思うなよ」

ニヤリと黒い笑みを浮かべるカズマが指を触手の様に動かす。

「まあ、待てよ。さつきから人が黙つてれば俺の大切な仲間を引き

抜こうだあ？

流石に俺も一言二言・・・十言くらい言いたくなつたので入る。  
「三人とも嫌だつていつてゐるのに無理強いをするのは勇者つていえ  
るのか？」

「な、何よ」

「それに、そのミツルギとか言う奴はソードマスターなんだろ？し  
かも魔剣グラムとかいう神器も持つてる。そんな奴が駆け出し冒険  
者であるカズマと戦おうだなんてなんだ？新手のいじめか」

「ち、違うわよ」

俺の言葉に一人の女性がたじろぐ。

「それに、こんな坊ちゃんだから知らねえだろうが、普通の冒険者つ  
ていうのは馬小屋生活から始まるもんなんだよ。お前みたいに最初  
から難しいクエストを受けて大金を貰えるわけじゃねえんだ」

俺は気絶しているミツルギの顔にカズマにクリエイトウォーター  
を掛けてしまう。

「もしもおゝし、ミツルギ君よ。聞こえてるか？」

「あ、ああ、聞こえる。そうか、負けたのか」

「ああ、だが、お前の仲間二人は納得してないみたいだ。そこでだ、  
もう一度だけチャンスをやろう」

上から目線な言い方だが、いいだろうこれくらい。

「ほんとうかいッ」

「ああ、今度は俺と一騎打ちだ。安心しろ、今回俺は魔法を使わな  
い。純粹な剣技だけでお前を相手にする」

「そ、そうか。見た所君は僕と同じくソードマスターってところか  
い？」

「まあ、そんなとこだ。それでいいだろ？」

「ああ、感謝する」

こうして、俺とミツルギの決闘が始まる。

「ダクネス、開始の合図を頼む」

「任せろ・・・始めツ」

「はあつ」

ダクネスが開始の合図を出すと同時にミツルギは剣を前に突き出しながら飛んでくる。

「ほいっ」

右に避けながらミツルギの足に機攻殻剣の鞘を引っかける。つまずいたところを俺は機攻殻剣を鞘ごと振りぬき転倒させる。この程度で終わるはずはなく、すぐに立ちなおしたミツルギがこちらを睨む。

「なかなかやるじゃないか」

「まあな、そういうお前は熱くなり過ぎだ。しつかり周りを見ろ」

「ツ、た、確かに少し頭に血が上っていた」

落ち着きを取り戻したミツルギは深呼吸を繰り返す。

「一ついつておくが、アクアは俺達の大切な仲間だ。いくら酒癖が悪く、借金ばっかりで宴会芸ばかり上達している自称女神だとしても、うちのパーティにはかかせないムードメーカーなんだ。引き抜くのはやめてもらおう」

「し、しかし、アクア様をこのままにしておけない」

「他の二人だつてそうだ。めぐみんは一発しか魔法を使えないかもしれないが、その一発が盤上をひっくり返す逆転の一手なんだ。ダクネスだつて攻撃が当たらぬという弱点があるが、アイツほど攻撃を受け止めてくれると信頼できるクルセイダーはいないだろう。カズマも卑怯な手を使うが、最弱職であるアイツの工夫だ。現に、アイツは初級魔法を工夫して使うことにたけている」

「・・・・・・・」

ミツルギは俺の言葉を静かに聞いている。

「ここまでいえば、分かるだろ。俺のパーティメンバーを引き抜くのは止めてもらおう」

「し、しかし」

「しかしあくそもねえんだよ。あんまりしつこいと沈めんぞゴラツ」

「ならば、次の一撃で決めよう」

『あれえ～今のいい感じにすまなかつたつてなるとこじゃない?』

「まあいい、分かつた。次で決めよう」

「・・・喰らえツ」

瞬間移動するかの如く俺の正面に現れたミツルギがグラムを横一線する。

しかし、俺には効かない。

「ベルディアと比べるとおせえんだよ」

グラムを機攻殻剣で受け止め心臓を全力で殴つてやる。

「グハツ」

いい感じに決まつた拳はミツルギの身に着けていた鎧に綺麗な拳型を残す。

「これぞハートブレイクショットってな」

白目をむいて気絶するミツルギを放つて俺は先にギルドへ戻る。

理由は恥ずかしいからだ。今思い出すと俺つてば恥ずかしいことばかりいつている。

## 魔剣使いと機竜使い

魔剣使いのヤツルギ君をちょいとばかり「おいらボコ」状態にしてやつた次の日。

俺達はギルドに来ていた。理由は先日受けたクエストの報酬を受け取るためだ。

報酬を受け取りに来たのは良いのだが・・・

「なんでよお～」とアクアの叫び声が聞こえる。

「あんだけ頑張ったのになんでこれっぽちしかないのよお～」

三十万エリスの報酬が十万エリスしかないようだ。

「檻の修理代もあるので・・・」

そういえば、ミツ、ミツ？ミツハニー？君がアクアを檻から出すときには檻を壊してたな。

一応、モンスターでも壊れなかつた檻なんだがすごいな。

「私が壊したんじゃないのにい～」

うん、ここまでくるとアクアが可哀想だ。確かに、昨日のクエストで一番活躍したのはアクアだ。

アクアがいなければ湖の浄化なんてできないしな。

「ぐすつ」

涙目になつてているアクアを見ていると可愛いなと思う。いや、酷い奴だと自覚しているが、普段は生意気というか傲慢というか上から目線な女神がしょんぼりしているとなると可愛いなと思うじやん。そしてダクネスは俺のそんな思考を読み取つたか如く・・・

「バ、バサラは歪んでいるなツ、はあ、はあ」

「おい、黙れツ。それ以上なにも口出しするな」

俺は食べていたジャイアントドードの唐揚げをダクネスの口に放り込む。

「ふぐつ」

喉を詰まらせたようで、頬を紅潮させながら呑み込んでいる。

「・・・昨日はなんかカツコいいこといつてたのに、バサラもカズマと同じでヤバい奴ですか？」

めぐみんがジト目でこちらを見てくる。

「昨日のことは忘れて欲しいなあ、俺もね、ちよいと臭い台詞いつたなつて思った」

「確かに昨日のバサラは私から見ても少しひきめいたぞ」

「ダクネスが乙女にツ」

「お、おい、失礼だぞお前ら。私だつて女だ。カズマもなんかいってやれ」

「変なもんでも食つたんだろ」

「はうつ」

「「あつ、いつものダクネスだ」「

とまあ、いつも通り過ごしているとアイツが現れた。

「サトウカズマとバサラはいるかツ」

俺とカズマが呼ばれる。俺の方が名前しかないのは、俺の名字を知つてる奴が少ないからだろうか？

「なにしに来たんだ？また、ボコられに来たのか？」

やつて來たアイツ、ミツルギに向けてカズマが嫌み成分たっぷりの返答をする。

「ゴッドブロおおおおおおお

突然アクアがミツルギに向かつて拳を放つた。

「あんたのせいで檻の修理代払わないといけないじやないどうしてくれるのよツ。三十万よ三十万」

まるでいじめつこのカツアゲを見ているかのようだ。それにしてもおかしいな。確か檻の修理代は二十万エリスだつたはずだ。そしてミツルギは素直に三十万エリスをアクアに渡す。

ミツルギからお金をもらつたアクアはすぐさま唐揚げとシユワシユワを注文する。

真つ赤になつた頬をさすりながらミツルギはカズマに話をする。

「謝りに來たんだ。昨日はすまなかつた。それでなのだが、その、僕の魔剣グラムを返してもらえないだろうか？」

「それは随分と都合がいいんじゃないのか？」

カズマがそういった。

俺はなにもいわないのかつて？別にいうことはない。俺がいいたかつたことはしつかりとミツルギに伝わつてゐるみたいだしな。

ミツルギもアクアが俺たちの大切な仲間ということを理解してくれた。なら、俺からいうことはなにもない。

あとはカズマとミツルギの問題だ。そこに水を差すなんて俺にはできない。

「そ、それは確かにそうだ。し、しかし」

そこでめぐみんがミツルギの前にたつ。そしてこういった。

「まず、この男がすでに魔剣をもつていないことについて」

「サ、サトウカズマ……ぼ、僕の魔剣は？」

「売つた」

「ちっくしょおおおおお」

ミツルギは仲間をおいて博打に負けた男かのように大声をだして冒険者ギルドからでていった。

そしてそんなミツルギを仲間の少女二人も追いかけた。

「いつたいなんだつたのだ？」

ダクネスが出ていつたミツルギにたいしてそういうた。

「それと、先程から女神様とはいつたことなのだ？」

ダクネスがそういうかけたときには冒険者ギルドからでていった。

とある武器屋の前

「僕の魔剣は売つていらないのか？」

「悪いね、確かに昨日すんごい剣がはいつてきたけど、すぐに売れちまつたんだ」

二人の男が話をしていた。一人はもちろんミツルギ、そしてもう一人は武器屋の店主だ。

「クッ」

悔しそうにミツルギが声を漏らす。

「「キヨウヤ」」

そんなミツルギの姿を見て仲間の少女二人も心配そうな表情を見せた。

「店主さん、誰がその剣を買ったのか教えてくれますか？」

「えっと君の後ろにいる子だよ」

「「えつ」「」

三人は一斉に振り返った。

「よう、ミツルギ」

鳩が豆鉄砲を食らったかの表情をするミツルギたちに俺はそういった。

場所は再び変わりとある街道のベンチに俺を含めた四人は座つてた。

「魔剣、返してほしいか？」

いつまでもミツルギたちがダンマリするものだから俺から話題をふる。

「あ、ああ、返してくれるのかい？ お金はいくらでも払う」

「お金はいらねえよ。ただ、条件がある」

「ちよ、キヨウヤ」

「わ、私たちがなんでもします。だからツ」

すると一人の少女が突然そんなことをいいだした。

「やめろよ、俺までカズマみたいに噂されるだろ。話は最後まで聞けよ」

なんとか三人を落ち着かせたあと、話を再開する。

「それで、条件と言うのはいつたい？」

「ミツルギは魔剣に頼り過ぎているつていう自覚はあるか？」

「・・・ああ」

「だよな、俺も自覚あるし。転生特典なんていうチートをもらつたら誰だつて楽にできる」

俺の話を三人は静かに聞いてくれる。

「もしだ、もしも転生特典が効かない相手や使えない場所にいったとき、そんな状況でお前は何ができる?」

「剣術スキルがあるから多少は戦える」

「確かにそうだ。そこでだ、少しの間、グラムを使わずに戦う練習をしてもらおうと思う。それができたらお前にこのグラムを返す。お金もいらない」

「その話ほんとうなんだね?」

「ああ、嘘はつかねえ」

「わかつた。それで、具体的にどうすればいいんだ?」

「実はな、王竜の祠つていうダンジョンにとある竜がいるんだ。その竜に俺の名前をいって鍛えてくれつていえ。

そうすればその竜はお前を鍛えてくれる」

「わかつた。そうすることにするよ。それにしても、君はどうして僕に優しくしてくれるんだい? 昨日の件といい、僕は君に邪険に扱われても仕方ないと思つていてる」

ミツルギは俺の顔を見てそういつた。

「同郷だからってのもあるが、パーテイーメンバーに慕われているところをみると悪いやつではないってわかる。  
そうだろ?」

「ええ、キヨウヤは優しくて強くて」

「私たちを守ってくれる。だから私たちもキヨウヤを守りたいし、助けたい。ついていきたいの」

心の底からの言葉に俺も少し涙がでそうだ。

「ほら、可愛い子がこんなに好いてくれてるんだ間違った行動をとつてしまつても、悪いやつじやない。なら間違つたことを間違つているつて教えてアドバイスする。そしたらただのいいやつになる」「バサラといったね、ありがとう」

「気にするな。ひとついつておくが竜の試練は厳しいぞ、下手すれば死ぬかもな。俺も何度死にかけたことやら……」

「ツ……そ、それでも僕は頑張るよ」

「わ、私も」

「私だつて頑張るわ」

「そつか、ならなにもいわない。じやあな、今度あうときはお前が強くなつたときだな」

そういうて俺は魔剣グラムをミツルギに渡す。

「えつ？」

「王竜の祠までいく前に死んだらもとも子もないだろ？念のために持つとけ、たどり着く前に死んだらもともこもないしな。まあ、それも含めて試練かもしれないが、俺はそこまでスバルタじやねえよ。じやあな」

少しカツコつけて俺はカズマたちのもとへ戻つた。

## ベルデイアさん再来

前回までの簡単なあらすじミカルギ君となんとなく仲良くなつた。そしてあれから数日たつた現在、『アクセルの街』には二人の来客があつた。

一人は魔王軍幹部の首無しの騎士ことベルデイア  
もう一人は俺の天敵である魔王軍幹部眼が綺麗な怖い奴（↑命名俺）がやつてきた。

「おいアガレス、あの男は俺の獲物だから手出しをするなよ」「なにいつてるのよ、彼は私の方が先に目を付けていたのよ。あんたは雑魚どもを駆逐していいじゃない」

身に纏うのは完全なる強者の風格ではあるが、幼い子供のような言い争いをしているのを見ていた冒険者たちは困惑していると同時に駆け出しの自分達に何ができるのか？と考えていた。

そしてカズマたち一行はというと・・・

「どうするんだよアクアッ！」

「また来たのねあの腐れアンデッド、今日こそは私が浄化してあげるわ」

「ふふふ、我が爆裂魔法にかかるべ魔王軍幹部など一撃です」

「あのデュラハンの目つきを見る。舐めまわすかのように女性たちを見ているぞ」

カズマたちは今日も平常運転だつた。

「バサラア～早くおいでなさい。私が可愛がつてあげるわ」

「おい小僧、貴様は俺との再戦を望むのであろう。早くあの奇妙な鎧を纏い、俺と戦え！」

魔王軍幹部のお二人はお二人でバサラとどつちが戦うかでもめているし、何このカオス・・・

「そんなに人の名前呼ばなくとも戦いますよつと」

「バサラツさつさと機竜使つてあいつらボコボコにするわよ」

心底めんどくさいという気持ちを持ちながら俺はベルデイアとア

ガレスの前に立つ。

そして俺に続くようにアクアが俺の横に立つた。

「ようやくでてきたか」

「ふふふ、ねえあなた。なんで私のバサラの隣にいるのかしら？」  
バサラが出てきたことによりベルデイアは待ちくたびれたぞとい  
いたげな反応をし、アガレスは自分のおもちゃを他人に取られたかの  
ような反応をする。

「私は水の女神アクア様よツ。あんたたちみたいな腐れアンデッド  
にはぴつたりのお相手ということをしつかり理解してるのかしら？」

「お、おいアクアツ」

自身満々にベルデイアと戦おうとするアクアをカズマが取り押さ  
える。

「放しなさいよカズマツ、今いいところなんだから」

「お前は女神でも駄女神だろうがツ、あんな奴に勝てるわけないだ  
ろ。はやく下がれよ」

「嫌よツ」

「アクアツ！」

カズマがアクアを羽交い絞めし下がろうとする。

「頼むからいうことを聞いてくれツ」

「絶対に嫌ツ。これだけは何が何でも聞けない」

「アクアツ、いい加減にしろ」

断固拒否するアクアを見たカズマがついにしひれを切らし、アクア  
を叱りつける。

「だ、つて、だつてだつてだつて、バサラだけに任せられない  
じやないツ！」

「ツ・・・アクア」

「バサラは確かに強いけど、無理ばっかりするもの。この前だつて  
無理してた。だから、私も戦うのツ」

いつもの宴会芸を披露したり、酒をがぶ飲みしているアクアではな  
く、女神としてのアクアがカズマに訴える。

仲間のために自らも戦おうとするアクア。普段のアクアなら人任せ

せにするであろうが、今回は自分も全力で戦うと目が物語っている。

「……そうだな、バサラだけじゃ無理するもんな」

「大丈夫ですよアクア、私の爆裂魔法が火を噴けばあんな奴ライチコロですから」

「私も攻撃は当たらないが壁としてなら戦える。クルセイダーを舐めるなよ」

そんなアクアの姿を見てカズマだけではなく、めぐみん、ダクネスも戦場に立つた。

「お前ら……」

俺は本当なら下がつてろと言いたかった。しかし、カズマたち、仲間たちの意思が籠つた瞳を見て何もいえなくなる。ここで彼らに下がつていろいろなんていつてしまつたら、彼らの意志を無駄にしてしまいそうだからだ。

「回復魔法頼むぞ」

「ええ」

「爆裂魔法の準備しとけよ」

「任せてください」

「あんまり壁になるとか言つてほしくないんだが、頼りにしてるぜ最硬のクルセイダー」

「ああ、望むところだ」

「カズマ……作戦を頼んだ」

「おうッ、この町は俺達で守るぞ」

俺が頼れる仲間たちにそれだけ伝えるとカズマたちだけではなく、その後ろにいた冒険者たち全員が武器を手に取つた。

「いくぞお前ら、アイツらだけに良い格好させんじゃねえ」

「たりぬえだッ」

「バフ魔法頼むぞ」

「切込み隊長様のお通りじやあああああああ」

駆け出し冒険者が集まる『アクセルの街』の全冒険者の思いが一つとなつた。

「……くだらない……」

静かにそう呟いたのはアガレス。

「くだらないわね、いくら数が増えようと羽虫は強者に勝てないのよ。バカじやないかしら」

「さて、俺はそろそろ貴様を斬るとするか。ハツ」

アガレスが冒険者たちに毒を吐いているうちにベルデイアは大剣を構え一瞬でバサラとの距離を詰めた。

「ツ」

とつさになんとか防ぐことができたバサラだつたが様子がおかしい。

「どうだ、魔王様によつて強化された俺の力は。先日の俺と思つて戦うと貴様の首は飛ぶことになるぞ」

「クツ」

「バサラツ《セイクリッド・ターン・アンデツド》

足元が地面に埋もれてしまつているバサラを見たアクアがすぐに浄化魔法を発動しへルデイアの弱体化を図る。

「グツ・・・本当に貴様は駆け出しのアークプリーストなのか？魔王様に強化されてなかつたら今のでやられていたかもしれないな」

「サンキュアクア」

決定打にはならなかつたものの、ベルデイアの体制を崩すことに成功し、即座にバサラは体勢を整える。

「早くあの機竜とかいうものを呼べ」

「いわれなくともわかつてるよ」

バサラは細剣の機攻殻剣を取り出し《リンクドヴルム》を呼び出す。

「さあ、ウォーミングアップはおしまいだ。本気で行くぞ」

「来い小僧」

「ハアアアアアアツ!!」

大槍と大剣がぶつかりあうと火花が散る。

「ちよつと、何一人で楽しんでるの？」

そういつて二人の戦いに割り込んできたのはアガレス。浮遊魔法を発動しているようで空中に浮いていた。

手には禍々しいオーラの漂う杖を持ち、魔法の準備をしている。

「今だッ矢を放てッ」

するとカズマの声が後方からする。その後、百以上の矢がアガレスに襲い掛かった。

「小賢しいわね」

といつて矢はアガレスに当たる直前で見えない壁のようなものに弾かれる。

「効かないか・・・聖水の用意をしろ」

再びカズマの声が聞こえる。なんだ、やつぱりカズマには指揮官としての能力があるんじやないか。

なんて思っているとベルディアの攻撃が機竜の装甲を僅かに傷つけた。

「なんて硬さの鎧だ。貴様もしや日本人か？ならその強さも納得だ」

ベルディアは日本人のことをしつているらしい。

「しかし、俺も何十人と日本人を葬つてきた。貴様にはここで死んでもらうぞ」

「それは困るわベルディア。バサラは私のモノになるのだから」「ええい、邪魔をするなこのアバズレ」

「誰がアバズレよッ。もう怒つた。『テストロイ・ジャッジメント』アガレスが魔力を込めて魔法名を唱えると杖の先が紫色に輝く。「お、おいつ、それは洒落にならないぞ」

ベルディアも焦つている。それほどまでに強力な魔法なのか？警戒しているとアガレスはベルディアに魔法を放つ。

「ぐああああああああ」

「えつ？」

まさか、本当に同士撃ちをすることは思つていなかつたため、アガレスの行動に目を丸くする。

そして、魔法を喰らつたベルディアは体の右半分が消滅し、左半分と左手に持つていた頭だけが残つた。

「私を怒らせた罰よ。うふふ」

ローブから見える表情は恍惚としており、なんともいえない気持ち

になる。

「き、貴様ツ馬鹿なのかツ本氣で仲間を撃つ奴がどこにあるのだつ」

「あらやだ、私は一度もあなたを仲間だなんて思つた事は無いわ」

「今ねツ《セイクリツド・ターン・アンデツド》』

「ぬおおおおおおおおおおおお」

そこに追い打ちをかけたのは頼れる俺のパーティメンバーの回復担当アクアだつた。

完全に弱り切つていたベルディアにはアクアの浄化魔法は流石に効いたらしく、蒼い光の粒子となつて消えていく。

それを見届けていた全員は・・・

「えつ？・・・えつ？」

アガレス……まさか……

「えつ？」

まさかのベルディアさん退場展開に俺は戸惑いを隠せなかつた。しかし、それと同時にラツキーと思つたのも事実だ。

「やつたわバサラ。あとはそこの女だけよ」

「お、おう、助かつた」

ひとことふたことくらい何かいいたい気もするが……一生懸命やってくれたアクアは何も悪くないはずだ。

ただ少しだけ空氣を読めないだけで何も悪くない。一応、良い子だしな。これ以上責めるのも酷な物だろう。

そう自分に言い聞かせたあと、俺はアガレスと対峙する。

「うふふ、ようやくあなたを私のモノにできるのね」

完全にヤバい人と化しているアガレスを前に俺も少しビビついた。

「一応いつておくけど、私には瞬間移動は効かないわよ」

「それはご丁寧に」

「あのときの黒いのは見せてくれないのかしら？」

アガレスがいつているのはおそらく『バハムート』のことだろう。

『バハムート』は確かに強力だが個人的には一体一の戦いに使うよりは何千もの敵を相手にした時の方が使い慣れている。それに黒い機竜に乗れば俺の居場所がアイツに伝わってしまう。

「悪いけど黒いのは使えないんでね。代わりにこちらでもどうよ」

そういうつて俺は『リンドヴルム』を解除して、赤い機攻殻剣を取り出す。

「うふふ、一体どんな竜が出てくるのかしら……」

詠唱符を唱えようとすると俺の体内を流れる血液が一気に沸騰するかのような感覚に陥る。

「分かつてるつて師匠……目覚めろ、開闢の祖。一個にて軍を成す神々の王竜よ、『ティアマト』」

その後、俺は赤い光に包まれた。

「さてと、力を借りますよ師匠」

言葉は発さないが師匠の言葉が伝わってくる。

『ぶちのめせ』と・・・

「美しいわあ～本当にあなたは私を飽きさせないわね。うふふ、ますますあなたが欲しくなつちやつた」

ペロリと舌なめずりをするアガレス。

「それでは、楽しい楽しい舞踏会といきましようかレディ。私のダンスは少々荒っぽいですがご了承ください・・・『七つの龍頭』<sup>セブンス・ヘッズ</sup>すぐに『ティアマト』の特徴ともいえる高火力の特殊武装を開幕し、ぶつぱなす。

その竜の顎から放たれた閃光は爆裂魔法にも負けない一撃である。紅の光は一直線にアガレスの元へと向かう。そしてそのまま遠い彼方へと軌道を残し、消えた。

「すごい威力ね」

「やっぱり瞬間移動を使えるのか」

直撃したかと思いきやアガレスは俺の背後で何事も無かつたかのように佇んでいる。

「ツ」

そして直後、一瞬で俺の目の前に瞬間移動したアガレスは俺の唇を奪おうとしてくる。

「もう喰らわないぞ」

「あら、残念。せつかく堕としてあげようと思つたのに」

三度目は流石に洒落にならない。二度の戦いで学習した俺はとつきにバックステップで回避する。

「うふふ、私も少しだけ力を見せてあげる」

『ファンタズム・パーティ』

小さな声でそう呟いたアガレスの姿がブレる。一人から二人、二人から四人さらに八人へとアガレスは増えた。

「「「「「どう?面白いでしょ」「」「」「」」

声が八つに聞こえて気持ち悪い。

「マジかよ」

ただでさえ面倒な相手が八人になるとか・・・これが幻術ならば本体は一体だけなのだが、某忍者漫画の影分身のように実体化しているとすれば面倒なことこの上ない。

「だがしかし、分身が増えた所でこの機竜には相性が悪かつたな」

俺が纏っている機竜は神装機竜《ティアマト》その真なる力神装の能力とは・・・

「喰らえ《天スプレッシャー声》」

俺が神装を発動させると宙に浮いていた八人のアガレスは地面に這いつくばる。

そう、この機竜の神装の能力とは重力制御。

いくら人数が増えようとも重力制御の前では動きが封じられる。

「なつ」

そしてアガレスもこの神装に驚いたのか先ほどまで八人だつたのが一人、つまり本人だけになる。

「くつ、から、だが、重い」

「これで終わりだといいたいが・・・」

《リンドヴルム》に続き、《ティアマト》を操作したため俺の体力は既に底をつきかけようとしていた。

本来ならもう一度《七つの龍頭》セブンズ・ヘッズを使つて終わらせたいところだが、ここで特殊武装を使うと下手すれば機竜が暴走する可能性がある。

暴走した機竜は搭乗者を命に危険に招くだけではなく《アクセルの街》にも被害を与えてしまう。

「めぐみいいいん。準備は出来てるかツ」

「は、はいつ」

「撃てツ」

「任せてくださいツ。我が最強の爆裂魔法を受けるがいい《エクス

プロージョンツ》

だからこそ、俺はパーティメンバーで一番の火力を持つ厨二口りのめぐみんに託す。

おびただしい量の魔力が集まり、闇を作り星を作りそして爆裂を生み出す。

「ぐつ・・・」

爆裂する直前、アガレスの声が聞こえた。これでアイツもベルディアと同じ場所へ行くだろう。

爆裂魔法が平原を焼き尽くしたあと、砂ぼこりが巻き上がり、視界が遮られる。

少しづつ煙は晴れていく。そして、完全に煙が収まつたあとに残つていたのが焼尽と化した平原。

アガレスの姿はそこになく。勝つたのだと確信した。

冒険者たちも勝どきをあげようとしたその直後

「危ないッ」

ダクネスが機竜を解除した俺の正面に立つ。

「ガハッ」という声がしたと思つたらダクネスは倒れる。

「ダクネスッ」

「だ、いじょうぶだ」

すぐに抱き起すと軽い打撲で済んだダクネスに安心する。

そしてダクネスを攻撃したのは・・・

「よくもやつてくれたわね」

アガレスだつた。

顔を隠していたフードは完全に燃え尽きてしまい素顔が見える。

人形のようになつてゐる顔だが、一か所だけ明らかに人間とは違う

場所がある。頭だ。

アガレスの頭からは二本の角が生えていた。

そしてその角は俺も似たようなものを見たことがある。といふか、なじみ深い角だ。

「お前・・・竜なのか？」

「ツ・・・見られちやつたら仕方ないわね。吹き飛びなさいッ 『デスマロイ・ジャツジメント』」

顔を見られたことで逆鱗に触れてしまつたのかベルディアに向

かつて放つたものと同じ魔法を『アクセルの街』へと向けて放つ。

「避けろッ」

声が張り裂けそうな勢いで叫んだ。

そのおかげで冒険者たちは直撃を免れたが四肢をなくした者とかもいる。これくらいならアクアの回復魔法でどうにかなるだらうと思つたが、『アクセルの街』の城門は吹き飛ぶ。

「つ、次こそは必ずあなたを私のモノにしてあげるから覚悟しないよッ」

怒りが収まつたのか冷静に戻つたアガレスがそう吐き捨てて消える。

「また逃げられた」

その後、俺の意識も途絶える。

最後に感じたのはめちゃくちゃ硬い鉄の感触とふわりと俺を優しく包む甘いい匂いだつた。

## 特別報酬・・・

アガレスが去つたあと、氣を失つたバサラをダクネスが抱き止めた。

「全く、お前はいつも氣絶してゐるな」

子供のような寝顔を見せるバサラを見てダクネスは「うふふ」と微笑む。

その姿からは普段のドMのド変態という事実が信じられない。それほどまでに今の彼女は美しかつた。

「ダクネスう」

そんな彼女のそばにカズマとめぐみんも駆けつける。

「バサラは無事ですか？」

「ああ、氣を失つてゐるだけだ」

「ほんとこいつは心配ばつかさせられるぜ」

人の氣もしらないですやすやとダクネスの膝枕で眠るバサラを見てカズマがデコピンを放つた。

ペチンといい音が響くと同時にバサラの顔が若干強ばる。

「お、おい、やめてやれ」

「いいや、これくらいしとかないと氣がすまない。いつたいどれだけ心配したと思つてるんだ」

そういつてカズマはため息を吐く。

「カズマさん、バサラは？」

するとそこへ先程まで負傷者の治療をしていたアクアがやつて来る。

「命に関わる怪我はないわね。《ヒール》

アークプリーストの十八番である回復魔法を使用しバサラの怪我を治す。

「それにしてもやはりバサラの機竜はカッコいいですね」

「そうだな、こいつは俺たちの英雄だよ」

「ああ、全くその通りだ」

ベルディアとアガレスの襲来の翌日。

カズマたち一行は冒險者ギルドにて報酬が渡されていた。

ギルドの酒場はいつもより人が多く、昼間だというのにベルディア討伐記念の宴会が開かれていた。

「ダクネス、私だつて少しくらい飲んでもいいじゃないですか？」

「ダメだ。幼いうちから飲んでいると体を壊す」

「カズマツ、ダクネスがケチなことを」

「今日くらいいいじゃないか」

「し、しかしだな」

報酬をもらつたカズマたちも飲んだくれている。

「それじやあ、俺はジュースでももらおうかな」

「〔バサラッ〕」

「よう、全くひどいな怪我人放置で自分達だけ宴会を楽しむだなんてよ」

酒のことでのめぐみんとダクネスが争っていたが、そこへバサラが入り込む。

「怪我はいいのか？」

「怪我はアクアが完治させてくれた……つてなんかデジャブだな。まあいいや、それよりめぐみんも絶対に飲むなとはいわないがあまり飲みすぎるなよ」

「は、はい。バサラは飲まないんですか？」

「あ、ああ、俺までカズマみたいにセクハラ魔になりたくないしな」何かを誤魔化すようにバサラは酒を断る。まるで過去になにかあつたかのように・・・

「バサラ、報酬はもらつたの？」

すると今度はアクアがやつて来る。

アクアの両手には扇子が握られており明らかに先程まで宴会芸を

疲労していたとわかる。

「報酬か」

そして報酬を貰いにいったのはいいのだが‥‥

「実はカズマさんたちのパーティには特別報酬が出ていまして。魔王軍幹部のベルデイアを見事撃ち取つたということで、三億エリスを与えます」

「「「さ、三億ツ」」」

バサラ以外はその金額に目を回す。

「さ、三億だつてなんかおごれよカズマ」

「カズマさあくん、素敵い」

あちこちでカズマたちを称えるもとい玉の輿を狙う声が聞こえる。

「え、ええと、その‥‥カズマさんたちにはアガレスが最後に放つた攻撃の被害を弁償してもらうという声が上がつております。さすがに全額ではありませんが一部ということで三億四千万エリスの弁償金額が」

苦笑を浮かべるルナを見てカズマは顎を地面上にぶつけるほどに口を開ける。

「全く、あの女はどんだけ人様に迷惑をかけるんだよ」

ここまでくると笑うしかないとでも言いたげにバサラは先程受け取つた報酬の五十万エリスが入つた袋をルナに渡す。

「これで残りは三千九百五十万エリスだな。俺は金に困つてないから今回はいらない」

「かつけえ」とカズマがこぼす。

「というか今回のMVPは完全にアクアだしな。ベルデイアの淨化に加え死人の蘇生と怪我人の治療」

「それはそうだけど?ほんとにいいの?」

「いつも金、金いつてるアクアが遠慮するなんて珍しいな。気にはな、その気になれば残りの借金だつてすぐに返せるしな」

そういうてバサラは先程注文したジュースをガブ飲みする。

「ふはあ〜、アガレスのやつ次あつたら絶対に許さないからなああ  
ああ」

ジョッキのジュースを飲みきつたあと、バサラは大声で叫ぶ。

## この素晴らしいパーティーに祝福を！

### 冬将軍到来

一面真っ白な雪のカーペットが広がる世界にの一ヶ所に真っ赤な液体の水溜まりができていた。

そしてその傍らには首から上を失った俺のパーティーのリーダーであるカズマ。

少し離れた位置には目の光を失っているカズマの頭があった。

「カズマアアアアアア」

一気に全身の血液が沸騰するかのような感覚に襲われる。

しかし、俺は落ち着いて冷静になる。怒りに任せて行動してもなにもできない。

そう、わかっているから冷静になる。

なぜこうなったのかと、ことのはじまりは少し前まで遡る。

あの宴会から数日後、俺たちのパーティーはとんでもない危機に襲われていた。

「金がほしいッ」

「そりや誰だつてほしいわよ。というかあんた甲斐なさすぎでしょ。仮にも女神である私を転生特典に選んでおきながらこの有り様よ。少しほんの見習つてほしいわ」

カズマの悲痛な心の叫びはアクアの言葉によつて一蹴されてしまう。

「はあ、なんで俺たちだけに借金がかかるんだよ」

「悪いな、あそこで俺が完全にあいつを倒してたら借金なんてなかつたはずなのに」

二人の会話にサラが加わる。

サラの表情はいつもとは違つて心の底から申し訳なさそうだ。

それもそのはず、カズマたちに背負わされた借金はもとをたどれば

アガレスがやつたことではあるが、さらに遡るとバサラとの因縁から始まつたことなのだ。

「お前だけが悪いわけじゃねえよ。つたくこの領主はちゃんと仕事をしてゐるのか？」

カズマの愚痴は領主へと矛先を変える。

「全く、お前らは朝から何を騒いでいるのだ？」

そんな三人を見たダクネスとめぐみんが頭を抱えながらやつて来る。

「クエストを受けましょう」とめぐみんが提案する。

「そうだな、先程ちらつとみたがどのクエストも報酬がいいものばかりだ」

「よし、いつまでもウジウジしてられねえな」

そういうつて掲示板を眺めたのはいいのだが……

「どれも高難易度クエストしか残つてねえじゃねえか」

「なんだつたら俺一人でやつてこようか？」

「いや、それだと大変だろ？ 昨日の疲が完全にとれたつてわけじゃなさそудаし」

俺がカズマにそう提案するが却下された。

「こ、これなんかどうだ？」

そういうつてダクネスが手に取つた依頼は牧場を襲う白狼の群れの討伐。

「獣たちに蹂躪される……いい」

いつものド変態ぶりを見せるダクネスにバサラ以外がドン引きしている。

「却下だ却下。おつ、なんだこれ？」

そう呟いたカズマが目につけたのは

「機動要塞デストロイヤー接近中につきその偵察？なんだよデストロイヤーって」

「デストロイヤーはデストロイヤーだ。高速で移動する要塞」

「ワシヤワシヤ動いて全てを蹂躪する子供達に妙に人気のある奴です」

「いや、そういうわれてもわからねえよ」

「まあ、簡単に説明するなら坊ハ○ルの動く城が辺り全てを殲滅するようになつた危険な要塞といえばいいか？」

「へえ～、却下」

偵察くらいなら大丈夫だとは思うがめぐみんあたりが「わが爆裂魔法を受けてみよ」とかいいだして面倒なことになりそうだ。

「雪精ってなんだ？」

そしてカズマが選んだこの雪精討伐のクエストがあの悲劇を産み出すことを俺たちはまだしらない。

そして場所は変わり、とある平原へと俺たちは来ていた。そこはまだ冬ではないはずだが辺り一面が真っ白な雪でおおわれている。この白いのが雪精なのだろう。

「それでお前らその格好はなんだ？」

カズマがそういいたいのもよくわかる。

なぜならアクアとダクネスの格好がおかしかつたからだ。アクアは虫取網に小瓶を持つていて。どこかに虫でも捕まえにくつもりだろうか？

「雪精を捕まえればいつでもキンキンに冷えたしゅわしゅわがのめるでしょ」

そしてダクネスはとくに

「鎧はどうした？」

「修理中だ。なに、安心しろ多少寒いとは思うがそれが我慢大会のようでこうふ・・・なんでもない」

「風邪引くなよ」

防具も着けないで剣を背負うダクネスに俺は軽くいっておく。まあ、こいつが風邪を引くかどうかは知らんが・・・というかコイツつて頑丈すぎて風邪ひかないんじや・・・

そして雪精討伐が始まつたのだが蓋を開けてみると雪精を討伐するるのは簡単だつた。

雪精自体こちらに攻撃することがないのでこちらは思う存分雪精を討伐することができた。

一匹倒すことに春が半日早く来るといわれており、一匹討伐するだけで十万エリスも報酬が出る。

俺はすでに機攻殻剣で五十に届きそうなほど雪精を討伐していた。

ちなみにカズマは三四、めぐみんは爆裂魔法を放つて八匹。ダクネスはいつもながら攻撃があたらず一匹も討伐できていない。アクア？ああ、あいつなら用意した小瓶に雪精を詰めてるよ。

「見てみて四匹目よツ」

ほら、こいつに至つては討伐するんじやなくて捕獲目的だからな。

「むつ、来たな」

そのときだつた、突然俺の鍛えられたセルフ気配探知にとんでもなくヤバい存在が引っ掛けた。

「カズマに教えてあげるわ。何故冒險者がこのクエストを受けないのか。それはね、あなたも一度は聞いたことあるかもだけど、冬将軍が出るからよ」

そしてアイツが現れた。

真つ白い雪の鎧武者。冬将軍が…  
めぐみんは死んだふりをし、カズマはアクアと逃げている。ダクネスは…・つて何やつてんだ。

ダクネスは防具を付けていないにも関わらず冬将軍へと切りかかつていた。

攻撃は勿論空を切り、冬将軍にはかすり傷一つついていない。

「馬鹿ツ」

そして冬将軍はダクネスへ攻撃を放つが、その瞬間、俺がダクネスを抱きかかえて離脱する。

「何考えてんだお前はツ」

「バ、バサラ、いまいいところだつたのに・・・これがお預けと言う奴か」

「お前なツ性癖についてはなにもいわないが死ぬところだぞ」

「わ、私は死ない」

「はあく、あとで覚えてろよ。そんなにお仕置きされたいなら俺がしてやる。だから今は逃げるぞ」

そういつてその場から逃げ出したが冬将軍に追いつかれてしまう。

「冬将軍は寛大よ、きちんと謝れば許してくれるわ。さあ、みんなで土下座するわよ」

逃げられない」と悟ったアクアはその場に倒れるようにして綺麗な土下座をした。

死んだふりをしていためぐみんもいつの間にかこの場におり、土下座をする。

「き、騎士が頭を下げられるかッ」といつてダクネスは断るが、俺が全力で地面に叩きつける。

「はうつ」と嬉しそうな声をだして顔を埋もれさせる。

そして俺がカズマの方を見て瞬間だった・・・

「カズマッ」

「えつ?」と間抜けな声を出した瞬間、カズマの頭と体はお別れグツバイをし首からおびただしい量の鮮血を巻き上げる。

真っ白だった雪のカーペットは一瞬で真っ赤なレッドカーペットへと変わり、カズマも物言わぬ死体となつた。

「カズマアアアアアアア」

そして冒頭へと戻る。

俺は来ていたコートをダクネスに掛け空間魔法で短剣の機攻殲剣を取り出し詠唱符を唱えた。

「始動せよ。星碎き果て穿つ神殺しの巨竜。百頭の牙放ち全能を殺せ、《テュポーン》」

そして現れた紫の神装機竜は即座に冬将軍へ向けてワイヤーを射出すると冬将軍の体に突き刺さる。

「喰らえッ 《竜咬縛鎖》<sup>バイイル・アンカ</sup>からの《竜咬爆火》<sup>バイティング・フレア</sup>」

その直後、冬将軍に刺さつていたワイヤーを巻き取りその体を掴むことに成功した俺は、『テュポーン』の特殊武装の能力である爆破の能力を使い冬将軍へダメージを負わせる。

雪の塊である冬将軍は流石に爆破には堪えたらしくところどころ雪が解けていた。

「カズマツ、カズマツ」

背後ではアクアがカズマを蘇生する声が聞こえる。

アクアならカズマを生き返らせると分かつてはいたが、アクアが頑張つている声を聞いて更に冷静になれた。

そこからは特殊武装での攻撃のオンパレードだつた。

ワイヤーで近づいて爆破、近づいて爆破、一度離れて、背後から回り込み、爆破・・・

そんなこんなで冬将軍の刀を避けながら爆破を続ける。

「ぐはつ」

しかし、その攻撃もいつまでも続く事は無く冬将軍の能力だとは思うが、横からつららが飛んできた。

回避しようにも回避できず直撃した俺は吹き飛ばされた。

「ま、だだ

溝内を強く打ち呼吸困難となつたが、なんとか声をだす。すぐに体制を整えて冬将軍へと攻撃を行う。

そしてどれくらい経つたか分からないが気が付くと冬将軍は消えており、一面雪だらけだった平原はまだ少し雪は残っているがほとんどなくなつていた。

『テュポーン』を解除したあと、すぐにカズマの元へと向かう。

「アクアツ、カズマは？」

「ええ、大丈夫よ。もうすぐ目を覚ますと思うわ」

「はあ、流石女神だな」

「ええ、というかバサラもボロボロじやない・・・ってあんたその怪

我

アクアが悲鳴を上げて指を指す方を見ると俺の太ももに大きな穴が空いていた。

「ああ、これも治療を頼む」

今はアドレナリンのおかげで少し痛むくらいだがもうそろそろ痛み出す頃だろう。いつ喰らったのかは覚えていないが冬将軍のつらが俺の太ももを貫通していたのだろう。

アクアがすぐに治療してくれたおかげで完治した。

そしてこのときめぐみんがカズマに何をやっているのかは気が付かなかつた。

「・・・う、うんう」

「カズマツ」

「・・・チエンジで」

「上等よクソニートツ」

カズマが目を覚ますとアクアの姿を見た瞬間「チエンジ」といった。一体何のことだろうか?と思いつつも、今は生き返ったカズマを見て「ほつ」と一安心した。

「バ、バサラ・・・・」

無事《アクセルの街》に戻つた俺達だが、色々あつて疲れたため報酬を貰わずに宿へ戻つたのだが・・・

何故か俺の部屋にダクネスが来ていた。

「なんでここにいるんだ?」

風呂から帰つてきた俺の借りていた部屋にいるもんだからびっくりしたことこの上ない。

「いや、さ、先ほどの約束・・・」

「約束つて・・・ま、まさか」

そこで俺は思い出す。

冬将軍へ攻撃していたダクネスに向かつて俺は「はあ、あとで覚えてろよ。そんなにお仕置きされたいなら俺がしてやる。だから今は逃げるぞ」といつてのを・・・

「そうだ。まさか忘れたとはいわきないぞ」

「あのなあ、カズマが死んだんだぞ。分かつてるとか？」

「わ、わかっている。そうだな、不謹慎だつた。すまない」

流石のダクネスも分かつてくれたみたいでしょんぼりとする。

「はあ、そんなしょんぼりするなよ。俺が悪者みたいだろ？」

「私が悪いのだ。変なプライドで叶わないと分かつていたのだが、気が付くと冬将軍へと向かつっていたのだ」

するとダクネスは自然に俺の部屋のベッドへ座り小声で自分の反省を口に出す。

「仲間を守ることはいいことだと思うぞ。だがな、お前の場合は、そ、その、ドMだからだろ？」

「ああ、全くその通りだ」

「こ、こいつなあ。先ほどまでしょんぼりしていたと思えば一転して今度はなんの悪びれもなく自信満々にそう言い放つダクネスを見て少し殴りたいと思つてしまつた。

「はあ、お前は自分がされたいからいいかもしないがな、目の前でパーティメンバーがモンスターとかに、その、や、やられてるところとか見せられてみろ。そいつをすぐに切り殺したくなるぞ」「へつ？」

「お前だつて俺の大切なパーティメンバーなんだ。そんな奴が自分の目の前でやられているところを見て何も思わないなんてことはないんだからな」

「そ、そつか」

なんか様子のおかしいダクネスを前に俺の口は止まらなかつた。  
「ベルディアにしろ、今回の件にしろ……」

永遠と口から洩れる言葉に俺自身もビックリする。  
「お、おい、バサラ」

「んだよ、まだまだいいたいことはあるんだぞ」「わ、私の求めるものとは方向性がだな違う」

「うるせつ！つたく、いくらアクアが死んでも蘇生できるからつて目の前でパーティメンバーが死ぬのなんて御免だ。お前ももつと自分の身を大切にしろ……あつ、そうだ。いつのことお前を縛れば……」

ブツブツ

「バ、バサラ？ わ、私が悪かつた。いや、しかし、縛られるのも魅力  
て・・・なんでもない」

そして何をトチ狂つたのか俺は『テューポーン』のワイヤーを使って  
ダクネスを縛つた後、ベッドに放置し、俺は固い床で寝ることにした。  
「はあ、はあ、はあ、バ、バサラの奴、こんな積極的だつたなんて…  
はあ、はあ」

縛られて放置されたダクネスはと・・・もちろん興奮してい  
た。ミノムシ状態でベッドの上でクネクネ動く。  
「なつ」

## ダクネス

「なツ」というダクネスの声が上がる。

それと同時に暗いバサラの泊っていた部屋のベッドからダクネスが落ちる。

ベッドから落ちたダクネスはバサラの上に覆いかぶさるということはならなかつたがバサラのほぼ真横に落ちた。顔と顔が近づき、その距離わずか数センチといつたところだ。

「…、この体勢は流石にまずいぞ」と小声でつぶやく。

そのときダクネスは、もしこのまま目が覚めたらバサラはいつたいどう思うだろうか？とこのまま朝まで目が覚めなければ一体どうなるのか？という二つの疑問が浮かんでいた。

前者ならばバサラはどのような反応を見せるのだろうか？もしかすると私を罵倒してくれるかもしないというドMであるダクネスの欲望がガンガン漏れ出した考えに至り。

後者の場合だと…きっと罵倒してくれるだろうという結論に至つた。

どちらにせよドMであるダクネスにとつては美味しい展開になるとダクネスは考えた。

その結果、彼女がとつた行動というのが…

「うむ、寝ようと思つてもなかなか寝付けないのだな」

そう、添い寝もとい、このまま朝まで寝るということになつた。

しかし、思いのほかバサラが隣にいることを変に意識したダクネスは寝付けずに一時間ほど過ごしていた。

ダクネスも雪精討伐のクエストで疲れているはずなのだが、寝付けないらしい。

寝ることをあきらめたダクネスは、そつとバサラの顔を覗き込むようになつた。

そこにはいつも見せるすやすやと心地よさそうに眠るバサラの顔があつた。

「全く、床で寝ているというのに気持ちよさそうに眠るな」

そう咳きふふつと笑う。

「うむ、こうして改めてみると整った顔立ちをしているな」

いつも見慣れているはずなのに今一度じっくりとバサラの顔を見たことでダクネスは改めてバサラの整った顔立ちに少し驚いていた。

「こいつももう少し鬼畜になつてくれればありがたいのだが」

ダクネスは自覚していないだろうが、相当ヤバい事をいつている。

「それにしても、初めてだ。私の性癖を聞いても引かなかつた奴は……」

そしてダクネスは思い出す。

「クルセイダーの癖になんで攻撃が当たらないんだよツ」「誰かこのド変態をどうにかしろツ」

「もうやだ、このドM」

「はッきりいうが、お前は邪魔だ」

カズマのパーティに入る前に所属していたパーティメンバーからいわれた言葉の数々を……

あのときは罵倒に興奮していたが改めて考えると少し落ち込むな。しかし、そこがいいツ

「だけど、バサラは違つたな。ふふつ、攻撃が当たらないなら俺が攻撃する。こいつ以上に攻撃を受け止めてくれると信頼できるクルセイダーはいない……か」

随分と臭い台詞を吐くんだなと思いつつも内心ではすぐ嬉しかつた。

罵倒されるのが好きはあるが、こうして信頼されることが嫌いというわけではない。むしろ、嬉しい。

だが、これまでバサラを守れたことはほとんどない。

初めて一緒にクエストを受けたときも、ベルディアのときも、その次のベルディアとアガレスのときも、そして今日の冬将軍のときだけ、私はクルセイダーとして役目を果たせていない。

「そう考えるとムカついてきた……」

本来なら私が攻撃を受け止めていたはずのことを思い出しムカつくダクネスだったが、それもすぐにおかしくなつて笑ってしまう。

「お前だけだよ、私をお姫様扱いしてくれたのは」  
「まあ、モンスターに凌辱されるお姫様というのも捨てがたいがな」

## パーーティ交換？

あれから数日が経つた。

えつ、あのあとどうなったのかつて？

滅茶苦茶ビックリした。すぐ横にダクネスがいるんだぜ。朝起きたらド変態ではあるが超絶美人が隣に寝てるんだビックリするなどいう方が無理だ。

しかも、何をトチ狂つたのかアイツが喜びそうなワイヤーで縛るなんてこともしてるし。

「おい、もう一度いってみろ」

それで話は変わるのだが、現在冒険者ギルドの酒場にてカズマとダストが喧嘩を繰り広げていた。

「何度もだつていつてやるよ。荷物持ちの仕事だと？ 上級者ばつかのパーティにも関わらずよお、パンツばつか脱がせてないでもつとマシンことはできないのか？ アアンツ」

完全にチンピラ同士の争いだ。

「なあ、なあ、なんか言い返せよ最弱職さんよお。つたく、あんな綺麗どころをそろえてしかも、全員最上級職と来た。さぞいい思いをしてるんだろうなあ」

ああ、アレだ。完全なる男の嫉妬という奴だ。確かにうちのパーティメンバーの女性陣は美人と美少女しかいない。見てくれはな…：中身はどうもいえないが。

ダストの言葉が止まると同時に酒場全体が大爆笑する冒険者たちで溢れかえる。

「カズマ、相手にしてはいけません」

「そうだぞカズマ。酔っぱらいのいうことなんて聞き捨てればいい」

「ふふふ、まあ、仕方ないわよね。私みたいな美しい女神がいるんだから、男だつたら嫉妬の一つや二つ当たり前だもの。にしても男の嫉妬つて見苦しいわね」

めぐみんたちからダストのことは気にするなという声がかかる。  
まあ、当人であるカズマもダストのことを相手にしていないようだ  
が。

次のダストが放った言葉でカズマの我慢も限界が訪れたようだ。  
「ああ～あ、羨ましいぜ。いい女ぞろいに、バサラとかいう英雄もい  
る。一体どんな手を使つて引き込んだんだ？他の上級職におんぶ  
抱っこで樂しやがつてよ。苦勞知らずで羨ましいことこの上ないぜ。  
一度でいいから変わつて欲しいなあ！」

「・・・・・つてやるよ」

ダストの挑発にカズマはかすかに何かをいった。よく聞こえない。  
「は？」

「そんなに代わつて欲しいなら代わつてやるつていつてるんだよお  
おおおおおおおおおおおお。ああッ！、大喜びで代わつてやるよッ！」  
俺も含めた全員が「へつ？」という反応をする。

流石の俺もここまでつつきりいうとは予想外だつた。

「だから何度もいわせんな。代わつてやるつていつたんだよ。さつ  
きから黙つて聞いてりややれペラペらと良く回る口だこと。確かに  
俺は最弱職だ。だけどお前そのあとなんつった？」

「いい女ぞろいに、バサラとかいう英雄がいる」

「バサラの方はまあ、多少卑怯な手を使つて引き込んだかもしけな  
いからそこはいい。だがなッ！そのあとなんつった？いい女ぞろい  
？どこにいるんだよ？どこにいい女なんているんだよッ。俺の濁つ  
た目ん玉じや見当たんねえんだよ。お前いいビー玉持つてんのな、俺  
のと交換してくれよッ!! なあああああ

まるでストレスの限界でぶち切れて同僚に愚痴をこぼす〇Ｌのよ  
うだ。

「「「あ、あれえ？」」

三人に至つては頭の上に？マークが数えられないくらい浮かんで  
る。

「てめえ、この俺が羨ましいつつたな。しかも、俺が羨ましいだと  
？そんなに羨ましいなら代わつてやるつつてんだよ」

「・・・そ、そのすまん。酔つた勢いで言い過ぎた。だ、だけどな、お前は恵まれてんだよ。か、代わってくれるんだよな。一日！一日パーティーを交換するつてどうだ？」

とまあ、こんな経緯がありまして、俺とカズマはダストがいたパーティで一日過ごし、ダストはアクア、めぐみん、ダクネスの三人とパーティを組むらしい。

俺とカズマはまあ一日くらいならいいかという反応だったが、ダストのパーティが許可するかわからないので許可を取りに行つたのだが・・・

「「「いいよ」」「と一つ返事だつた。

そして、交換日当日。

「俺はカズマ。よろしく！」

「俺はバサラ。まあ、一日だけどよろしく」

お世話になるパーティのメンバーに挨拶をしていた。

「俺がこのパーティのリーダーのティラードだ」

「私はリーン。見ての通り魔法使いよ」

「俺はアーチャーのキースだ」

三人も俺達のことを快く歓迎してくれた。

「なんか、誰かに指示されるつて新鮮だな」

「お前があのパーティのリーダーだつたのか？」

「まあな、最弱職だが、頭は切れるぜ」

「ほう、それは楽しみだ。といいたいところだが、今回のクエストでは荷物持ちでも頼むか」

カズマは荷物持ちにされてしまった。

「申し訳ないから俺も手伝う」

「いや、気にするな。よく考えてみろ。荷物持ちだけが仕事なんてサイコージャねえか」

一気に申し訳ない気持ちが失せる。

「それで、クエストの内容は？」

「ゴブリンの討伐だ。まあ、ゴブリン程度なら大丈夫だと思うが、気を付けろよ」

そして、俺達を含めたティラーのパーティはゴブリンのいる。山道を歩いていた。

「敵感知に何か引っかかった」と荷物持ちをしていたカズマがいう。俺もなんとなく勘で何か来るとは分かつたが、それがゴブリンではないということを理解した。

「敵感知なんて持つてるのかッ。数は？」

「一体」

「おかしいな。ゴブリンは群れで行動するモノだ」  
そこで俺はとあるモンスターの名称をいう。

「初心者殺しだなコレ」

「しょ、初心者殺しつ」

姿を確認するより先に俺達は茂みに隠れてカズマの潜伏スキルを発動する。

少しして現れたのは猫のようなモンスター。しかし、猫のように可愛くはなく、完全に化け物である。

やはり初心者殺しだった。

初心者殺しはゴブリンなどの初心者の冒険者が受けるクエストのモンスターたちの近くを徘徊し、冒険者を襲う。迷惑極まりない最悪のモンスターだ。俺は余裕だが、ティラーたちは厳しいようだ。

「ふはあ～、こ、怖かつたあ～」

完全に初心者殺しの気配が消えたと思つたらリーンが涙目でそういった。

「ゴブリンの奴ら、アイツに追われてここまで逃げて来たんじゃねえのか？」

「これはギルドへ報告することも忘れないようにしないと」

そして、初心者殺しを知らないカズマにティライラーたちが説明する。

「ナニソレ怖い」と片言の反応が返ってきた。

「おいカズマの荷物を持つぞ。今回みたいに何かあつたら逃げるの

大変だろ」

「ベ、ベ、別に俺達がカズマに頼ってるわけじやないんだからなツ」

というティライラーとキースのツンデレが見られた。

リーンのツンデレはメッチャ可愛いと思うがティライラーとキースのツンデレとか誰得だよ。

## パーティ交換？2

あれから、初心者殺しが帰つてくる気配はなく、俺達は順調に山道を上つていた。

ティラーがいうにはそろそろゴブリンが発見された地点に着くらしい。

「カズマどうだ敵感知に何か反応はあるか？」

「この山道をおりたあたりに反応があるぞ。それもかなりの数だ」「いっぱいいるつていうならゴブリンだな。よし、いくぞ」

「ちなみにゴブリンつて基本はどんだけいるんだ？」

そんなカズマの様子にリーンも少し不安になる。

「ね、ねえそんなにいるの？ 様子見をしてからいこうよ」

「大丈夫だつて、ゴブリンなんて所詮雑魚だ」

「最悪、俺が遠くから狙撃してやるよ」

しかし、ティラーとキースはそんなリーンを知らんぷりだ。

「ま、まあバサラもいるしな。大丈夫だろ」

カズマもティラーとキースの言葉を聞いて不安が消える。

「そうだな。最悪機竜を出せばいいからな離脱だつてできる」ということでゴブリン達のもとへと着いたのだが・・・

「ちよつ、多ツ」

なんとゴブリンは三十以上いたのだ。

ティラーとキースはその多さに思わず叫んでしまう。

「だから様子見しようつていつたじやん」

「いや、多いつていつても十やそこらだろ。こんないるなんて」

俺とカズマを除いた三人は悲壮な顔をしながら攻撃の準備を始める。

するとゴブリンの放つた矢がリーンに向かつて飛んでくる。

「きゃあっ」

誰もが矢が刺さると思った・・・しかし、その矢はリーンに刺さることはなかつた。

「大丈夫か？」

俺はリーンに当たる直前で機攻殻剣を抜刀し飛んできた矢を切り落とした。

「あ、ありがとう」

「いえいえ、カズマあれやれ」

「アレって、あああ、あれか。オッケー『クリエイト・ウォーターハウス』が初級魔法を唱えると同時にカズマの掌から水が噴き出る。その水は坂をまんべんなく濡らす。

「からのおく『フリーズ』」

そして、びしょびしょになつた坂に向かつてカズマは氷の初級魔法を放つ。

案の定、坂は凍り坂を上つてきていたゴブリン達はつるつる滑つていた。

「ティラー、この足場でも上つてきた奴らは俺達でしばくぞ」

「お、おう」

「リーンは防御魔法で飛んでくる矢を防いでくれ」

「わかつたわ」

「キースはそのままゴブリン達を狙撃してくれ」

「おうよ」

カズマは持つていた剣を手に取り、素早くティラーたちに的確な指示を送る。

「バサラも俺達と一緒に登つてきた奴をしばいてくれ」

「はいよリーダー」

パーティメンバーは違うが、いつものように指示を出すカズマに返事をする。

「くつくつく、なんだよあの魔法。聞いたことねえよ！　つかんで初級魔法が一番活躍してんだよ」

「ほんとだよッ！ 私なんて魔法学校では初級魔法なんて習得するだけ無駄だつて言われたのに・・・なのに何よアレ」

「うひやつひやひやひやひや、こんな楽なゴブリン退治はじめてだぜ」

カズマの魔法のおかげで危なげなくゴブリンを討伐出来た俺達は先ほどの戦闘の話題を話していた。

「おい、戦闘終わつたんだから荷物よこせよ。最弱職の冒険者は荷物持ちが基本だろ」

俺の隣でいつも以上に意地の悪いながらも楽し気な笑みを浮かべるカズマを見て俺も少しツボる。

「わ、悪かった。いや、これからは最弱職だからつて馬鹿にしないから」

「ほんと、ごめんねカズマツ」

「おいカズマ。お前はMVPなんだから俺に荷物をよこせ」

そんなやりとりを見て俺はさらにツボる。

「あれれ、バサラ君はカズマと違つて活躍してないよねえ～」

すると、カズマの荷物を受け取つたキースは俺に話しかけてくる。

「そうだな、いやあ～カズマの魔法のおかげで楽だつた」

「それにゴブリンの討伐数つて一番少ないよね？」

ニヤニヤしながらキースは追い打ちをかける。

「ぐはっ」

先ほどまでツボつていたのが嘘かの様に俺は精神的ダメージを負う。

「お、おいキース」

「アハハ、悪い悪い。少しからかいたくなつただけなんだ。そうだ、カズマ。俺達のパーティにこないか？」

キースは俺をからかうのをやめたかと思いきや今度はカズマを勧誘する。

「おいやめとけ。カズマには帰る場所があるんだ・・・たく、なんでカズマが上級職ばつかりのパーティでリーダーやってるのかが分かつたぜ」

こんな感じで和氣あいあいとしながら草原まで戻ってきたところで俺達は思い出した。

「ゴブリンなんかよりも、もつと注意を払わないといけない存在を……

「しょ、初心者殺しだ」

ティラーラーが冷汗をかきながら声を漏らす。

「ちよ、カズマッ逃げないの」

三人はすぐさま逃げ出そうとするが、俺とカズマはその場に立ち止まる。

「なあバサラ。お前だつたら初心者殺しとか余裕か?」

「まあな」

「だつたら、令呪を持つて命じる初心者殺しを討伐しろ」  
さつきの戦闘で調子に乗っているのか、カズマは俺に令呪を使うようだ。あつ、ちなみに俺はライダーだぞ。

「はいよカズマ、じゃなくてマスター」

俺もそんなカズマに乗つてマスターとカズマのことを呼んでやる。

「じゃあな子猫ちゃん」

一閃。かの新選組沖田総司の『無明三段突き』の如く、俺は縮地で初心者殺しとの距離を詰めて機攻殻剣を抜き、すれ違うと同時に首を落とす。

一瞬で初心者殺しの首は飛び、そこから赤黒い血が噴水のごとく噴き出す。

「さて、これで今回のMVPは俺だな」

「よくやつたセイバー」

「ばつか、俺はセイバーじゃなくてライダーだ」

「「・・・・・」」

とまあ、楽しそうに会話する俺達を見て三人は言葉を失っているのだが、そんな三人を見てスッキリする。何がとはいわないが、強いて言うなら先ほど俺をからかつた罰だな。

「「いや、まじ調子乗つてすんませんした」」

三人も先ほどのことを謝つてくれている。

「なあ、バサラ。やつぱりパーティ移籍しね？」  
カズマが俺にそんなことをいつてくる。

普段のカズマの大変さをしつてている俺だからカズマの気持ちはよくわかる。

借錢駄女神、頭のおかしい爆裂娘、ドMクルセイダー  
「しねえよ」

「ええく」

「そんなこといつてもだあくめ」

「だ、だつてよお。このパーティ…俺が憧れた冒険者そのものなんだよお」

「はいはい、アホなこといつてねえで帰るぞ」

そして、冒険者ギルドについたんだが…

「かじゆましやんツ ばしやらあく」

歯形やら何かわからないぬめぬめした液体まみれのアクアにアクアに背負われた白目をむいて気絶しているダクネス。そして、ダストに背負われている（おそらく魔力切れの）めぐみんの姿を見てなにもいえなくなる。

「聞いてくれ、俺が悪かつた。なあ、カズマ、俺が悪かつたから」  
ダストの話を纏めると、めぐみんがダストに爆裂魔法が使えるといつて何もない草原に爆裂魔法を放ち、その音を聞きつけた初心者殺しが襲ってきて、ダクネスは鎧もつけずに突っ込みやられて、ダストとアクアもやられたらしい。

「よおくし、新しいパーティ結成にカンペーイ」

「「カンペーイ」」

そしてカズマを含めた三人は新しいパーティの結成を祝う。

今回の原因であるダストはというと…

「俺をもとのパーティに戻してくれええええええええ」という魂のの叫びがギルドに響きわたるだけだった。

流石に可哀想になり、心身ともにボロボロであろうダストからダクネスを引き受けたあと、俺はアクアと一緒にめぐみんとダクネスの介抱をする。

「つたく、大丈夫か？」

「いたがつたよお」と涙を浮かべるアクアを見て撫でたくなる衝動に襲われるが、なんとかその衝動を抑え込んで二人が目覚めるまでジユースを飲んでいた。

## 機竜とは

パーティ交換事件から数日が経つたある日。

カズマが「明日はクエストに行く」なんて言い出した。

普段はそんなこといわないカズマが急にクエストを受けるなんて珍しい。

パーティ交換事件でティラーラーたちと組んだため、冒険に熱が入ったのだろうか？

まあ、なんにせよ、クエストを受けて金を稼ぐというのは大切なことだ。

といつても、今回、カズマが受けようとしているのはダンジョンの探索だ。

そのダンジョンの名前は『キールのダンジョン』といい、洞窟型のダンジョンらしい。

なので、爆裂魔法が放てないめぐみんは落ち込んでいた。

それに加え、冬将軍と戦った際に剣を折られてしまつたダクネスも今回は不参加ということらしい。

俺も探索に加わろうとしたが、カズマが「今回は俺とアクアでいく」といったので、俺も今回は不参加だ。

そんなこんなで、俺はめぐみんと一緒に外で待機している。

「ああ、暇です、爆裂魔法撃ちたいです」

「あのなあ、こんなところで爆裂魔法撃つてみろ、ダンジョンに入っているカズマやアクアが埋もれて死ぬぞ」

「分かつてますよ。ただいつただけじゃないですか」

「だがまあ、暇というのは俺も同意する」

「そうですよね！というわけで、機竜を見せてください！」

そういうて、めぐみんは俺が抱えていた機攻殻剣をキラキラした目で見つめる。

「駄目だ。こんなどこで召喚してみろ、厄介なモンスターが寄つてくるかもしれないだろ」

「むう～」

「はいはい」

俺が適当にあしらうと、めぐみんは頃垂れる。

「じゃあ何か面白い話をしてください！」

「面白い話？」

「そうです！バサラはカズマと出身地が同じと聞きました。どんなところだつたのか気になります」

「そうだなあ。まあ、ひとことでいえば、平和な国だつた」

「ほうほう」

「魔王たちも手を出せないほど遠い国だからな。モンスターも魔獸とかもいねえし」

「そんな国があるのですか！」

俺の話をめぐみんは信じられないといった様子の表情を浮かべる。

「だから魔法とかも使う奴はほとんどいなかつたな」

「そんな！爆裂魔法をしらないだなんて、人生の半分以上を損しています」

「そこまで損するか？」

「当たり前ですツ！でしたら、この私が直々に爆裂魔法を披露します」

「あほかツ」はうつ

ちょっとしたテロを起こそうとしている爆裂娘に俺は軽くチョップを喰らわせた。

「あんなもん見せられたら高齢者が一斉にショック死するわ」

「そんなんあ、で、ですが、そんな平和な国だつたら、なんでこんなところに来たんですか？」

めぐみんの質問はごもつともである。魔王という存在に脅かされている国とは違い、安全な国で生まれているのだ。そんな奴が何故、わざわざ、危険な国にやつてくるのだろうか？

「まあノリと勢い？ そしたら、この国にきていた」

「そうなんですか。バサラもカズマと同じで馬鹿なところがありますね」

「なんだと」

めぐみんの言葉に若干同意しつつも言い返す。

「だけどまあ、この国にきたことを後悔はしていないな」「・・・そうですか」

チラツとめぐみんの方を見るとニッコリと笑つている。

「さて、俺の話はここまでだ。あとはカズマにでも聞いたらしい」「で、では、機竜について話してください!!」

「まあ、話すだけならいいか」

装甲機竜とは本来、遺跡から発見された古代兵器であり、機竜本体と機攻殻剣の一対となっている兵器のことである。

機攻殻剣のグリップを握りながら<sup>バスコード</sup>詠唱符を唱えることで機竜を召喚することができる。

また、機竜の中には神装機竜と呼ばれるものがあるが、それらは全て一種類ずつしか存在しない。

汎用機竜と呼ばれる量産型の機竜とは違い、神装と呼ばれる特殊な能力が備わっている。

この機竜を扱うには高い身体能力と高度な操作技術を必要としており、男性の方が操作する適正は高いとされている。

しかし、それは神装機竜の世界においてだ。

アクアによつて特典でこの世界に持つてくることのできた機竜の特徴は、まず、俺にしか扱えないということ。

次に、機竜は世界各地に存在する竜と契約することで入手することができること。

それ以外は、神装機竜の世界と一緒にだ。

転生特典ということもあつて、機攻殻剣の収納は特殊な空間になおすことができるので荷物はかさばらない。この点に関してはアクアに感謝しなければいけない。

「とまあ、こんな感じだ」

「ほうほう、私も機竜を使いたいと思いましたが、バサラにしか使え

ないのですか。残念です」

「湖のクエストをやつたときみたいに抱きかかえながら空を飛んだりすることはできるから、それで勘弁してくれ」

俺がそういうと、めぐみんは渋々頷く。

「だけどまあ、俺がまだまだ未熟なせいで、神装機竜を使うと意識がなくなるんだよなあ」

「やはり、バサラでも扱うのは難しいのですか？」

「《ワイバーン》とかは大丈夫なんだがな、ベルディアやアガレスと戦つた時に使つた《リンドヴルム》や《ティアマト》なんかは使つたあとは疲労がすごい。めぐみんの爆裂魔法と一緒にだ」

「そうですか。あつ、そういうえば機攻殻剣というのは機竜ごとによつて形が違うのですよね！」

「ああ、そうだが」

「見せてくれませんか？」

「それくらいならいいぜ。ほら」

そういって、俺は特殊空間から六本の機攻殻剣を取り出す。

「こ、これは!?」

「どうしたんだ？」

「滅茶苦茶かつこいいですうううううううううううう」

そういってめぐみんは機攻殻剣を持ち上げて頬ずりする。

「特にこの黒い機攻殻剣の色ツ、艶ツ・・・そして、私達ツ紅魔族の血を騒がせる赤い水晶。百点満点です!!バサラツ、私にこの機攻殻剣をくれませんか?」

「あほかツ!」

めぐみんがあまりにもしつこいので俺は機攻殻剣を特殊空間にしまつた。

「ああ~」

めぐみんは残念そうな表情を浮かべながら俺の方へ手を伸ばしてきた。

それから、しばらくすると、どこか満足げなアクアと心身ともに披露しているカズマが帰ってきた。  
これでクエストは達成だ。

## ぼつち少女と王都で買い物

キールのダンジョンのクエストを終えてから一週間ほど経つた。

その間に俺達は幽霊屋敷と呼ばれる場所のクエストを無事完了し、大きな屋敷を手に入れた。

まあ、簡潔に屋敷を手に入れた経緯を説明すると、最近アクセルの郊外にある屋敷で幽霊が頻繁に現れるようだ。いくら退治してもでてくるため、屋敷の管理人は困つており、そこでクエストを受けたもののが成功報酬に屋敷を提供するとの子だつた。

俺達のパーティにはアクアがいるので、そのクエストを受け、無事にクリアしたのだが、その屋敷に幽霊が集まるのはアクアのせいだつたりした。

とまあ、なんやかんやあつたにも関わらず、俺達は屋敷をゲットしたわけだ。

そして、現在、俺はパーティから離れて一人で行動していた。  
王都へ買い物に行くからだ。

パーティ全体での借金はあるものの、俺自身の貯金はだいぶあるので、ストレス発散も兼ねて王都で買い物をしようと思つたわけだ。  
機竜もあるので装備品などの買い物は必要ないかと思つていて、  
服が欲しいと思っている。

この世界に来てから衣類は必要最低限なものしか買つていなかつた。

俺だつて服好きな女子ほどではないが、日本では、まあ、ちよくちよく服や靴などを買つていた。

ということで、王都に来たのはいいのだが!!

「素晴らしいッ!!」

俺は歓喜していた。

何故かつて？その理由は靴屋に並んでいる革靴にある。

この世界は中世のヨーロッパに似ているということもあり、王族や貴族なども存在している。

そんな彼らが履いているのが革靴。

つまり!! 王都にある靴屋の革靴は素晴らしいものが揃っている。

しかもだ!! 冒険者の多くは足を守るために頑丈なブーツを履いている。

革靴だけではなく、ブーツの種類まで豊富なのだ!!

「くうく日本だとお小遣いを溜めて買っていたが、ここは異世界ッ!! しかも、貯金はかなり余裕がある。ふへへ、今日はめちゃくちゃ買うぜツ」

そう意気込んだ俺は、何かのときに使えるドレスシューズ一足と普段履くようのブーツを二足買った。

いい買い物をしたとホクホク顔で歩いていると、ひとりの少女を見つけた。

その少女はキヨロキヨロ辺りを見回しており、あきらかに困つてそうだった。

しかし、誰一人、その少女に声を掛けない。

おそらくだが、彼女が紅魔族だからだろうか? どこかでチラツと聞いたことがあるが、紅魔族は変なやつが多いため、クエスト以外ではあまり関わらないようにされているらしい。

まあ、めぐみんを普段から見ている俺からしてみれば、確かに変に絡んで怒らせてしまったら上級魔法でやられてしまうと思われているのだろう。

そういうつた理由から誰も彼女に声を掛けないのだろう。

見ていられなくなつた俺は、彼女に声を掛けた。

「さつきからキヨロキヨロしてるけど、何か困つたことでもあるのか?」

そう、少女に声を掛けた。

これが、俺とゆんゆんの初邂逅だつた。

「へえ～王都にきたのはいいけど、誰もパーティを組んでくれないと」

「はい、そうなんです」

「見たところ、紅魔族っぽいけど、普通は引く手多数なんじゃないのか？」

そういうと少女ゆんゆんは顔を俯かせる。

「そ、そのお、わ、私、人と話すのが苦手で」

「ああ～なるほど」

「それで、なかなかパーティにいれてもらえず」

そういつてゆんゆんは瞳に涙を浮かべる。

「ちよ、な、泣くなつて」

俺はあわててゆんゆんにハンカチを差し出す。

「あ、ありがとうございます」

「でも、ゆんゆんは上級魔法を使えるんだろう？どつかの一発屋と違つて」

「も、もしかしてめぐみんを知つてるんですか？」

「知つてるも何も、同じパーティの仲間だからな！よかつたら、ゆんゆんも一緒に来るか。うちのリーダーなら、多分喜んで入れてくれると思うぞ。まあ、拠点はアクセルにあるから王都から離れないといけないけど」

「ほんとですか!!」

先ほどとはうつて変わつて笑顔になつたゆんゆんは俺の両手を握り、顔を近づかせる。

ゆんゆんという少女はめぐみんと同じでかなりの美少女である、そんな美少女に一気に近づかれると俺も恥ずかしい。

「あつ、ごめんなさい」

「い、いや、大丈夫だ」

「えっと、バサラさんは何故王都に？」

「おう、今日はな買い物に来てたんだ。よかつたらゆんゆんも一緒に回ろうぜ。服が欲しいんだけど、女の子の意見も聞きたいんだ」

「は、はいッ！」

ゆんゆんは二つ返事で了承してくれた。

「へえ～ゆんゆんは族長の娘なのか」

「そうなんです。でも、友達がいなくて」

「めぐみんとは同級生なんだろう？」

「は、はい、でも、めぐみんとは友達というか、ライバルのような関係でして」

「へえ～あいつ、いつも「我が名はめぐみん！紅魔族随一の魔法の使い手にして爆裂魔法を操る者」つていつてるけど」

「一応、学園での成績はめぐみんが一番で、その次が私でした。それなのに、めぐみんつたら爆裂魔法なんか覚えちゃって、あんな魔法使つたらそのあと魔力切れで動けなくなっちゃうのに・・・」

ゆんゆんは大分打ち解けてくれたのか、楽しそうだけど、どこか困ったように紅魔族の里での話をしてくれる。

「あっ、すみません。私ばかり話してしまって」

「気にすんな。面白い話をたくさん聞けたしな」

「そういつてもらえると、わ、私も嬉しいです」

楽しそうにしている彼女を見ていると俺まで楽しくなる。

「おっ、こここの服屋見てもいいか？」

「は、はい」

「こ、これはツ」

「ど、どうしたんですかバサラさん？」

俺はまたしても歓喜していた。理由はなんとこの世界にライダー  
スがあつたからだ。

この世界では革の服はたくさん売られているが、ライダースの形を  
したアウターはなかなか見かけない。

「お客様、こちらの商品に目を付けるとは」  
すると店の奥から店主らしき女性が現れる。  
ゆんゆんは、店主さんにビックリしたのか俺の背後に隠れてしま  
う。

「えっと、店主さんでいいのか？」

「はい、私がこの店の店主です」

「じゃあ、この店にあるライダースを全部見せてくれないか？」

「少々お待ちください」

そういつて、店主さんは再び店の奥に入ると、何着かのライダース  
を持つて出てきた。

「こちらの商品はとある勇者さまが広めて下さったジャケットでし  
て、このファスナーというものがボタンの代わりをしてくれているの  
です」

「ああ、知ってる。これ一着でいくらする？」

「こちらは五万エリスでして、こちらの方は五十万エリスとなつて  
おります」

「ほうほう、やつぱり素材の違いか」

「そうですございます。こちらの素材は防具などに使われる素材をし  
ようしておりまして、比較的頑丈な造りとなつておりますが、こちら  
の素材は凶暴なモンスターからとれる素材でして、魔法耐性を備えて  
おります」

そういうつて、店主は説明をしてくれる。

五万エリスの方は牛の革でできているらしい。うん、牛革のライ  
ダース、カッコいい。

それに対して、五十万エリスのライダースは若干馬革を使ったライ  
ダースに似ているが、かなりしつとりしているため、触つていると革

が手に吸い付くようだ。

「ゆんゆん、どつちがいいと思う？」

「わ、私は高くて魔法耐性が付いている方がいいかなあと」

「それもそうだな。よし、両方買う」

「かしこまりました。色はどちらを？」

「両方とも黒を一着ずつと、五十万エリスのほうでワインレッドを一着」

「そ、そんなに買うんですかッ!?」

「まあな、ゆんゆんもいるか?」

「い、いえ、私は大丈夫です」

そういうて、ゆんゆんは引き下がる。

「今日はサービスで三着合わせて百万エリスでどうぞ」

「おつ、ラツキー」

「いえ、試着しますか?」

「そうだな、どうせなら着て帰るか」

ということで、俺は荷物を減らすという意味も含めてワインレッドのライダースを羽織った。

「おお、とてもよくお似合いですよ」

「これすごいな、着心地抜群だぞ」

「わあくバサラさんツすごく似合ってます」

「ありがとな。じゃあ、店主さん、これお金」

「はい、ピッタリ百万エリスですね。今後ともご頼願に」

「いやあ、ごめんな、時間かけちゃつて」

「い、いえ、私もこうして誰かとお買い物するのは初めてで、とても楽しいです」

そういつてくれるゆんゆんに、俺は思わずホッコリする。

「そつか、買い物に付き合つてくれたお礼になんか奢るよ。あつ、甘

いモノとか好きか?」

「えつ、そ、そんな悪いですよ」

ブンブンと両手を振つて断るゆんゆん。

「気にすんなつて

「そうですか?」

「ああ、おつ、こここの屋台のやつ旨そうだな。ここでいいか?」

「は、はい!」

「おつちゃん、これ二つ」

「はいよー一つ合わせて六エリスだよ」

おつちゃんから、クレープに似たお菓子を受け取つたあと、ゆんゆんに渡す。

「ありがとうございます」

「ゆんゆんは他に見たいものとかあるか?」

「いえ、私は大丈夫です」

「そつか、じやあ、アクセルに戻るか」

「はい」

こうして、俺とゆんゆんは王都の転送屋からアクセルへと帰つたのだつた。

## ぼつち少女のパーティ入り

紅魔族のボツチ少女ゆんゆんと出会った俺は、彼女と王都で買い物をし、アクセルに戻ってきた。

屋敷に戻つてゆんゆんの話をしようと思つていたのだが、どうやらみんなはクエストを受けているらしい。

俺もどうせなら、ゆんゆんを連れてクエストの手助けをすること

で、ゆんゆんをパーティに入れてもらおうという算段だ。

ということで、王都で買ったものを自室に置いてゆんゆんと共に草原に向かつたわけなのだが、

「ぎやああああああ助けてかじゅましやあああああん」

「アクアああああああそのまま引き付けておいてくれええええ」

「こいつ、ジャイアントトードよッ。クルセイダーである私が受け止めてやる」

「・・・・・」

アクアは迫りくるジャイアントトードから逃げており、カズマは剣を持つてアクアを追いかけているジャイアントトードを倒そうとしている。

ダクネスは・・・いつも通りで、めぐみんに至つては顔から食べられており、ジャイアントトードの口から下半身だけ見えている。  
「くっそ、バサラがいればこんな奴らッ」

カズマがそう叫ぶ。

「ゆんゆん、助けてやつてくれないか？」

「ま、任せてください！『ライトオブセイバー』」

俺がゆんゆんに頼むとゆんゆんは即座に上級魔法である『ライトオブセイバー』を放つてくれた。

一刀の光はアクアを襲つていたジャイアントトードを切り裂くと、軌道を変えてめぐみんを呑み込んでいたジャイアントトードを切り裂く。

「バ、バサラッ、」

突然の魔法に驚き、カズマがこちらに気付く。

「ようカズマ。心強い仲間を連れてきたんだが」

「わ、我が名はゆんゆん！紅魔族の族長の娘にして上級魔法を操る者！」

少し恥ずかしがりながら紅魔族特有の名乗りを上げる。

「さて、ここからは俺も手伝うから詳しい話はクエストを終えてからなッ」

そういうて、俺は腰に携えていたワイバーンの機攻殻剣を抜く。それと同時にあとからやつてきた十五匹ほどのジャイアントトードの群れに突っ込む。

「ゆんゆん、サポート頼むッ」

「はいっ《ライトオブセイバー》」

俺が目の前のジャイアントトードを切り裂くと横から襲い掛かってきたジャイアントトードにゆんゆんの魔法が炸裂する。

さらに、倒したジャイアントトードを踏み台にし、上に飛んだあと、他のジャイアントトードの頭に着地しながら、頭に剣を突き刺す。

その後、無事、残りのジャイアントトードを殲滅することの出来た俺達は冒険者ギルドにてゆんゆんの話をしていた。

「め、めぐみんツなんでジャイアントトードなんかにやられてるの？それでも本当に私のライバルなの？」

「はてさて、あなたは一体どちらさまでしよう？」

「ええッ？ わ、私よ私。紅魔の里の学園ではいつもあなたと勝負をしていたゆんゆんよ！」

「とまあ、そういうことです」

ゆんゆんに対してのめぐみんの対応が辛辣なのはライバル故なのだろうか？

「そういえば王都に行つたんじゃなかつたか？」

カズマが俺にそういう。

「ああ、王都で買い物をしていたんだが、この通り、ゆんゆんと出

会つてな。パーティを組めずに一人でいるつていうから、それだつたら一緒にパーティ組まないか？つて俺が誘つたんだが駄目だつたか？」

「い、いや、駄目じやない。先ほどの魔法を見た感じでは大歓迎したいんだが」

「ほ、本当ですか？」

「バンッ！」

「ちよつと待つてください二人共！このパーティには既に優秀な魔法使いがいますよね？」

机を叩いためぐみんは大声でそういった。

「優秀な魔法使いは何人いても困らないと思うんだが？」

「そうだぞ、それにお前の爆裂魔法と違つて小回りが利きそうな魔法が使えると来た」

「う、うう、し、しかし」

「私も歓迎するぞ、前衛をしている私からすれば背後からのフレンドリーファイアツ！　はあ！　はあ！」

めぐみんはゆんゆんのパーティ入りに反対のようだが、ダクネスは歓迎？している。

「ア、アクアは？」

「うーん、いいんじゃない？私を助けてくれたんでしょ。良い子に決まってるじゃない!!」

「ぐつ」

満場一致の意見にめぐみんも反論できなくなつていてる。

「・・・ああくわかりましたツ分かりました。分かりましたよ！」

「ということで、これからよろしくな。ゆんゆん」

「は、はい！精一杯頑張ります！」

こうして、ゆんゆんはパーティに加わった。

ゆんゆんがパーティに加わった翌日、俺達はクエストを受けに来ていた。

「それで、どんなクエストを受けるんだ？」

「そうだなあ、ゆんゆんも加わったことだし、少し難易度の高いクエストを受けてもいいと思うが」

「そういいながら、カズマは何個かのクエストを見る。

「ゴブリン討伐とかあればいいんだが、そう簡単にはないよなあ」「これなんかどうだ？」

俺がカズマに渡したクエストは『白狼討伐』報酬は百万エリス。

「前は難しそうだったが、今ならいけるんじゃないかな？」

「ううくん、少し不安だが」

「安心しろ、ヤバそうなときには機竜を使う。『ティアマト』の神装なら白狼たちも抵抗できないだろうし」

「よし、ならそれを受けるかッ」

ということで、白狼の被害にあつてている牧場に来た。

「カズマさあくん、見てみてえ～」

「モーモー」

そういつて牛の背中を撫でてているのはアクア。

どうやら、牛たちに懐かれたらしく、三頭の牛に囲まれている。

「おおお～宴会芸だけではなく動物芸まで覚えるのかあ～」

「う、牛、や、やめろおお、わ、私の身は決して牛のような」

「それにしてゆんゆん、一体どのような口説かれ方をしたのですか？チヨロいあなたのことですから簡単に引っ掛けたんでしようけど」

「し、失礼ねツ」

上から、カズマ、ダクネス、めぐみん、ゆんゆんなのだが・・・

カズマとダクネスは平常運転だな。しかし、めぐみんよ、俺は決し

てゆんゆんを口説いたりはしていない。

あと、やつぱりゆんゆんはチョロいのか。いや、なんとなく、わかっていたけど。

俺はめぐみんの言い草に少々ムカついたので背後からひつそり忍び、一気にめぐみんのこめかみをグリグリしてやつた。

「い、痛いですッ！痛いですッ。やめてください！」

「つたく、俺はダストと違うんだぞ」

「はあ～バサラもバサラですよ。この子は騙されやすいんですから、あんまり優しくしていると痛い目に合いますよ」

「お、おう」

その瞬間、俺は自分の死因を思い出す。

「・・・」

「バ、バサラさん!?顔色悪いんですけど大丈夫ですか？」

「あ、ああ」

それを見ていたカズマはアクアにひつそり耳打ちする。

「なあ、バサラの死因って？」

「ええ、なんとなく察していると思うけど、ヤンデレの女の子に撲殺されたの」

「ひえええ～」

「しかも、よく考えてみれば、その子はゆんゆんと同じでぼっちだつたわね」

「・・・あいつ、ぼっちに対してなんかあるのか?」

「さあね」

## ぼつち少女の初陣

カズマ side

さて、クエストを受けた俺達なのだが、依頼主によると白狼たちは夜にやつてくるらしい。

そこで、俺達は昼間のうちに白狼たちに対しての罠を作ることにした。

といつてもまあ、落とし穴を作るだけなのだが。

白狼たちが引っ掛けかって逃げ出せないようにするためには、そこそこ深い落とし穴を作る必要があったので、バサラに機竜を使って深さ五メートルほどの大きな穴を十個ほど作つてもらつた。

他には、アクアが牧場全体に結界を張つたり、牛たちを牛舎に避難させる。

全てが終わるころには日もすっかり暮れて、夜になつていた。

バサラ side

「バ、バサラさん」

「どうしたんだ？」

「その、私つて役に立つていますか？」

「ああ、もち「いいえ、全然、役に立つていませんッ」お、おい、めぐみん」

初のパーティで挑むクエストのためなのか、ゆんゆんはいつも以上に不安になつているようだ。

俺は「勿論だ」といおうとしたが、横からめぐみんが割り込んできた。

「第一、上級魔法なんて私の爆裂魔法の足元にも及びません！」  
仲がいいんだが、悪いんだが良く分からぬが、二人のやり取りを

見ていると、とても微笑ましくなつてくる。

「め、めぐみんには聞いてないわよッ。それよりも、爆裂魔法なんて一発使つたら終わりじゃないツ」

「ふん、わかつていませんね。確かに爆裂魔法は一発しか放つことは出来ません。しかし、その一発で、全てが終わるのです」

それから二人の喧嘩はどどまることをしらず、更に激しくなる。

「お、おい、二人共そこまでにしておけ」

見かねたダクネスが二人を仲裁する。

ほんと、こういうところは頼りになるよな。性癖をどうこういうつもりはないが、もう少し、ういつたところを普段から見させてくれれば……

ダクネスの仲裁のおかげで、なんとか喧嘩は收まり、静かになつた。「ああ～あ、こんなに暇なら酒でも持つてきたらよかつたわ」

そういつて、アクアは欠伸をする。

「そうだなあ～。もしかしたら、今日は来ないのかもな」

カズマも続く。

「なん、だとッ。そ、それではまるでッ、焦らしプレイではないかッ！」

「それならそれでいいんですけどね」

「ね、ねえ、めぐみん。そういう台詞つて学園で習つたフラグを立てるつて奴なんじや……」

「……来たな。よし、準備しろ」

四人の完璧なフラグを立てる台詞により、先ほどまで何も感じなかつた周囲から四十ほど反応を感じる。

「ダ、ダクネス『デコイ』で引き付けてくれ。ゆんゆんはダクネスに迫りくる白狼を魔法で倒してくれ。

アクアは支援魔法だ。めぐみんは待機、バサラはダクネスの『デコイ』に引っ掛けからなかつた白狼を倒してくれ。俺は、ゆんゆんと一緒にダクネスの援護に回る」

カズマの素早い指示により、俺達は一気に戦闘態勢となる。

「来るなら来いッ！血に飢えた野獸どもめ……うう、たまらん」

「見えたツ。ダクネス来るぞ」

千里眼スキルを使って白狼たちを捕らえたカズマが剣を引き抜き構える。

『《ライトオブセイバー》』

そして、ようやく表れた先頭を走る三匹の白狼をゆんゆんの上級魔法で倒す。

『《パワード》!!』

そこに、アクアの支援魔法が加わり、カズマ、ダクネス、俺の筋力を上昇させる。

「それじゃ、いつてくる」

カズマにそういうって、俺は『《デコイ》』に引き付けられなかつた白狼たちを機攻殻剣で切り裂いていく。

『《グルウウ》』

「ちつ、素早いな。でも、これくらいなら」

正面の白狼を斬るとその勢いで右側からやつてくる白狼を斬りつける。

その後、背後から襲つてきた白狼の口に剣を突き刺し、一度、剣を手放す。

すると、再び正面から白狼がやつて來たので蹴りつけると同時に『《リンドヴルム》』の機攻殻剣を取り出し、突き刺す。

ここまでで三匹、更に二匹が左右から襲つてきたので、先ほど突き刺した『《ワイベーン》』の機攻殻剣を回収し、二本の機攻殻剣を扱い、バックステップで白狼たちの攻撃を回避したのち、二匹の白狼の首を切り落とす。

それからさらに七匹ほど倒し、カズマたちのほうへ向かう。

『《ボトムレス・スワンプ》』

『《クリエイト・ウォーター》』からのツ『《フリーズツ》』

ゆんゆんの魔法により、固まつていた白狼たちは纏めて沼に沈む。なんとかゆんゆんの魔法から逃げることの出来た白狼たちはカズマの魔法により、つるつると足を滑らせた。

『《ライトオブセイバー》』

そして、ゆんゆんの魔法が決まる。

「・・・よし、敵感知に反応が無くなつた」

「これで終わりか。ふう、案外、余裕だつたな」

「そうですね、我が爆裂魔法を使うまでもなかつたです」

こうして、無事に襲い掛かってきた白狼たちを撃退することに成功した。

「はあ、はあ、白狼なかなかのモンスターだつた」

「ねえねえ、カズマさん。今回は私、活躍したわよね」

全員が安心した、そのときだつた。

「!?まだだ、とびつきり大きな反応が現れたツ」

しかし、まだ終わりではないらしい。

カズマのいう通り、俺もその反応を感じた。先ほどまでの白狼たちとは比べ物にもならない反応だ。

「グルウウウウツ!!」

そして、夜の闇に血走った瞳を輝かせて現れたのは先ほどまで相手をしてた白狼の四倍はありそうな巨大な白狼だつた。

「こいつが親玉かツ」

「くう、そんな血走った目で私を見つめるなんて、はあ、はあ」

「ね、ねえ、カズマさん。滅茶苦茶強そうなんんですけど」

「ふふふ、この程度の白狼なら我が裂魔法で消し飛ばして見せましょう」

「だ、駄目よめぐみん。ここで爆裂魔法を使つたら牛さんたちが起きちゃうわ」

慌てているかと思いきや、みんな案外大丈夫そうだ。

アクアは少し怯えているが、まあ、大丈夫だろう。

「まあ、めぐみん。爆裂魔法はやめておけ。爆発音に他のモンスターがやつてくるかもしれない」

「え、えつと、私が魔法で」

「ゆんゆんは《ライトオブセイバー》で頼む。カズマツ目つぶしを頼む」

「おうッ《クリエイト・アース》《ウインド・ブレス》」

「ギャンッ!! グルウウウアアツ」

「ちょ、ちよつと、更に怒っちゃんたんですけどツ」

カズマの目つぶしはそこそこ効いたらしく、白狼はたじろぐ姿を見せた。しかし、その後には怒り狂った方向をあげる。

「アクアツ支援魔法」

「え、ええ 『パワード』」

「ダクネス、攻撃を引き付けてくれ」

「ああ、任せろ」

再びアクアの支援魔法で筋力をあげてもらつた俺は、ダクネスの背後から飛び出して、白狼の右側から走り込む。

その間に

『ライトオブセイバーツ』

俺が走り込んでいる反対側から魔法で攻撃する。

「グルツ」

「ええツ効いてないツ!?」

『デコイツ』

ゆんゆんの魔法は白狼には効いてなかつたらしく、攻撃の矛先をゆんゆんに向けた。

それを見てダクネスが素早く『デコイ』を発動してゆんゆんをかばう。

「ゆんゆんは一度下がれ」

カズマがゆんゆんに態勢を立て直すように指示する。

「バサラツ」

「おうツ」

カズマの声を聞いて、すぐさま、『リンドヴルム』の機攻殻剣をなおして、代わりに『バハムート』の機攻殻剣に持ち帰る。

『ワイバーン』と『バハムート』の片手直剣型の機攻殻剣を構えて大きく跳ぶ。

白狼の背後に着地するときに二本同時に刺す。

「グルウウウウツ」

痛みに悶える白狼から離れないように剣をさらに深く突き刺す。

「お、おいつ、こらツ動くなつて」

闘牛のように暴れまわるせいで攻撃ができない。

「クソツ」

『バハムート』の機攻殻剣を抜き、『ワイバーン』の機攻殻剣を持ち手に白狼の背中に幾十もの切り傷を刻み込む。

「バサラ大丈夫かツ?」

「ああ、にしてもコイツつ」

『ボトムレス・スワンプ』

すると、そこにゆんゆんが魔法を放つ。

白狼の丁度足元に展開された沼地はみるみるうちに白狼の足を捕らえ、動きを鈍らせた。

「ナイスだゆんゆん!!」

訪れたチャンスをものにするために『ワイバーン』の機攻殻剣も引き抜き、二本の剣で一気に白狼を切り刻んだ。

その後、俺は背中から飛びカズマの目の前に着地する。

それと同時に、白狼の体中からおびただしい量の血が噴き出す。

「グ、グウウ」

うめき声をあげながら、白狼は倒れ込む。

「・・・ふうく、今度こそクエスト完了だな」

「ああ、そのようだな」

こうして、ゆんゆんの初陣は大活躍で終わりを迎えた。

## サキュバスのサービス

白狼クエストで大型のモンスターが出たと報告した俺達は臨時報酬として三十万、一人五万づつの計算で報酬をくれた。

よつて、百三十万エリスを六人で分け、一人当たりだいたい、二十一万ほど収入を得た。

そして、ゆんゆんも屋敷に住むことになった。

先日まではアクセルで宿屋を取っていたのだが、今日から俺達と一緒に屋敷に住むことになった。

アクアとカズマはどちらが暖炉の前で過ごすか喧嘩をしており、ダクネスとめぐみんはチエスのようなもので遊んでいる。

ゆんゆんは、二人の対戦を観戦しており、勝った方がゆんゆんと戦うらしい。

それで、俺はというと・・・

「ふへへ、ふへへ」

王都で買った革靴、ブーツ、ライダースの手入れをしていた。

アクセルの靴屋を見てみると靴磨きに必要な道具が揃っていたので、それを買った俺は革靴たちを磨こうと思い、大部屋の隅っこで作業をしていた。

王都で買ったドレスシューズの色はボルドーだ。

革靴のボルドーというのは光の加減により色の見え方が変わる。

例えば、室内などの場所で光に当たればブラウンのような色になつており、外などで太陽の光を浴びれば赤みの強い茶色に見える。

また、ボルドーは履き続けていると革によっては茶色になつたりする。

「ふへへえ～楽しみだなあ～」

そんなこんなで靴を磨く。

仕上げの鏡面磨きを施したあの革靴は鏡面の名に恥じぬ輝きを放っていた。

つま先を覗き込むと自分の顔が映っている。

「おつと、いけないいけない」

自分の顔が映るのはいいが、そこに映っていたのは完全にニヤケ  
きつた自分の顔だった。

するとカズマがやつて來た。

「何やつてるんだ？」

「靴磨き」

「……えつ？」

「いや、だから靴磨き」

「そ、そとか」

「カズマもやつてみると案外楽しいぞ  
が、やつてみると案外楽しいぞ」

「い、いや、いい」

「そんなこといわばになツ」

一時間後

「結構面白いな」

「だろお、靴は綺麗になるし、無心で作業できる」

「ちよつとした癒しになるな」

アクアたち side

「ね、ねえ、あの一人、靴見ながらニヤけてるわ」

「常識人だと思つていたバサラまでもが、変人でしたか」

「そうか？ ただ靴を磨いているようにしか見えないが」

「え、えつとお、楽しそうだからいいんじやないですか？」

アクアとめぐみんは可哀想なものを見る目で、ダクネスは普通の眼  
で、ゆんゆんは微笑ましそうな眼で彼らを見ていた。

バサラ side

「ふへへ、ふへへ」

翌日、俺とカズマは街に出かけていたのだが、不審な二人を見つけた。

ダストとキースだ。

二人は辺りをキヨロキヨロ見回しながら、人の少ない路地に入ろうとしている。

気になつたカズマは二人に声を掛けた。

すると、ダストとキースはカズマの耳元で小さな声で囁く。しばらく話を聞いたカズマは俺の方を見て手招きをした。

何事かと思いついて行くと、怪しげな店に連れ込まれた。その店はどうやら、サキュバスたちが経営する店らしく、冒険者たちに良い夢（ムフフな夢）を見せる代わりに精氣を提供してもらう店とのこと。

しかも、精氣は加減して吸つてくれるため、翌日の仕事にも影響しない素晴らしいサービスらしい。

まあ、確かに馬小屋などで生活している冒険者は色々と溜まるだろう。かといって、隣で寝ている女性冒険者を襲おうものなら、反撃をくらつてしまふかもしれない。

さらにだ、男性冒険者の色々と溜まつて物が発散されることで女性に対する暴行などが起こらないため、アクセルの治安を守るといった点においても、非常に役に立つているそうだ。

話を聞いているかぎりでは、確かに素晴らしい店だと思う。ということで、俺はカズマに手を引かれ店に連れ込まれたのだが・・・

「いらっしゃいませ、お客様」

そこにはかなり扇情的な衣装を纏つたサキュバスの女性が何人もおり、顔見知りの男性も数多く存在していた。

「この店のサービスはどう存知ですか？」

すると、俺を担当してくれるサキュバスのお姉さんが一枚のアンケート用紙を用意してくれた。

そこには名前、職業などの必要事項から夢の中での自分の状態や、性別や外見などの項目がある。

「ふふふ、夢の中とすることもあり、勇者や英雄、王様にもなれますし、女性にもなれますよ」

サキュバスのお姉さんは蠱惑的な笑みを浮かべて説明してくれる。「へえ～、面白そう。例えばどんなのがありますか？」

「そうですね、例えば、年端も行かない少年になつて強きな女性冒険者に押し倒されたいとか」

「は、はあ～」

「ちなみに、相手の設定はどんな設定でもできますよ。外見は勿論、正確や口癖、存在しない相手でもいけます」

「それはすごいな。でも、相手に申し訳ないような」

「安心してください!! 夢ですから」

「そうですね」

口ではそういうながらも、内心では『大丈夫じゃないだろおお』と叫んでいた。

「あつ、注意事項に酒を飲み過ぎないようにしてくださいね。熟睡しては夢が見れませんので」

「それは、大丈夫だ。酒は飲まないから」

「そうですか、では、お決まりになりましたらお呼びください」

とまあ、勢いで連れ込まれてしまつたため、別にサービスを受けるつもりはなかつたんだが、せつかく、説明してくれたんだし、これでサービスを受けなかつたら申し訳ないよな。

なので、一応記入した。

相手の外見	おまかせ	性格	おまかせ	口癖	特になし
自分の設定	このままで				

シユチエーション 癒しが欲しい

このようになつた。

サキュバスのお姉さんは「かしこまりました」と了承してくれた。

カズマと揃つて屋敷に帰つたのだが、どうやら今晚はごちそうらしい。

ダクネスの実家から霜降り赤鱈と呼ばれる高級食材が送られてきたらしく、蟹三昧らしい。

「あわわわわ

「す、すごい」

めぐみんとゆんゆんは涎を垂らしている。

アクアは蟹より酒のほうにしがみついている。

この蟹がいかにすごいか説明すると爆裂魔法大好きなめぐみんがこの蟹のために、一日爆裂魔法を我慢して、蟹を食べたあとに爆裂魔法を放つくらいらしい。

うん、よくわからんが、すごいのだろう。

ということで、ダクネスには感謝だ。

「いただきます」

そして、俺は蟹をタレに付けて口に運び込んだ。

「!!!」

『なんじやコレッ。うますぎるッ。ヤバい』

あまりの旨さに手が止まらず、一気に食べてしまう。

すると、アクアがカズマに火を頼む。

「この酒の美味しい飲み方を教えてあげるわッ」

そういつて、網の上に蠣味噌の入つていた甲羅を置いて、酒を注ぐ、更にそれを熱する。

ブクブクとイイ感じに暖まる、アクアはそれを少し口に含めて・・・

「ほう」

赤い顔をしながら、息を吐く。その顔はいわなくてもわかるだろう。滅茶苦茶満足げだ!!

続いてダクネスもアクアと同じように酒を飲む。

「これはいけるなッ！」

それを見ていためぐみんとゆんゆんも

「わ、私も飲みたいですッ。いいですよね今日くらい」

「私も飲みたいです」

「駄目だッ。子供のうちから飲むとパーになると聞くぞ」  
こういつたところでは厳しいダクネスが一人を止める。

「ジャンジャン飲むわよお～」

アクアはそう言つて、さらに酒を飲む。

そして、宴会芸を披露した。

「起動要塞デストロイヤアアアアツ」

「おおッ、この動きはまさに起動要塞デストロイヤーッ」

「指だけでの複雑な動きを表現するだなんて」

「ア、アクアさん、やっぱりすごいですッ」

デストロイヤーとは前世でいう災害のようなものだ。今回は置いておくとして・・・

ダクネスは先ほどから酒を飲もうとしないカズマを見て心配になつたのか、声を掛けっていた。

「どうしたんだ？ 口に合わなかつたか？」

「いや、ちよつとダストたちと飲んできてな」

「そうか」

そしてダクネスはいつものドMっぷりからは考えられないような優し気な笑みを浮かべる。

「悪い、今日はもう寝るわ」

すると、いたたまれなくなつたのか、カズマは席から立ちあがり、自室へと向かつた。

『そういうえば、サキュバスの店で酒は飲み過ぎないでつて注意されたな。そのせいか・・・にしても、サキュバスのサービス受けなくても良かつたな』

カズマと同じく、俺まで罪悪感にあふれてきた。

「バサラも酒は飲まないのか？」

「えつ？ あ、ああ、俺は酒を飲まないようにしているんだ」

「そういえば、前もそんなことをいつていたな。確か、カズマのよう  
にセクハラ魔になりたくない・・・も、もしや、酒を飲むとお前は  
ケダモノになるのかッ」

「・・・あ、あはは、そうかもなあ～」

別に女性を襲つたりはしない。ただたんに、酒が苦手なだけなのだが、誤魔化しておく。

「そうか、残念だ」

「お前は自分の体を大切にしろよな。美人でスタイルもいいのに」「なつ」

少しやり返してやろうと思つた俺はダクネスを褒める作戦にでた。「髪の毛だつてサラサラで綺麗な金髪、顔立ちも整つていて、スタイルも抜群ときた」

「いや、にやにをいつてるんだ」

「いや、本心で思つてることをいつてるだけだが?」

「う、うう、これは私の求める羞恥とは違う」

いつもとは違う反応をするダクネスを見て俺も少し興が乗つてしまい追い打ちをかける。

「俺がダクネスの旦那さんなら、ダクネスを誰にも見られたくないから家の地下に監禁するかもな」

耳元でドスの効かせた声で囁いた。

「はうう～」

するとダクネスは顔を真っ赤にさせて気絶した。

「あ、あれ、ダクネスッ? やべ、からかいすぎた」

「ああ～バサラがカズマのように鬼畜になつてているではありませんかッ!!」

「やだ、バサラさんつたらドSだつたのお～」

「ええ!! バサラさんつて、ド、ドSだつたんですか?」

「お、おい、ちょっと待つて。俺はカズマのような鬼畜じやないツ。ドSでもないからなツ」

## 食後の語らいと戦争

ダクネスの実家から送られてきた霜降り赤鱈を腹いっぱい食べたのだが、アクアが酔いつぶれてしまい部屋に運んでやつた。（ゆんゆんもアクアの飲んでいた酒を間違つてのんでしまい、酔いつぶれたため、部屋に運ばれている）

めぐみんは風呂に入るといい、部屋からでていき、この部屋にはダクネスと俺だけとなつた。

「（ダ）ちそうさま」

俺はそういった。

「ああ、気にするな。普段から世話になつておるお礼だ」

「そつか。俺も世話になつてお相子だな」

「そうだな」

それから会話は続かなくなり、無言のまま、ただひたすら時間だけが過ぎていく。

「さて、片付けも終わりだな」

「ああ、風呂に入りたいところだが、めぐみんが入つてからな」

「一緒に入ればいいんじゃないかな？」

「いや、もう少しあとになつてから入ることにする」

そういつて、ダクネスは暖炉の前にあるソファーアーに腰を下ろした。

「それじゃ、俺はライダースの手入れでもするかな」

自室で作業しようかと思つたが、寒さのあまり、俺も暖炉の近くで作業することにした。

この世界の冬は日本と同じでかなり乾燥している。

適度にこうやつて手入れをしてやらないと革が乾燥してパリパリとした感触になる。

「そういえば、バサラはカズマと同郷だつたな？」

作業を始めて十分ほどしたときにダクネスが突然そんなことをいつた。

「ああ、そうだな。といつても、向こうではあつたことないけど」

「この国にきてかなり経つと聞いたが、里帰りなどはしないのか？」

「・・・ そうだなあ、まあ、しないかな」

「両親の顔は見ないのか？」

「べつにー、あつ、でも婆ちゃんには会いに行きたいな」

「両親は大切にしておいた方がいいぞ」

「・・・ あ、ああ、そうだな」

「バサラはお婆ちゃんつこだつたのか」

ダクネスにそういうわれ少し恥ずかしくなる。

「婆ちゃんの作る手料理がなすんげーうまいんだ」

「それは私も食べてみたいな」

「今日の霜降り赤鰐は素材の旨さだとすれば、婆ちゃんの手料理はお袋の味だな」

「私もその言葉を聞いたことがあるぞ。 そうか、バサラにとつてお婆ちゃんの料理はお袋の味なのか」

「思い出したら腹減つてきたな」

「おいおい、さつき食べたばかりだろう」

優し気な表情で微笑みかけてくるダクネスにドキッとしてしまつたのは内緒だ。

「よし、一通り手入れは終わつたな」

「その服は王都で買つたのか？」

「ああ、そうだ。 ゆんゆんと一緒に回つたんだが、そのときに良い感じの店を見つけてな」

「なるほど、それが王都で有名になつてているファスナーというものが」

「へえ、そんなんに有名なのか」

「知らずに買つたのか!?」

「いや、見た瞬間にコレだッ！ て俺の直感がな」

「そういうものか、確かに、私もあの鎧を見た時に似たような思いを抱いたものだ」

確かダクネスの鎧はかなりいい鎧だったような・・・

「ダクネスつてさ、もしかしたら貴族だつたりするか？」

「な、なにツをいつて」

「いや、なんとなくなんだが、作法とか見てたら王都で会ったバリバリの戦姫を思い出して……」

「戦姫……まさか、アイリス様のことか？」

「知つて……いや、知つてて当然か。まあな、アイツと同じ金髪碧眼だし」

「なつ」

「いや、別に貴族だからどうこうとかいうわけじゃないけど」

「……バ、バサラは貴族に何か恨みでもあつたりするか？」

すると、ダクネスは少し声を抑えてそういった。

顔を見ると表情が暗い。

「いいや、全くないよ。強いて言うならあのお姫様がしつこいくらいだな」

「おいつ、アイリス様に向かつてしつこいとは、つてさつきから気になつてたんだがバサラはアイリス様と、どういう関係なんだ？」

「ううん、王国の騎士団に誘われてな、断つたら余計にしつこく追いかけてくる関係？」

「バ、バサラがつ!? だ、だつたらなんで断つたんだ？」

「以外でもないだろ。俺は騎士団とか向いてない」

「そんなことはないと思うが」

「それに、俺は結構このパーティのことが気に入ってるんだ。いつも面倒なことを起こしてくれると私も少し恥ずかしいのだが」

「そ、そういうことをいわれると私も少し恥ずかしいのだが」

「ハハハ、ということで、俺は寝る準備でもするかな」

「ああ、おやす 「ビイツー！ ビイツー！ ビイツー！」 なつ」

突然、屋敷全体に警報のような音が鳴り響く。

「こ、これは一体？」

ダクネスは突然の出来事により、戸惑っているようだ。俺もそうだ。一体どうしたんだ？

ドタドタドタバンツ！

今度は俺達がいた部屋の扉が強引に開かれる。

「みんなツ悪魔よツ」

扉から顔を覗かせたのはアクアだつた。隣にはゆんゆんも一緒だ。「私がこの屋敷に張つていた結界に反応したの。間違いないわ、こつちよ」

そういうて、アクアはダクネスと俺を連れて廊下を徘徊する。

『悪魔つて……まさかッ』

俺は心当たりとなる悪魔の存在があつた。

そう、あのお店のサキュバスだ。夢を見せに来てくれるといつていった。それが、アクアの結界に引っ掛けてしまったのだろう。

アクアは女神ということもあり、悪魔やアンデッドを非常に嫌正在。そんなアクアがサキュバスと対峙でもすれば……間違いなく消されるツ。

『ヤバいやばい』

俺は内心で焦りまくつていた。カズマに強引に連れられてしまつたわけではあるが、俺も賛同してサービスを受けてしまつた身である。これで、サキュバスの女性が消されたなんてことになると、店の方にも、サービスを届けに来てくれたサキュバスの女性にも申し訳ない。

そして、廊下の真ん中にサキュバスの少女がいた。その少女は銀髪の幼い顔立ちをした少女で、頭からサキュバスの象徴的な角が生えている。

「どうしたつ!!」

すると、そこへ騒ぎを聞きつけたカズマが合流する。何故か全裸で腰にタオルを巻いている。

風呂にでも入つていたのだろうか、いや、でも、風呂にはめぐみんも入つっていたような気が……

「ふふふ、さくつと、この私が悪魔祓いしてあげるわツ」

「ひいツ」

アクアの言葉を聞いた少女は小さく悲鳴を上げる。

そのときだつた、少女の前にカズマが立ちふさがる。

「二ゲ口」

若干片言ながら呟かれたそれで、サキュバスの少女は「ですが」と

言葉を漏らす。

「ちよ、ちよつとカズマッ！その子はカズマとバサラの精氣を狙つて襲いにきた悪魔なのよツ！」

「正気かカズマッ！」

「そんなツ、カズマさんしつかりしてください！」

アクアとダクネスがカズマに訴えかける。

「お客様、こんな状況になつたのは侵入できなかつた未熟な私の責任でもあります。お客様に恥をかかせるわけにもいけません。私は退治されますから、お客様は何もしらないふりを……」

「…………」

サキユバスの少女はカズマにしか聞こえない声でそういつたが、カズマは何もいわず、ただ立ち尽くす。

その姿は騎士のように見える……いや、騎士の方に失礼か。しかし、カズマの考えていることは分かる。自分たちが引き起こしてしまつたことだ。

にもかかわらず、ここでサキユバスの少女が退治されてしまうのは胸糞悪い。

なので、俺もカズマのようすにサキユバスの少女を守る形で立たせてもらつた。

「カズマ、バサラ、そこを退きなさい。袋叩きにはされたくないでしよう」

「…………」

俺とカズマは何もいえない。だから、無言で立つてのことしかできない。

「ちよ、ちよつと待つてくださいツ！カズマとバサラはそのサキユバスに操られているに違ひません！でないと、おかしいです。先ほどからヘタレなカズマが強引にあれやこれやと、その……

更にそこへパジャマ姿のめぐみんが現れる。

「うう、もうお嫁にいけないです」

『いやつ!?風呂場で一体なにがあつたんだ?』

めぐみんの口から語られた内容に驚きを隠せないが、カズマがサ

キュバスの少女に早く逃げるよう告げる。

「カズマ、バサラ、いくら可愛くても、それは悪魔。何をトチ狂つたんですか？」

「どうやら、二人とはここで決着をつける必要があるみたいね。バサラにはカズマさんと違つてすぐ、世話になつてゐるから心苦しいけど、二人纏めてケチヨンケチヨンにしたあと、そこのサキュバスを倒させてもらうことにするわ」

そういうながら、拳をパキパキと鳴らすアクア、その顔つきはどこぞのスタンド使いがでてくる漫画の如しだ。

「くつ、すまないカズマ、バサラ」

「怪我しても文句いわないでくださいね」

「バ、バサラさん、少し我慢してくださいね。私が正気に戻してあげます！」

そこへ、三人も参加した。

「イイゼ」

カズマが片言でそういった。

「イタイメヲ、ミルノハドツチダ」

俺もカズマと同じように片言でいつた。サキュバスに操られているかのように振る舞うためだ。

「カカツテコイヤアアアアアアアアアアアアアアアアア」

そして、アクセルきつての頭のおかしいパーティは男と女に分かれて小さな戦争が起きたそうだ。

翌日、俺とカズマはサキュバスに操られていたということになつている。

まあ、語らぬが吉などもあるだろう。めぐみんに至つてはカズマと混浴したそうだ。

ここで、変にカズマが別にサキュバスに操られておらず、夢と勘違

いした結果の行動だと悟られてしまつた方が、カズマにとつても、めぐみんにとつてもいいことだと思う。

「なあ、バサラ」

「どうしたんだ、ダクネス？」

「昨日、本当にサキュバスに操られていたのか？」

「だから途中から記憶がないつていつてるだろ」

「い、いや、しかしだな」

「なんで、そこまで疑うんだよ」

先ほどから、ダクネスにずっと同じ質問をされている。やはり、騙すのは無理があつたか？

俺としても、パーテイメンバーに嘘をつくのは心苦しいが、サキュバスの店のことを考えると、ここで無暗に話して閉店されてしまつたら、この町の男性冒険者の多くが敵になるだろう。

「それは、お前は私達の攻撃を受け流すだけで一度も攻撃をしてこなかつたからだ」

「なつ、そ、それはきつと、何かあつたんじやないか？操られるなんて体験、初めてだから何もいえないが」

「他にも、お前は魔王軍幹部のアガレスとかいつたか？そいつの魅了も受け付けなかつたみたいだが、そんなお前が下級サキュバスの魅了程度で魅了されるかと思つてな」

「・・・ちょっと、気を抜いてたんだよ。お前と話してて楽しかつたから」

「にや、にやにをいつてるんだッ」

とつさに出た言葉に俺自身もビックリした。確かに、ダクネスと話してたのは楽しかつたが、言い訳にするには少し苦しくないか？

「この話はもういいだろ、ほら、さつさと屋敷に入るぞ」

そして、屋敷に入ろうとしたときだつた。

「デストロイヤー警報！デストロイヤー警報！起動要塞デストロイヤーが現在この町に接近中です」  
という放送が流れた。



## 緊急クエスト発生

緊急のデストロイヤー警報を聞いた俺達は冒険者ギルドへと来ていた。

「ちよ、ちよつと待つてくれよ。一体何なんだデストロイヤーって」「カズマ、今この街には、それが通ったあとにはアクシズ教徒以外、草も残らないとまでいわれる、最悪の大物賞金首、起動要塞デストロイヤーが迫ってきてます。これと戦うとか、無謀にも良い所ですよ」

「紅魔族の里でも起動要塞デストロイヤーとアクシズ教には関わるなど教わりました」

「ね、ねえ、なんで私の可愛い信徒たちがそんな風に言われないといけないのかしら？」

とまあ、アクアはともかく、めぐみんとゆんゆんのいつたことから分かるように、アクセルにとんでもなくヤバい奴が迫つてきているということが分かる。

正直、話を聞いた俺は破壊できるのか？とすら思っている。

「めぐみんの爆裂魔法で破壊は出来ないのか？」

「無理そうらしい。なんでもデストロイヤーの周囲には強力な魔法結界が張られているらしい」

「そうです。その結界のせいで我が爆裂魔法も真価を發揮せずに防がれてしまうのです」

その結界をどうにかできればいいのだが・・・現在、冒険者ギルドに集まっているのは、俺達のパーティを含めてダストやティラード、キース、リーンのいるパーティに数々の男性冒険者、ミツルギまでいる。というか、お前、帰つてきていたのか。

「お集まりの皆さん！本日は、緊急の呼び出しに応えて頂き、大変ありがとうございます」

ざわつくギルドの中心で普段は受付嬢をしているルナさんがそういった。

「只今より、対起動要塞デストロイヤー討伐の、緊急クエストを行います。このクエストには、レベルも職業も関係なく、全員参加でお願いします。無理と判断した場合には、街を捨て、全員で逃げる事になります。皆さんのがこの街の最後の砦です。どうか、よろしくお願ひ致します!!」

その声に導かれ、ギルドに来ていた冒険者たちは全員が中央のテーブルに集められ座らされる。

ギルド内がとてもない緊張感で満たされる。

「それでは、お集まりの皆さん、只今より緊急の作戦会議を行います」

「さて、それでは。まずは、現在の状況を説明させていただきます」  
「そういって、何やら魔道具らしきものを使うとディスプレイのようなものが表示された。

「起動要塞デストロイヤーは、元々は対魔王軍の兵器として魔導技術大国ノイズで開発された、超大型ゴーレムのことです。しかし、その国はデストロイヤーの暴走で真っ先に滅びてしまっています」

『なんだよそれッ！やべー奴じやん。魔王より質悪いぞ』

外見は蜘蛛のような八本足で國家計画で作り出されたため、高価な魔法金属をふんだんに使用されているらしい。外見に似合わない軽めの重量で、八本の巨大な脚で、馬をも超える速度がでるらしい。

「特筆するのは、その巨体と進行速度です。凄まじい速度で動く、その八本脚で踏まれれば、大型のモンスターとて挽肉にされてしまます。また、常時、結界が張られているため魔法攻撃は無意味」

物理攻撃は効くらしいが、近づこうにも挽肉にされるわ、遠くから弓や石を投擲するも、もともとがゴーレムのためほとんど効かないそうだ。

様々な意見をだして、どう対処するかを話し合っているが、どれもいまいちだ。

「なあ、それって結界を破れればいいんだろ。アクアだつたら破れないのか？」

カズマが突然、そんなことをいった。

そうだ、アクアは女神だ。人間とは比べ物にならないほどの魔法が使える。

「そうね、やつてみないとわからないうけど

「結界を破れるんですかッ!!」

アクアの言葉にルナが飛びつく。

「ええ、多分できると思うわ」

「なら、その後が問題ですね。高火力の攻撃を浴びせないと」

ルナがその後も話を進めたが・・・

「高火力ならいるじやないか。とびつきりの奴が・・・」

一人の男性冒険者がそういったた。

「ああ、いるな。頭のおかしいのが」

「いるな、とびつきりの爆裂魔法を使う頭のおかしい紅魔族の娘が」  
彼らの言葉を聞いた冒険者たちが一斉にめぐみんに視線を向ける。  
「おい、待て。それが私を指しているのだとすれば、ここでいかに頭  
がおかしいのは知らしめることになりますよ」

そういうて、めぐみんは杖を構える。

「ちよ、ちよつと何をやつてるのめぐみん」

それを見てゆんゆんがめぐみんを抑える。

するとそこへ・・・

「遅くなりました」

一人の女性が現れた。聞き覚えのある声の主はウイズだった。

この女性は俺がパーティーから離れている間に知り合った元冒険者  
らしく、その正体はリツチーでしかも魔王軍の幹部らしい。といつて  
も、結界を維持するだけのなんちやつて幹部だと本人はいつている  
が。

現在は、アクセルの街で魔道具屋を開いているらしい。俺も何度が  
世話になつて いるが、いかんせん、まともな商品が置いてないのがた  
まに瑕だ。

「店主さんきたああああああああああああ」

「店主さんほどの強キャラが来れば勝てるぞッ」

「いつも、夢でお世話になつています」

一人ほどおかしいものがいるような気がするが、彼らの言葉から分かるように、ウイズは元冒険者らしい。

しかも、かなり高レベルの冒険者らしく、氷の魔女といわれていたらしい。

「私も爆裂魔法を使えます」

先ほどの会話を聞いていたらしく、アクアが結界を破ったのち、ウイズとめぐみんの二人で爆裂魔法を放つことになった。

「なら、俺は足止めをさせてもらおう」

そこで、俺は提案する。

「八本脚で移動するんだろ、もし何かの手違いで爆裂魔法が外れた  
ら一貫のおしまいだからな、俺が結界を破ったあとに、あいつの脚を  
破壊する。起動要塞の起動をなくしてしまえば、ただの要塞だ」

「そんなことできるのか？」

カズマが不安そうにそういう。

「ああ、任せろ」

「わかった」

「では、準備に取り掛かってくださいッ!!」

## 決意

緊急クエスト会議の後、冒険者たちは全員でデストロイヤーに対抗するための準備をしていた。

アクセルの門の前には最終防衛ラインとして何十人もの冒険者たちが陣を張る。

門の上には、右翼にめぐみん、左翼にアクアとウイズを配置している。

そして、最終防衛ラインからだいぶ離れたところにダクネスと俺が立っていた。

「こんなところにいて大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ」

剣を大地に刺し、構える姿はどこかの騎士王、いや、この場合は金木犀の剣を持つ聖騎士といったほうがいいか。彼女に似ている。

「私は普段の行動のせいで、自分の欲望のために立っているかと思われるかもしぬないが、今回は住民たちのためにも後ろには下がれない」

「それは騎士だからか？」

「それもあるが、私の本名はダステイヌス・フォード・ララティーナという」

そして、ダクネスは話してくれた。

「この近隣を収めるダステイヌス家の娘だ」

「やっぱり、お嬢様だったのか」

「皆にはいうなよ」

ダクネスは真剣な目つきでこちらを見た。

「ああ」と頷く。

「私は騎士だ。領民の暮らしを守るのは私の使命であり、誇りだ」

真剣に話す彼女の姿は、誰が見ても貴族の鑑であり、騎士の鑑だろう。

「わがままなパーティメンバーは嫌いか？」

「まさか、昨日いつただろ、このパーティはめんどうなことばかり起こしてくれが楽しいって」

「そうか」

嬉しそうな表情になると、ダクネスは再び前方を向き、これからやつてくるであろうデストロイヤーに身構える。

「ララティーナ、いや、ダクネス」

「言い直して正解だ。そちらの名前で呼ぼうものなら、私はお前を殴っていた」

「はいはい、だけどまあ、そんな身構えなくてもいいぜ、俺が動きをとめるからな」

「そうだな」

そして、デストロイヤーはやつてきた。

「冒険者の皆さん、戦闘準備をお願いしますツ」

ルナの言葉とともに奴は現れる。

機械的な体をした蜘蛛。とてもなくデカい。

あんなのがアクセルを通過したら・・・考えるだけでも恐ろしい。

「ほんとに大丈夫なのツ?」

ここにきてアクアが弱音を吐く。

「大丈夫、大丈夫、大丈夫」とめぐみんも片言で弱音を吐きながらガクガクと震える。

「めぐみんツ大丈夫よ。あなたは私のライバルなのだから!!」

ゆんゆんがしたからめぐみんを励ます。

そして、アクアが魔法を放つた。

「セイクリッド・ブレイク・スペルツ」

爆裂魔法にも引けを取らないほど巨大な魔法陣を展開したのち、それら全てから収束された虹色の光が起動要塞デストロイヤーへと向

かつて突き進む。

「くううう」

アクアの顔は苦しそうだ。

「ぐうう、うおおおおおおッ」

力の全てを吐き出す勢いで魔法を放つと、虹色の光は更に太く力強い光になり、デストロイマーを守っていた魔法陣を見事、打ち破った。「俺もアレを見たなら出し惜しみはしないッ。離れてろダクネス」

「ああ」

デストロイマーの結界が完全に破れたことを確認した俺は黒い機攻殻剣<sup>ソードデバイス</sup>を取り出す。

「すうくはあく」

一度ゆっくりと深呼吸をする。

そして、詠唱符を唱えた。

「顯現せよ、神々の血肉を喰らいし暴竜、黒雲の天を断てッ!! 『バハムートッ』!!」

直後、紅の光が俺を包む。

光がやむとそこには、漆黒の騎士が立っていた。

「黒い、騎士、まさかツ」

「おつと、ダクネス。それは内緒にしておいてくれ。にしても、貴族なだけあって、やっぱり知つてたか」

どうやら、ダクネスは俺のことを知つていたらしい。まあ、それもそうだろう。アイリスとかなり親し気だった。

「いつてくる」とだけいって、俺は『バハムート』でデストロイマーに飛んでいく。

ガシャ、ガシャ、ガシャ、ガシャ、ガシャ、ガシャ、ガシャ、ガシャ、ガシャと駆動音を響かせながら近づくデストロイマーの正面に着くと、俺は『バハムート』の特殊武装である焰印劍<sup>カオス・ブランド</sup>を取り出す。

「いくぜッ」

そして、デストロイマーの脚に斬りかかる。

ガキンッ

しかし、デストロイマーの脚は思つていたよりも頑丈だつたらし

く、傷一つ付かなかつた。

「クツソ、でたらめな硬さしやがつて」

その後の何度も切りつけたが傷が付くことはなかつた。

「このままだとまずいな」

そう思つて焦つていると、脚の関節部分に目が向く。

「あそこならつ」

思つた通り、脚の関節部分は弱いらしく、そこを重点的に攻撃していた。

複雑な構造をしており、一本の脚に四か所の関節部分が存在している。

「一個ずつチマチマやつてる時間はないかツ」

破壊できることはわかつた。

みんなが全力で街を守ろうとしている。

ならば、俺も全力で街を守るしかない。

『リロード・オン・ファイア暴食』

迷わず俺は『バハムート』の神装を発動した。

先の五秒間でエネルギーや現象を数分の1にまで減少させ、次の五秒間で爆発的に開放する。

かなりピーキーな神装クリック・ドロウではあるが、そこへさらに、ティアマトとの修業で身に着けた神速制御を重ねて発動し……

残つていた27箇所の関節部分を破壊した。

そこで、初めてデストロイヤーは歩みを止めた。

ダクネスとの距離は一キロないくらいだ。

「なんとかギリギリだな。というか、急いで離れないと」

そして、俺がデストロイヤーから離れた直後、俺の背後でデストロイヤーに特大の爆裂魔法が二発炸裂した。

そのときに破壊されたデストロイヤーの破片がダクネスの方へと飛んでいく。

ただの破片であるならダクネスの耐久力によつて防げるとと思うが、今回飛んだ破片はかなり鋭利なもので、下手すればダクネスの体を突き刺すかもしれない。しかも、かなり大きい。

急いでダクネスの前に立つ。

「機竜咆哮」

機竜に搭載されている幻想機核から渦上の障壁を展開し、投擲物などを防ぐ技で迫ってきた破片を受け止める。

「大丈夫かダクネスツ？」

「ああ、問題ない」

そして、爆裂魔法によつて土煙が舞い、姿が見えなくなつていたデストロイヤーだが、段々と煙が晴れ、姿が見えた。

そこには、脚を失い、爆裂魔法によりボロボロとなつたデストロイヤーがいた。

## デストロイヤー散るツ！

めぐみん、ウイズの二人が爆裂魔法を放ち、作戦通り、起動要塞デストロイヤーを破壊することに成功したのはいいのだが、新たな問題が発生した。

アクアがフラグの立つような言葉をいつてしまつたせいで、デストロイヤーの自爆機能が起動してしまつた。

超緊急クエスト 起動要塞デストロイヤーの自爆を阻止せよ!!  
本体を破壊できたと思ったら今度は自爆かよッと内心で舌打ちしつつ、どうするか考える。

後ろを見ると、冒険者たちは既に逃げ出している。

「ダクネス……が逃げる訳ないよな」

「ああ」

ダクネスの方は平常運転らしい。

「私は突撃してくる」

とだけいって、一人でデストロイヤーの中に入ってしまった。

そんなダクネスの姿を見て男性冒険者たちもダクネスに続く。

といつても本音ではこの街にある、あのお店を守るためにらしい  
が……

ということで、俺も『バハムート』を纏つたままデストロイヤーの中へ突入する。

幸い、神装を発動したのは一度だけだ。まだ操作するには余裕がある。

『自爆するつていうことは、かなりのエネルギーを持つた物体があるつてことだ！なら、それをどうにかできれば、自爆はしないだろう』  
そう思い、デストロイヤーの中を探索する。

「「「「ギギギ」」」

しかし、中には侵入者を排除するためのゴーレムが無数に存在していた。

見たところ、全部魔法金属でできているらしい。あとからやつてくれ

るであろう冒険者たちでは対処が難しいと考えた俺は、『バハムート』を操り、一気に殲滅する。

にしても、ダクネスはどこに行つたのだろうか・・・

途中ではぐれてしまつたダクネスのことを心配しながら襲い掛かつてくるゴーレムたちを破壊しつくす。

正面に群がる三体のゴーレムを薙ぎ払い胴体を真つ二つにしたり、『焰印剣』カオス・ブランドを縦に振り下ろして破壊するなど、とにかくゴーレムを破壊する。

「魔法金属つていつても、デストロイヤーの脚よりかは柔らかいな。これだつたら余裕だ」

ならば、あとは行動に移すのみ。

それから、およそ三分が過ぎた頃には辺り一面、ゴーレムの亡骸が散乱していた。

「バサラアアアアアア」

すると、そこへようやくやつて来たカズマたち。

「よう、遅かつたな。この変のゴーレムは全て片付けたから先に進もうぜ」

「あ、ああ、これ、お前がやつたのか?」

「まあな」

「流石バサラさんねツ」

そのときだつた・・・

部屋の壁が開き、そこから先ほどのゴーレムの二倍はありそうな、大型のゴーレムが現れた。

「カズマ、先にいけ」

「わかつた」

カズマにそういうと、すぐに了承してくれら。

「お~い、見つかつたぞ」

そして、奥の方から他の冒険者の声が聞こえる。

どうやら、動力炉を発見したようだ。

その声を聞いたカズマたちも急いでそちらへ向かう。

カズマ達がいなくなつたあと、俺はゴーレムと対峙する。

「ギギギ、シンニユウシャ、ハイジョ、スル」

こいつ喋れるのか!?

少し驚いたが、その後、ゴーレムは一瞬で俺との距離を詰めて腹  
目掛けて強力なパンチを繰り出してきた。

「つぶねえ」

とつさに《焰印劍》カオス・ブランドを盾にして攻撃を防ぐ。

「ギギギ」

攻撃を防いだと思つたら今度は素早い蹴りを放つて間合いをとつ  
てきた。

「こいつツ」

熟練の格闘家のような動きをするゴーレムに翻弄される…と思つ  
たか!!

「おりやつ」

ゴーレムの脚を掴むと一気に引つ張り上げる。

体勢を崩したゴーレムに剣の柄を使って打撃を与える。

直撃したその攻撃でゴーレムの胴体が深く凹んだ。

「まだまだツ」

回し蹴りの要領でゴーレムに蹴りを炸裂させると、吹つ飛んだゴー  
レムに《神速制御》クイックドロウを使って接近し、一気に切り倒す。

「ギ、ギギ」

肩から斬つたのだが、そのまま一刀両断することはできず、胴体の  
部分で剣は止まる。

「がああツ」

そこへ、全身全霊の力を持つて剣に力を入れる。

「ギ、ギギツ…ギイ」

すると、ゴーレムは真つ二つに分かれ、爆発した。

「ふう、こんなもんか」

そして、カズマたちの方へ向かおうとしたときだった。

バツと巨大ゴーレムが現れたところの扉がさらに開く。  
そちらの方を見ると一本の剣があつた。

「あれは…もしかして」

わずかながら見覚えのあるその剣に、俺は飛びつく。

「やつぱり、機攻殻剣ソードデバイスか、なんでこんなところに」

しかも、その機攻殻剣は刀の形をしており、俺はその機攻殻剣を知っていた。

最弱無敗の神装機竜において、主人公の従者となる切姫 夜架という少女が扱う神装機竜を宿した機攻殻剣だ。

神装機竜夜刃ノ神。それが、この機攻殻剣に封じられている神装機竜だ。

「色々気になることはあるが、今はカズマたちが心配だ」  
そう思い、機攻殻剣を回収したのち、俺はカズマたちが向かつた部屋へと急いだ。

「「「「ふざけるなっ！」」」

という声が聞こえたあと、俺はみんなに合流した。

あとから聞いた話によると、賢者と呼ばれるデストロイヤーを作つた人間の書いた日記があまりにも衝撃的だつたそうだ。

そして、問題は暴走しているコロナタイトだ。どうやら、これがデストロイヤーの動力炉らしい。

「一体どうすれば・・・」

カズマが頭を悩ませていると・・・

「ウイズ、あんたならどうにかできないの？」

「わ、私ですかッ！て、転移魔法なら」

「それよっ」

ウイズの言葉にアクアは賛同する。

「で、ですが、それをするためには魔力が足りません。座標も設定していませんから、どこに転移するかもわかりませんし」

「いや、それでいこう」

カズマがそういった。

「で、では、カズマさん・・・吸わせてください」

「喜んでツ」

ウイズの言葉にやけに嬉しきな表情を浮かべてオーケーをだす。  
「ありがとうございます」

ウイズはすぐにカズマの首に手をあて、魔力を吸い取った。

「うわああああ

みるみる魔力を吸い取られるカズマは若干やつれていた。

「ちよつとウイズッ。カズマが干からびちゃうわよツ」

アクアの声にウイズは「はっ」となり、手を離す。

「すみません、ですが、これでテレポートできますツ！しかし、いいんですか？変なところに転移でもしたら」

「大丈夫だ。責任は俺がとる。なあに、俺はこうみえて、運がいいんだ」

不安げなウイズにカズマはそういった。

「そうだな、カズマの運ならきっといいところに転移させてくれる

だろう。だから、頼むツ」

俺もウイズにそういった。

「分かりましたツ」

そして、無事に暴走したコロナタイトは転移し、デストロイヤーの危機も去つた・・・かのように思われた。

外にでると、いつの間にか脱出していたダクネスが不穏気な言葉を発した。

「私の天敵感知センサーに反応がある。まだ、終わっていないぞ」  
その言葉のとおり、次の瞬間、デストロイヤーが膨張しだした。  
「なにいいいいツ！」

カズマが叫ぶ。

「ウツソだろ、まだ終わってないのか」

俺もゴキブリのようにしぶとく、さらに質の悪いデストロイヤーに軽く感嘆する。

「これは、内部に溜まつた熱が噴き出そうとしているのでは？」  
どうやら、先ほどまで内部にあつたコロナタイトのせいで熱膨張し

ているそうだ。

「クツソ、爆裂魔法は？」

カズマがウイズに聞いたが

「無理です。魔力が足りません」

そこで、カズマがアクアから魔力を吸い取り、ウイズに注入しようとしたが、リツチーのウイズにアクアの魔力が注がれるとウイズは淨化されてしまうといわれ、断念する。

そこへ、かつこよく現れたのが・・・めぐみんだ。

「真打登場」

「めぐみんツ」

「先ほどは情けない所をみせましたが、今回は大丈夫です」

力強くいい放つめぐみんに俺も加勢する。

「カズマ、俺も手伝う」

「できるのか？」

「ああ、任せろ。俺も準備するから、めぐみんへ魔力の注入を頼む」それから、俺は纏つていた《バハムート》を解除し、《ティアマト》の機攻殻剣を取り出す。

『力を貸してください師匠ツ』と願いながら詠唱符を唱える。

「目覚めろ、開闢の祖。一個にて軍を成す神々の王竜よ、《ティアマトツ》

《ティアマト》を纏つたあとは、特殊武装である《七つの<sup>セブンス・ヘッズ</sup>竜頭》を展開し、魔力を貯める。

「来ました来ましたツ来ましたよおおツ」

すると、めぐみんの方は魔力の注入を終えたようで詠唱の準備に入っている。

「行きますよバサラツ」

「ああ、行くぜめぐみんツ!!」

そして、めぐみんの魔力が練られる。

「光に覆われし漆黒よ、夜を纏いし爆炎よ、他はともかく、爆裂魔法のことに関しては誰にも負けません」

「喰らいやがれツ」

「我が最強の爆裂魔法」

「いつけええええええええ」「エクスプロージョンツ!!」

二人同時に放たれた滅びの光はデストロイヤーを灰燼返したのだつた・・・

起動要塞デストロイヤーとの戦いは終わり、アクセルの街に再び平和が訪れた。

こちらに来てから何気ない平和の日々が俺を癒してくれた。

俺に思い出をくれた。俺に仲間をくれた。俺に絆を与えてくれた・・・

そして、俺はパーティから少し離れていた。

ゆんゆんもついて来てくれている。

しかし、そんな俺の知らない所で事件は再び発生していた。

なんと、カズマが国家転覆罪で捕まつたのだ。

それを知らない。俺とゆんゆんはどうと・・・

「なあ、ゆんゆん、ほんとにいいのかついて来てもらつて?」

「はいっ、そ、その、バサラさんは私がいてはお邪魔でしたか?」

「いいや、全然、むしろ、心強いよ」

「それにして、どうしたんでしょうね王城からの呼び出ししなんて

「うううん、まあ、なんとなく予想はつくけどな。しつかし、やつぱり『バハムート』を使つたせいか」

そう、俺は王都にある城へと呼び出しを喰らつていた。

手紙の差出人はベルゼルグ・スタイルッシュ・ソード・アイリス。この国的第一王女様だつた・・・

# 一騎当千 神装機竜無双!!

## 機竜使いの王城入り

「ふう～ゆんゆんと出会つてからあまり経つていなはばずなのに」  
「随分昔のことのように感じますね」

「そうだな」

王城からの呼び出しがかかつた俺は、こうしてゆんゆんと二人で王都に来ていた。

思えば、初めてゆんゆんと出会つたのもここだつた。  
といつても、ゆんゆんと出会つてから一ヶ月も経つていない。  
にも関わらず、これほどまで昔のことのように感じるのは、それだけこの世界に来てからの生活が充実しているということだろう。

「バサラさん」

「どうしたんだゆんゆん？」

「そ、そのお、随分荷物が多そうですが何なんですか？」

そういつて、ゆんゆんは俺が背負つている荷物を指差す。

「えつ？ああ、王城に呼ばれてるし、最低限正装は用意しておかないとなつて思つて」

「そういえば、そうですね。で、でも、私・・・」

「そつか、ゆんゆんにいつてなかつた俺も悪かつたな。どうする？  
話している間、宿屋で待つてくれるか？」

「えつ」

すると、ゆんゆんは悲しそうな顔をする。

「ははは、冗談だよ。ちよつとその辺の服屋で正装を買うか」

「は、はい」

ちよつとした冗談でゆんゆんをからかうと、ゆんゆんは顔を赤くして俺の服の袖を握つた。

「ごめんごめん」

「もう、バサラさんの意地悪」

涙目上目遣いで訴えてくるゆんゆんに胸を撃たれるツ!!

「ぐはつ」

「ど、どうかしましたかバサラさんツ!?」

そんな俺をみてゆんゆんが心配してくれる。

「だ、大丈夫だ。少し懺悔したくなつただけだ」

「は、はあ！」

そして、俺達はそのまま以前、御世話になつた服屋へと来ていた。

「いらっしゃいませ・・・お客様ツ」

店に入るときつそく、店主さんが来てくれた。

「お客様、本日はどういつたものをお探しですか？ ライダースで

すか？」

「いや、今日はこちらの子に似合う正装を買いに来たんだが」

「ほほう、彼女さんに似合う服ですか」

そういつて、店主さんはゆんゆんのことをじいじと見つめる。

「か、彼女じゃないです」

ゆんゆんは店主に彼女といわれたことが恥ずかしかつたらしく、すぐには否定していた。

そんなに必死に否定されると少し傷つくが・・・まあ、気にしたら負けだ。

「紅魔族の方ですよね？」

「は、はい」

「でしたら、黒いドレスなどがありますが」

「で、では、それで」

そして、店主さんが三着ほど黒いドレスを持つてきてくれた。

「お客様に似合いそうなのはこちらになります」

三着ともゆんゆんに似合いそうなのは確かだが・・・少々露出が激しいような。

「あ、あのお、もう少し地味な物は？」

「お客様はスタイルがよろしいので、こちらの方がお似合いかと」

しかし、店主さんは引かない。むしろ、押してきた。

「バ、バサラさんは？」

「そうだな、確かに俺もちよつと露出が多いような気がすけど、でもまあ、似合うと思うぞ」

「えうですか？」

「店主さん、試着させてもらえるか？」

「ええ、勿論です」

店主さんからオッケーを貰つたので、ゆんゆんには試着室に入つてもらい、三着全てを見させてもらう。

一着目はレースがついており、露出は一番すくないが、ところどころ透けているため下手な露出より刺激が激しいドレスとなっていた。「よくお似合いですよお客様ツ！」

「ああ、すんげー似合つてる」

「うう、恥ずかしいです」

二着目は背中を大胆に露出させたドレスとなつており、ゆんゆんの白い肌が映えている。

「ううう」

「こちらもお似合いですツ!!」

「あ、ああ、似合つてるけど、刺激が強いな」

そして、三着目

「こ、これなら」

「露出はそこそこありますが、お客様のスタイルならば男の引く手待つたなしですよツ!!」

「・・・・・」

「バ、バサラさん？」

「えつ？あ、ああ、悪い」

「ふふふ、お客様の姿に見惚れていたようですね」

「こ、これにしますツ！」

そういうて、ゆんゆんは即決した。

「あ、お金は俺が払うよ」

「そんな！悪いですよ」

懷から金貨袋を取り出すとゆんゆんが止める。

「いいつて、付いてきてもらつてるんだし」

「で、でも」

「お客様、こういうときは男性にカツコつけてもらうのがマナーですよ」

「だそうだ。ということで」といながら、俺は金貨袋を店主に渡した。

ゆんゆんの正装を準備した後、俺とゆんゆんは王城へと案内された。

「来てくださいましたか」

玉座へと案内するために、俺達の対応をしてくれたのは、この国でも由緒正しい貴族の家で、ダクネスと同じクルセイダーで、アイリスの護衛を務めているクレアだつた。トレードマークは短髪に白い男性用のスーツ。しかし、女性である。

「ああ、久しぶり」

「それで、そちらの方は？」

「俺の仲間だ。頼りになる魔法使いだ」

「そうですか、確かに見たところ、紅魔族のようですし」

「ゆ、ゆんゆんです」

「私はクレアだ。アイリス様の護衛を務めている」

そして、俺とゆんゆんはクレアによりアイリスのもとへと案内された。

「やつと来てくれましたねッ！バサラ様ッ！」

玉座に入室した瞬間、可愛らしい少女の声が俺の名を呼ぶ。声の方を見ると、ひとりの少女が座っている。

美しい金髪の髪に碧眼の少女、年齢は十二歳でありながら、王族の血を引いているため、高い戦闘能力を所持している、この国の第一王女。

そう、この少女こそが、ベルゼルグ・スタイルッシュ・ソード・アーリスである。

「久しぶりだな、アイリス」

「お、おいつ、不敬であるぞ」

「いいのよ、クレア。私がいいつていつたの」

「で、ですが」

「ク・レ・ア」

「か、かしこまりました」

王女であるアイリスを呼び捨てにしたことでのクレアが怒るが、アイリスはドスの効いた声でクレアを宥めた。

「バサラ様、そちらの方は？」

そして、アイリスはゆんゆんを見る。

「わ、私はゆんゆんと申します。バサラさんのパーティメンバードす」「そうなんですね!!でしたら、是非、バサラ様の冒険のお話を聞きました

いのですが

「アイリス様ッ!!」

ゆんゆんが俺のパーティメンバーと知ると、アイリスはすぐに提案した。

なにせ、アイリスは冒険譚が大好きで、よく冒険者を城に呼び、冒険譚を聞いている。

しかし、今回は別件のようだ。そのため、クレアが注意する。

「もう、わかっていますよ」

そして、アイリスは咳ばらいをした。

「バサラ様にお願いがあるのです」

それから、アイリスは俺を呼び出した訳を話してくれた。

どうやら、魔王軍の大規模な軍隊が王都へ向かっているとのことだ。

しかも、今回は魔王軍幹部だけではなく、ドラゴンを連れているらしい。

「それで、その魔王軍幹部というのは?」

「はい、御察しの通り、アガレスです」

『またアイツかッ』と心の中で叫ぶ。

「そういえば、アクセルの街でアガレスと戦闘したという報告を聞いたのですが？」

そこで、アイリスの横にいたアイリスのそば付き)をしている、魔法使いの女性レインがそういう。

「報告では、アクセルの街に、アガレスはベルディアと共に攻めてきたにも関わらず、同士撃ちをする形でベルディアを攻撃し、弱つたところを、仲間のアークプリーストが浄化し、ベルディアを撃退したと報告されています」

「快挙ですよ!!今まで誰も成し遂げることの出来なかつた魔王軍幹部の討伐」

「それに加えてデストロイヤーの討伐と来ています。やはり、バラ殿には我が王国の騎士団に」

三人が興奮して話を続けるが・・・

「それで、魔王軍の進軍はいつごろなのでしょうか?」

ゆんゆんが話を戻してくれた。

「あ、はい、すみません。偵察の報告によれば二日後だと」

「二日後ッ！」

「はい、ですのと時間はないのですが」

クレアがもし分けなさそうに話す。

「それで、俺が呼ばれたと」

「その通りです。しかも、頼りになるアークウェイザードと共に召喚されていただけるとは

更にレインがそういった。

「ちょっと待つてくれ」

そこで、俺は待つたをかけた。

「どうかなさいましたか?」

「少しゆんゆんと話す時間が欲しいんだが?」

「かまいません」

許可を得た俺は、ゆんゆんの方を見る。

「悪いな、まさかこんなことになるとは、ついて来てくれて悪いんだが、手伝ってくれるか？」

ゆんゆんは深く頷き

「勿論ですッ」

二つ返事で了承してくれた。

「すみません、ゆんゆんもこういってるんで、その戦いに参加するということで」

「バサラ様ならそういうってくれると思つていましたわッ」

アイリスだけではなく、他の二人も嬉しそうな顔をしている。

「ち、ちなみに、魔王軍の規模はどのくらいなんでしょうか？」

小さく手をあげたゆんゆんが訪ねる。

「はい、およそ二千ほどかと」

「二千ッ！」

ゆんゆんはあまりの数の大きさに驚く。

「なんだ、二千か」

「ええッ！バ、バサラさん。二千ですよ？二千、しかも幹部とドラゴンもいるって」

「別に大した数じゃないさ」

俺は自信満々にそういうつてやつた。別に見栄を張つているわけではない。

二千程度なら、本当に楽勝なのだ。なにせ、こちらは機竜がある。ドラゴンや、幹部ならまだしも、ただのモンスターたちには後れを取らない。

「おおッ！流石バサラ殿です」

「なんなら、今から奇襲でもしてこようか？」

直後、バタツと急に扉が開く。

「し、失礼します」

「どうしたッ！今は謁見中だぞ」

「はつ、実は王都の周辺に大規模なテレビポートにより魔王軍が攻めできましたッ！」

「なんだとッ!?」



# ぶつ飛べ有象無象！バーストツッ!!

突然の報告に俺達は言葉を失う。

「か、数は？」

レインが訪ねた。

「はっ！およそ、五千ほどかと」

「五、五千ツ」

「一千の倍じやないかツ」

「くっそ、一千の部隊は、奇襲のための囮か！」

「いや、しかし、五千もの部隊を転移だなんて、聞いたことないツ」

「アイツなら、アイツなら、それくらい余裕だろうな」

「バサラ殿？」

「アガレスだ。アイツの魔法なら、それくらいできてもおかしくはない」

そうだ、アイツは竜だった。魔力量だって人間とは比べ物にならないはずだ。

だとすれば、いや、しかし、竜でも五千ものの数を一斉に転移させるなんてことは不可能だろう。

なのに、何故だろう。アイツならそれくらいやつてくると感じるのは？

「いや、今は魔王軍をどうにかしないと。ゆんゆん行くぞツ」

「は、はいつ」

「クレアたちは、至急、王都にいる冒険者たちを集めて戦線へ、俺は機竜で先に攻撃しておく」

「わ、わかりましたツ!!」

そして、クレアは指示を出し始めた。

騎士団は勿論、宫廷魔導士たち、そして冒険者たち全員にだ。

「ゆんゆん、装備は？」

「は、はい、ワンドとロープは持つてきますので」

「よしツ。今はいちいち着替えてらんねえ」

王城の中庭にでた俺は、《ティアマト》の機攻殻剣を取り出す。「目覚めろ、開闢の祖。一個にて軍を成す神々の王竜よ、《ティアマト》

ト』

《ティアマト》を纏つた俺はゆんゆんを呼ぶ。

「ゆんゆん、つかまれ」

お姫様抱つこの容量でゆんゆんを抱える。

「しつかり、掴まつてろよ」

「はいっ」

そして、そのまま戦場へと飛び立つた。

報告の通り、王都を囲む形で魔王軍たちが攻めてきていた。

ゴブリンやコボルト、ミノタウロスにキメラ、ゾンビ、スケルトンなど様々な種族で構成されている。

パツと見たところ、アガレスの姿は見えない。ドラゴンもいない。まあいい。今はこいつらを殲滅することだけ考えよう。

「ゆんゆん、ここで正面からやつてくる奴らを魔法で倒しておいてくれ。俺はとりあえず、殲滅していく」

「わかりました！ 気を付けてくださいね」

「ああ、頼むぞゆんゆん」

「はい、任せてください」

王都の城門の上にゆんゆんを下したあと、俺は周囲にいる魔王軍に攻撃を仕掛ける。

「こういうとき、めぐみんが居れば」

俺は自分の仲間である頭のおかしい爆裂娘の姿を思い浮かべる。

『七つの竜頭』

先のデストロイヤー戦で俺のレベルは上がり、機竜使いのスキルを取っていた。

そう、それは・・・

「ぶつ飛べ有象無象ツ バーストツ!!」

直後、《七つの龍頭》の銃口から、超ド級の滅びの光は発射される。機竜使い専用スキル 特殊武装強化 特殊武装威力上昇 神装効果延長の三つを習得していた。

これにより、《ティアマト》の特殊武装の威力はけた違いに上がり、爆裂魔法と引けを取らないようになつていていた。

そして、《七つの龍頭》の砲撃を喰らつた魔王軍は一気に五百ほど消滅した。

「ア、アイツをどうにかしろおおおおおお」と地上から声が聞こえる。

どうやら、魔王軍は俺の存在に気付いたようだ。

魔法を使えるものが、俺に向けて魔法を放つてくる。

「吹き飛びやがれツ バーストツ!!!」

第二射を放つと、魔王軍の魔法は簡単に呑み込まれて、魔法もろとも再び三百ほど魔王軍を呑み込んだ。

「クッ、威力は上がったがその分、消費する魔力も増えたか」

前までとはくらべものにならない威力になつたものの、やはりその分の消費魔力は増えていた。

これ以上ぶつぱなすのは、すぐにガス欠になると理解した俺はすぐさま、《七つの龍頭》を直し、神装を発動した。

「ひれ伏しなツ 《天 声》」

スキルを習得したあとの《ティアマト》の神装により、俺を中心としておよそ半径五キロに渡り、重力を五十倍にする。

一気に地に伏せた魔王軍の大半は、自信の重さでつぶれた。

これで、また五百ほど減つただろうか。

おかげで、周囲の魔王軍は消えて、違う場所へ向かう。

「にしても、力を使い過ぎたな」

神装機竜は力を使い過ぎると暴走してしまう危険がある。まあ、最弱無敗の神装機竜の主人公であるルクスは、その暴走を利用して通常以上の力を引き出す奥義もあるが、それは負荷が激しい為、今回の戦

弱無敗の神装機竜の主人公であるルクスは、その暴走を利用して通常以上の力を引き出す奥義もあるが、それは負荷が激しい為、今回の戦

いでは使わない。

だから、俺は最後に《ティアマト》のもう一つの特殊武装である巨  
大な鎌型の投擲兵器である《空挺要塞》を召喚し、ここから離れた場  
所に攻めてきていた魔王軍の部隊に向けて

全力で投擲した。

「おらああああああッ」

ビュンと空を裂き、一直線に魔王軍の部隊のもとへ向かう  
《空挺要塞》。

そして、直撃する。

あまりの質量を受けた部隊は案の定、崩壊した。

そこで、俺は《ティアマト》を解除する。

それと、同時に《空挺要塞》は消える。

《ティアマト》を解除したことにより、落下する俺は、短剣型の機攻  
殻剣を取り出す。

「始動せよ。星碎き果て穿つ神殺しの巨竜。百頭の牙放ち全能を殺  
せツ《テュポーンツ》」

今回、俺が呼び出した機竜は今まで使っていた飛翔型の機竜とは違  
い、陸戦かつ、近接に特化した神装機竜である《テュポーン》だ。  
華麗に着地したのはいいのだが、俺の周りを魔王軍の部隊がパツと  
見て千はいるだろうか・・・

「よくもまあ、ぬけぬけと来たもんだ」

そう呴いたのは、見ただけで他の奴らとは違うと分かる鬼族の女  
だ。

「かかって来なツ」

その言葉が開始の合図にし、俺一人対魔王軍（およそ千）の戦いが  
幕を開けた。

# 神装機竜無双からの・・・○○○○無双

「かかつて来なツ」

鬼族の女が発した言葉が開戦の合図となり、魔王軍たちは一斉に俺に向かつて魔法を放つた。

「ふんつ」

俺は真上に数メートルほどジャンプしたと同時に、《テュポーン》の特殊武装である《竜咬縛鎖》<sup>(バイル・アンカ)</sup>を射出する。

全身から射出された《竜咬縛鎖》<sup>(バイル・アンカ)</sup>に捕縛された者はそのまま引き寄せられ、鞭のように扱われる。

「なつ」

自分たちの仲間を武器に扱う俺を見て、敵は若干引いている。

「これは戦争だ。勝たないとけねえんだよツ」

そのまま捕縛した奴らを使い、俺を囲んでいた奴らを一掃する。だいたい一掃できたと思われるが、少しばかり精銳が残っているようだ。

鬼族の女も勿論残っていた。

「くつ、あなた一体何者なの?」

「そうだな、只の機竜使いといつたところか?」

「聞いてないわよツ、こんな奴がいるなんて」

鬼族の女が怯んでいる今がチャンスだと思い、俺は一気に女との距離を詰めた。

そして、掴む・・・が、掴んだのは女ではなく、横から現れたのは男つた。

「ラキ様に手出しあさせない」

どうやら、女を守りにきたようだ。

しかし、《テュポーン》に掴まれてしまつたのが、運の尽き。

「破ぜろツ」

その言葉が紡がれると、《テュポーン》の掌から爆発が起ころる。これこそが、《テュポーン》の特殊能力である《竜咬爆火》<sup>(バイテイシング・フレア)</sup>。

掴んだ物体にエネルギーを流すことで破裂させる、まるでハンターハンターに登場するボマーのような能力だ。

もちろん、正面から喰らつた男はひとたまりもなく、血を出すこともなく焼け死んだ。

「うつ、い、一度引くわよ」

鬼族の女はそういうつて、懷から何やら取り出す。それを握りつぶすと女は姿を消した。

「くつ、空間転移かッ」

逃してしまつたが、すぐに切り替えて他の所へ向かう。

辺りを見てみると、大分数は減つてきていた。五千あつた敵は二千と少しくらいまでになつていて。

そこで、俺はゆんゆんのことが心配になり、目につく敵を殲滅しながら、ゆんゆんの様子を見に行つた。

王城の城門まで来て見ると、敵がすぐそこまで迫つてきており、城門の上にいるゆんゆんは宮廷魔導士と思われる連中と共に、回復ポーションを飲みながら戦つていた。

「大丈夫そうだな」

そして、思いのほか、迫つてきている魔王軍を殲滅するために、加勢に入る。

辺りが血だまりになる中、クレアが大柄のゴブリンに襲われているのを見つけた。

「あれは、ゴブリンロードかッ！」

ゴブリンロードの体長は三メートルを超えており、その巨体から繰り出される攻撃にクレアは押されつつあつた。

「くう」

力いっぱい踏ん張つているが、足が地面にめり込んでしまうほどの威力を前に反撃ができない。

「ぶつ飛ベッ！」

俺は横から、ゴブリンロードの腹に蹴りを入れると、ボール玉のようにその巨体は吹つ飛んだ。

「バサラ殿ッ！」

「よう、クレア。大丈夫か？」

「はい、助かりました」

「敵の大将はどこにいる？そろそろお出ましだと思うんだが」

「そうですね、まだ発見されてないところから考えるに、どこかに潜

伏しているのがもしません」

「そうだな、アイツならそうするだろう」

「周囲の敵はどうなりましたか？」

「一応、二千ちょっとほど、殲滅したところだ」

「なつ！ そうですか、やはりあなたは規格外だ」

クレアの会話を聞きながら、俺は再び《竜咬縛鎖》バイル・アンカを放つて、周囲の敵を捕縛しつつ、それを鞭の代わりに振り回す。

一気に数を減らしたこが、チヤンス。

後ろにいた、ゆんゆんたち魔導士が一斉砲撃にする。

上級魔法の弾幕を喰らった魔王軍はその数を一気に減らし、正面の敵はいなくなっていた。

「ふふふ」

そのときだつた、俺にとつては嫌になるほど聞き覚えのある声が不気味に周囲に反響している。

「ふふふ」

「ふふふ」

何度も反響するその声を聞いていると気分が悪くなる。

そして、その声が止んだと思つたら・・・

「久しぶりねバサラ」

「でやがつたか、アガレスツ」

俺の因縁の相手であるアガレスが姿を現した。

「ふふふ、ますます強くなつたわねバサラ」

「そういうお前はますます色気が増したんじゃねえか？」

アガレスの言葉に俺は皮肉を込めて言い放つ。

「あら、嬉しいことをいつてくれるわね。恋をすると女は美しくなるものなのよ」

うつとりとした表情を浮かべ、アガレスは囁う。

「でも、そろそろ、あなたは私のモノになつてもらおうかしら」直後、俺の正面にアガレスが現れる。

「クツ」

なんと、アガレスは魔法で攻撃してこないで素手に機竜を殴りつける。

ギリギリ、攻撃をガードしたが、すごい威力だつた。

「お前」

「どうかしたかしら？ 私は魔法を主に使うけど、別に近接戦が苦手つてわけでもないのよ」

引つ掛かったと舌をだして、俺を挑発するアガレス。すぐに反撃にでる。

アガレスを掴まえようとしたが、やはり空間転移で逃げられる。「ガハッ」

すると、下から何者かに殴られる。

「ア、ガレス」

「ふふふ、空間転移だけに気を取られていたら、こうして分身体に攻撃されるのよ」

そういって、さらに俺の腹に蹴りをぶち込んだ。

「グハッ」

そのまま、俺は十メートルほど吹き飛ばされる。

「な、んだ、その、馬鹿力」

「馬鹿力つて酷いわね。これでも、乙女よ。まあ、一応、私は竜だから。これくらい当然よ」

「そう、か」

そして、再び、アガレスに攻撃を仕掛けようとしたそのときだつた。

「なつ」

『テュポーン』が解除されてしまう。

「あらあ～その鎧姿でいるのも限界が来たようね」

「くつ」

アガレスは空間転移を扱い、俺を後ろから拘束する。

「はなつ、セツ！」

「うふふ、せつかく捕まえたのに離すわけないでしよう」

捕らえられた俺の姿をみて、クレアが救助に入る・・・が

「うつとおいしいわね」

アガレスが蠅を払うようにつぶやくと、分身体が現れ、クレアを吹き飛ばす。

「うふふ、安心して、すぐに私のモノに堕として、あ・げ・る」

そして、俺は分身を含め四人のアガレスに囲まれる。

「くつ、絶対絶命か」

## 浸食せよ

「くつ」

『ティアマト』に加え、『テュポーン』まで使った反動か、強制解除されてしまった、俺はアガレスに捕まり、ピンチを迎えていた。

「そんなに怯えなくともいいじゃない」

そういうて、正面にいたアガレスが俺の顔を両手で包む。「さあ、契約よ」

アガレスの顔が段々と近づいて来る。そのときだつた!!

『ライトオブセイバーツ』

光の剣がアガレスに襲い掛かる。

「効かないわよツ」

何やら障壁を開いたアガレスは光の刃を弾く。

「ゆんゆんツ！」

「バサラさんツ」

先ほどの魔法を放つたのはゆんゆんだつた。

顔色が悪く、ローブの下に着ているドレスは少し汚れている。

「助けにきました」

「あらあら、私がいるのに他の子を見るの？」

そういうて、アガレスはすぐさま俺の顔を包み、目を合わせる。

『ライトオブセイバーツ』

そこに、ゆんゆんが更に魔法を放つ。

「しつこいわねツ」

アガレスがゆんゆんに向かつて、『カースド・ライトニング』を放つ。「きやあつ」

ゆんゆんはなんとか間一髪のところで避けたものの、空間転移したアガレスが無防備のゆんゆんに強烈な蹴りを放つ。

「カハツ」

大の男が喰らつても氣を失つてしまいそうなその一撃をゆんゆんは正面から喰らってしまう。

「はあ、全く」

倒れ込むゆんゆんに目もくれず、アガレスは再び俺の方へ向かう。

「ま、だ」

ピクリと小さくゆんゆんが手をアガレスの方へ向けてそういった。

「まだ、まけて、ないッ『ライトニング』」

もう上級魔法を放つ魔力が残っていないからか中級魔法である『ライトニング』をアガレスの背後に放つ。

「ほんとうにしつこいわね」

そういうながら、背後に障壁を開き、ゆんゆんの『ライトニング』を防いだ。

「もういいわ、あなた。殺してあげる」

「くっ」

静かに咳くとアガレスはゆっくりと、ゆんゆんに歩み寄る。

「やめろッ！」

「・・・・・」

「やめてくれ！」

「・・・・・」

俺の制止するように求める声に耳を傾けず、そのままゆんゆんに迫る。

「頼むッ！やめてくれッ！」

そして、アガレスはゆんゆんの髪の毛を掴み拳を握る。

「やめてくださいッ！」

俺は折れた。

「ふふふ、やめて欲しい？そんなにこの娘のことが大切なの？」

アガレスは舌なめずりをしたあと、ゆんゆんの顔を掴む。

「さあて、この娘はどのように殺してあげましょかしら？頭を潰す？それとも、体に風穴開けてあげようかしら？あつ、殺す前に私の部下に楽しませてあげるのもいいわね」

アガレスが楽しそうに提案する。

「お願ひだ！やめてくれ！」

「あら～ん？お願いだあ～やめてくれだ？」

「お願いします。やめてください」

「アーハツハツハー！いいわあ、すごくいいわあ」

ゆんゆんを離したかと思つたら自身の体を抱きしめるアガレス。

「ゾクゾクしちゃう」

そして、俺の方をみたアガレスの瞳は青く怪しげな光を放つてい  
た。

「バサ、ラさん。わたしの、ことは、いい、ですか」

虚ろな瞳となつたゆんゆんが声を枯らしながらそういつた。

「あなたは黙つてなさい」

アガレスがゆんゆんの頭を踏もうとする。

「俺の負けです」

「なんていったのかしら？」

「俺の負けです」

「アツハツハツハ、ほんとツ！サイコーよ。あんなにも私達のこと  
をボコボコにしてくれた《黒き英雄》様がこんな娘のために負けを認  
めるだなんて。

『・・・全く、ご主人様は甘いんですから』

と、聞きなれない声が聞こえた。

ギュウウウンと変な音が聞こえる。

「この音は一体？」

そして、現れる。

亜空間から勝手に飛び出してきたものそれは・・・一本の機攻殻剣  
だつた。

「こ、これは」

刀型の機攻殻剣

そう、デストロイヤーの内部にて発見した《夜刀ノ神》の機攻殻剣  
だ。

「どうか」

俺の脳内に直接《夜刀ノ神》の声が届いた。

「浸食せよ、凶兆の化身たる塵殺の蛇竜。まつろわぬ神の威を振る  
え、《夜刀ノ神》」

『夜刀ノ神』を纏つた俺は、背後から俺のことを抑えていたアガレスを掴み神装を発動する。

神装『禁呪符号<sup>スペル・コード</sup>』

この神装は触れた箇所を中心に一時的に支配権を得るというものがだ。

そこで、俺はアガレスの頭を掴み、思いつきり力を使つた。

その結果、アガレスの分身体は消え去り、アガレスを一時的に抑えることができた。

「があああああ」

もうに神装を喰らつたためか、アガレスは頭を抑える。

「よ、よくもやつてくれたわねツ」

そういうて、アガレスは姿を消す。

「ま、また逃げられた」

いや、今はそんなことどうでもいい。

俺はすぐさまゆんゆんの元へ走り寄り、持つっていた回復ポーションを飲ませる。

「う、うう」

ゆんゆんはすぐに意識を取り戻す。

「あ、れ」

「よかつたッ」

ゆんゆんが目を開けるのを確認した俺はゆんゆんを強く抱きしめた。

「えつ、ええつ？ バ、バサラさん」

「よかつた、よかつた、ごめんなゆんゆん。俺が弱いせいで」

「そ、そんな」

その後、ゆんゆんは何もいわない。俺も、ただ溢れてくる涙を嚥み締めながらゆんゆんを抱きしめていた。

失意の中での、そして・・・

アガレスを退けたあと、俺はゆんゆんを抱きしめていた。  
未だ戦いの最中でありながら、俺は周囲など気にせずにひたすら、  
ゆんゆんを抱きしめる。

「あ、あの、バサラさん。そろそろ」

そこで初めてゆんゆんの反応に気付く。

「わ、悪い」

顔を見ると赤くなっている。

回復ポーションで怪我を治療したといつても、彼女の着ている服は  
ボロボロであり、破れたところから、彼女の素肌が見えている。  
普段の俺であれば、そんな扇情的な姿にドキッとするのだが、先ほ  
どのアガレスの仕打ちからそんな気など起こせないほど、自分への怒  
りと情けなさでいっぱいだ。

「ごめんな、余裕だとかいってたのに・・・」

「いえ、私の方こそ、助けに来たつもりが、逆に助けられてしまい」

本当に情けない。この世界にきて、自分の強さに慢心していた。

その結果、アガレスに負けて、再び初心に戻ったのだが、デストロ  
イマーを破壊したことによつて、再び慢心していたようだ。  
無様に敗北宣言をさせられた。

思わず、拳に力が入る。

「そ、それよりバサラさん。まだ戦いは終わつていません」

「そうだな、指揮官のアガレスが撤退したといつても、まだそこら中  
に魔王軍がいる」

「ええ、早く片付けないと」

そして、俺達は再び戦いに参加した。

機竜を使い過ぎたことにより、俺は機攻殻剣で魔王軍を蹴散らす。後衛には心強いアークウイザードがいる。

油断せずに一体一体倒していく。

「バサラさんツ」

すると、背後から現れたゴブリンに向けてゆんゆんが『ライトニンググ』を放つ。

「サンキュー」

頼もしい相棒の援護を受けて、その後も油断せずに戦闘を続けていた。

そこから、五十体ほど倒した。

魔王軍も撤退し、防衛線はここで終わるかと思つたそのときだつた。

再び、アガレスが現れる。

「よくもやつてくれたわね」

普段の怪しげな声ではなく、怒気の籠つた声が戦場に響く。

「でも、まあいいわ。これから王都は滅びるんですけどもの」

ヒステリック氣味に何やら魔法を発動した。

「さあ、現れなさいッ 『リヴィアイアサン』」

アガレスの魔法が発動すると、戦場に巨大な魔法陣が現れる。そこから姿を現したのは青い体を持つ竜。

『リヴィアイアサン』ツ

俺はこの名を持つ竜を知つている。

もし、この竜が俺の特典である機竜に関するドラゴンだとするのであれば、何故アガレスが使役できる?

精神操作などといった能力を使つていてるのだろうか?

いや、しかし、ここは異世界だ。俺の特典に関わらず、たまたま名前が同じだったということもあり得る。

・・・考えてもキリがない。ただ分かるのは、その竜が暴れれば間違いなく王都が滅んでしまう。

ベルゼルグ王家に伝わる神器を使えば倒せるかもしれないが、こんな最前線にアイリスを連れてくるなんてクレアたちが許さないだろ

う。

「バサラさん。なんとかしないと、王都がツ」

「ああ、でも、機竜を使えない。どうすればツ」

そんな風に周囲の状況を確認しながら考へてゐると……

ひ 性もなツ ここから先はなんとしても通してはならぬいツ

クレアを筆頭こゝに

が  
る。

魔導士隊詠唱準備

今度は宫廷魔導士たちが、『リヴァイアサン』に向けて放つ魔法の準備をする。

やになさい『リカ』、『アサム』

「アーリアが感情を感じられない戸で命を失う！」

直後、王暴が口を開き、魔法陣を展開せざる。

そこから放たれるのは氷のブレス。

凄まじい水圧のブレスはあつという間に騎士たちの陣形を破壊し、

王都の城門まで破壊してしまつた。

「アツハツハツハ！いいわよ『リヴィアイアサン』」

狂ったように嗤うアカレスの姿はまるで魔女。

一  
モ  
ハ  
タ

は目の前で趙三が出来事に頭を悩ませる

新編　古今圖書集成

「ま、待てツ

すかさず、ゆんゆんの腕を掴まる。

離してくがさいハシミシハシ

一落ち着けゆんゆん」

「でも、」

「いいから、落ち着け」

「バサラさんは、さつきまで命がけで戦つてました、だから今度は私

がツ

「いい加減にしろツ！」

俺はとつさに怒鳴ってしまう。

しかし、一度爆発してしまった感情は止まらない。

「俺はもう、ゆんゆんに傷ついてほしくない。俺が弱いから、俺がアガレスに負けたから、ゆんゆんはあんな風に飄られた」

「バサラさんの馬鹿ツ」

すると、俺の頬に鈍い痛みが走る。

そう、ゆんゆんにぶたれた。

何もいえないままでいると、ゆんゆんの姿はもうなかつた。

「クツソツ。何が『黒き英雄』だよ、ただの負け犬じゃないか」

悔しさと情けなさのどん底に突き落とされた気分だ。

『ああ～あ、行つちやつた』

そんな声が聞こえる。

『本当にいいのかい？このまま彼女を行かせてしまって』

『そんなわけないだろツ!!』

『なら、助けないと』

『分かつてるツ！そんなこと誰よりも分かつてるツ！でも、どうすればいいんだ』

『僕が力を貸してあげる。どうやら、『リヴァイアサン』は、あの魔女に操られてる』

『てことは、あの竜は・・・』

『そうだよ、君の考へてる通り、機竜のドラゴンだ』

『でも、どうすればいいんだ？それに、お前は『夜刀ノ神』でいいんだよな？』

そこで、俺は先ほどアガレスから救つてくれた機竜『夜刀ノ神』に

問い合わせる。

『ああ、そうだよ。情けない君の力になろう。僕を纏つて『リヴァイアサン』に神装を使うんだ』

『うかツ』

『でも、気を付けてね。君の体は限界だ。纏えるのは五分が精々い

いところだ。それ以上は無理」

『夜刀ノ神』の言葉を聞いて、すぐに行動に出る。

「浸食せよ、凶兆の化身たる饅殺の蛇竜。まつろわぬ神の威を振る

# えツ！ 『夜刀ノ神』

再び、機竜を纏うことに成功した俺は、すぐに『リヴァイアサン』に向かう。

だが、そのときだつた。

天子讐

その玄範用攻撃の直線状にはやんやんが、こ

「くつ、間に合ええええええええ」

奥義『神速制御』を発動し  
一気にゆんゆんと尻尾の間に体を滑り込ませる。

九  
ノ  
ツ

なんとか攻撃を受け止めることはできたものの、衝撃までは防げず、内臓のいくつかがやられ吐血する。

ノナニヤシテ

「ごめ、んな。で、も、もう、大丈夫、だ」

うまく呼吸ができないか 精一杯ゆんゆんに話しかける

そこで、瓦缶を国に送る奄は申

やして、戻戻を抱くが如きに神聖を発動した

大正十二年九月三十日

『ここは《リヴィアイアサン》の精神世界。僕の神装の力で一時的だけど《リヴィアイアサン》の精神世界に侵入できた。この蜘蛛の巣を取り払うことで、彼の魂は元に戻る』

「つまり、アガレスから救えるつてことだよな？」

「分かつた」

『夜刀ノ神』のアドバイスを聞いた俺は、すぐさま蜘蛛の巣のようなものを除去する。

しかし、蜘蛛の巣は恐ろしい程に『リヴァイアサン』を侵食しているようで、こびりついて剥がれない。

『何をやつてるんだ弟子よ』

すると、そんな声が聞こえた。

『師匠？ 師匠なのか！？』

『全く、我が鍛えたというのに情けない。鍛えなおしてやりたいところだが、今は時間がないのであろう。仕方ない、我が力を貸してやろう』

俺の隣に高貴なオーラを放つ竜が現れる。

その体躯は小さいながらも、身に纏うオーラは果てしない。

「師匠ツ」

そう、この小さな竜こそが、俺の師匠である『ティアマト』である。本来の大きさではないながらも、偉そうなところは変わりない。

『戯けッ誰が偉そうじや！ 実際に偉いのじや』

小さくなつたことで声まで幼い感じがする。

『全く、扱き倒すぞ。でもまあよい、今は同胞を救うことが先じや。

目覚めよ『リヴァイアサン』』

そういうながら、師匠は小さな魔法陣を展開し、『リヴァイアサン』の魂に張り付ける、

『ふむ』

直後、辺り一面に張り巡らされていた蜘蛛の巣は取り払われる。

『ではな、我が弟子よ』

そういつて、師匠は消えた。

『あ、あれ？』

また違う声がする。おそらく『リヴァイアサン』の声だろう。

『俺は、一体・・・思い出したツ』

と、独り言を呟く『リヴァイアサン』に話しかけた。

「なあ、正気に戻つたつてことでいいのか？」

『お前は、そうか、お前が助けてくれたのか。感謝する』

声は男のようで、爽やかな男声だつた。

「いや、助けたのは師匠なんだが、まあいい。アガレスに操られて大暴れしてたようだが、俺と契約してくれないか?」

『そうだな、わかつた。契約しよう。あの魔女には煮え湯を飲まなければ気が済まない。だが、気を付ける。奴も俺らの同胞だ』

「それって」

『よし、契約は終わった。俺の肉体も消えるだろう』

「ああ、助かる」

『俺の方こそ、迷惑をかけた』

そして、俺は意識が戻る。

『リヴィアイアサン』の精神世界から戻ってきた俺は、掴んでいた尻尾を離す。

すぐに、『リヴィアイアサン』の肉体は消滅していき、アガレスは顔を歪ませた。

「また邪魔をツ、もう許さない。次会ったときは必ず、あなたを墮とす」

その後、アガレスは消えた。今度こそ撤退したのだろう。

「バサラさん」

ゆんゆんが俺のほうを見た。

「終わつたぜ」

「はいっ!」

気づくと、俺は『夜刀ノ神』を解除し、嬉しそうに返事をするゆんゆんを再び抱きしめていた。